る問題を究むるに際して、吾等の前に既に試みられたる明確にして組織ある企を有することは至大の幸福である』と。之を基礎として異る立場の異る見方を加ふることによつて、より完き眞理に近づくことが出來るからである。かくてジェレミー・ベンサムの思想史上に殘した功績は永く消ゆるの時はないであらう。

第三章　英國思想史の過渡時代

第一節　緒論

茲に英國思想史の過渡時代とは、個人主義が全盛を經過して、將に凋落せんとしたる十九世紀中頃より、團體主義が不拔の勢力を据えたる千八百八十年頃迄を云ふ。思想消長の時期を確實に劃することは固より至難である、しかし千八百八十年代に於て、マルクスの學說は始めてハインドマン（H. M. Hyndman）により英國に紹介せられ、フェビアン協會は設立せられて活動の緒に着き、社會主義は組織ある一思想として、時代に受入られた。更に同年代に於てトーマス・ヒル・グリーン（Thomas Hill Green）はオックスフォルド大學の講壇に於て「自由」に關して新なる解釋を施し、プラトー及びヘーゲルの國家思想を述べつゝあつたのである。此の時期を以て團體主義の起點と目するは必ずしも不當と云ふことは出來ない。[1]

1) W. J. Ashley: Economic Organization of England, 1919. pp. 167-168.
L. T. Hobhouse: Liberalism, pp. 125, 219

抑々個人主義は千七百七十六年のアダム・スミスの富國論によりて始めて唱へられ、次で之を承繼するものに、ベンサムあり、マルサスあり、リカルドがあつて、其の基礎を固めたのであるが、之等四人の大立物の外に、所謂 Epigoni と稱せらるべき數人の學者がある。卽ちベンサムの門弟にジェームス・ミルの如き、リカルドの門弟にジョン・ラムセー・マッカロックの如きがあり、其の他ナッサウ・シニオルあり、ロバート・トレンズあり、ウィリアム・ソーントン等があつて、彼等の地位は固より上述の四人に比すべからざるも、彼等の研究と活動とは個人主義の基礎を固むるに與る所が多い。更に經濟學上の學問的勞作には屬せざるも、經濟學を平易に書き綴つて、之が普及に貢献したるものは偶然にも婦人に多い。例へばジェーン・マーセット夫人 (Mrs. Jane Marcet) の如き、ミス・ハリエ・マルチノー (Miss Harriet Martineau) の如き、フォセット夫人 (Mrs. Millicent Garrett Fawcett) の如き、何れも初學者の爲に經濟學の普及を爲したる功績は決して尠くない。更に注意すべきは千八百十五年に始めて、オックスフォルド大學に經濟學の講座が設けられ、新教授の任命せられたことである。次で二十八年にケンブリッヂ

に、三十二年にダブリンに教授が任命せられ、ロンドンの University college に經濟學教授として任命せられたのは前述せるマカロックである。之等の教授は何れも個人主義を奉ずるものであるから、彼等の勢力は既に傳統固き大學の中に迄浸入し、彼等は大學の講壇より其の宣傳を爲すことが出來たのである。[1)] 最後に擧ぐるも經濟學の普及に對して、多大の功績ありしは Political Economy Club である。此の會は千八百二十一年四月十八日トゥーク (Thomas Tooke) の主唱に基き創立せられたもので、ジェームス・ミル之が會則を起草し、健全なる經濟學の原理に反する思想の行はるゝや否やを注意し、正統派の原理の宣傳を爲すを目的とし、會員に當時學界の名流を網羅し、其の活動は經濟學を普及せしめ、立法に影響したること頗る顯著である(註一)。

かくの如くして個人主義は漸次輿論に吸收せられたので、嘗て一作者は Westminster Review に於て『千八百十八年迄經濟學は少數の哲學者以外に、之を知るなく之を語るものなかりき。立法は其の原則に從はざるは固より、却て日に益々之より遠ざかりつゝありたりき』と云ひしもの『千八百二十年代に於

1) W. J. Ashley: "Present Position of Political Economy," p, 4. in Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre, I. Teil 1908

てはミルをして『千八百二十年トゥークによりて起草せられ、Alexander Baring によつて、院内紹介せられたる倫敦商人の自由貿易請願、並びにリカルドの院内に於ける高貴なる活動に依りて、經濟學は非常なる勢を以て公共の問題に適用せられつゝあり』と云はしめた次[1]で千八百三十二年にはコールリッヂをして『マルサス一派の原理は遂に全く英國知識階級の心を占領し了せり』と嘆ぜしめ[2]、更にヘンリー・シヂウィック（Henry Sidgwick）をして『千八百四十六年の穀物條例廢止に伴へる經濟界の繁盛は、實業家をして自由貿易論の淵源たる抽象的推理に、強き印象と此の上なき立證とを與へたり』と云はしめた。之を要するに、千八百十八年に於て未だ微々として認められざりし個人主義の經濟學は、千八百五十年代に於て今や不動の權威を有するに至り、其の如何に當時の立法に反映せるかは、サー・ローランド・ウィルソン及びダイシー教授の研究に詳である[3]。

註一　昨年は恰も其の創立百年に相當するので、マックミラン會社より百年間に於ける會員の名簿、討論の題目等が編纂せられて Political Economy Club と題して出版せられた。

1) J. S. Mill: Autobiograpy, 1873. p. 57.
2) W. J. Ashley: "Present Position of Political Economy" p. 4.
3) Sir Roland K. Wilson: History of Modern English Law, 1875.
A. V. Dicey: Law and Public Opinion in England, 1917

個人主義は十八世紀中葉に於ける産業革命初期の社會狀態を背景として出現したるものである[1]。然し十八世紀中葉に於て必要とせられたる思想は必ずしも十九世紀の中葉に於ても、亦必要とせらるゝものではない。前時代に個人主義の出現を促したる本質的要求は、後の時代に於て更に其の凋落を強むるものたるやも圖られない。況んや個人主義は一個の社會思想としては、數多の缺點を包有する。此の缺點は學者の研究によつて、夙に感知せられたものではあるが、特に之を曝露せしむるに與つて其の凋落を早めたるは、勞働問題の出現である。産業革命は十九世紀初期に於て、驚くべき社會的變動を惹起し、二十五年間の大陸戰爭は此の變動を倍加せしめ、英國歷史に空前の動搖は起つたのである[2]。勞働者の憐むべき境遇は作られ、勞働者階級は固定した。此の客觀的事情に加ふるに、此の境遇は『自己の安逸を求むる心よりに非ずして、『人として甘受すべきに非ず』とする勞働者自身の自覺と、之を默視するは『人としての本分に反す』となして彼等の爲に奮鬪せんとする勞働者以外の人々の自覺とが伴つて、所謂勞働問題を生ずべき條件は充分完成したので

1) 本書 62—63 頁參照
2) M. Beer: History of British Socialism. vol. I. 1919. pp. 98-99.

ある。

此に於て新なる社會事情に適合すべき各種の思想と運動とは起つた。個人主義が漸く其の地盤を固めんとしたる時、既に之と踵を接して反對思想は勃興して個人主義を包圍の裡に陷れた、之れ卽ち前期の社會主義チャーチスト運動、勞働組合運動、勞働立法運動である。而して個人主義と自然主義とは、本來抱合すべき必然的の關係を有するものではないが、十八世紀に生じたる個人主義は自然主義の基礎の上に立つて居た。此に於て個人主義は前記の反對思想の外に、別に理想主義（註一）の攻擊を受くるの苦境に立つたのである。之等の諸思想は相互に何等の連絡なく統一なく、寧ろ相互に矛盾し反撥すべき本質を有する。然るに拘はらず唯個人主義なる共同の敵を圍んで、之に攻擊を集中した。彼等のあるものは著しく急進的である、其の或るものは著しく保守的である。然し其の急進たると保守たるとは、何れも個人主義に對する反動より來れるものである。之れ彼等が未だ前時代の影響より蟬脫せざる所以にして、而して未だ後期の團體主義に見るが如き建設的の組織を有する

るに至らない。個人主義と團體主義との中間に位して、之が橋梁の地位を有する。之れ吾人の所謂過渡時代の思想と稱するものである。此の混沌たる過渡時代の矛盾に面接して、或る程度に之が矛盾を體驗し、或る程度に之が矛盾を征服して、個人主義を團體主義に引渡したるものが、卽ち彼のジョン・スチュアート・ミルである。本章は後章に於てスチュアート・ミルを論ずるに際しての云はゞ一篇の序論にして獨立の研究と目すべきものではない。

註一　本文に云ふ團體主義の意味に關しては五九頁の註三參照。自然主義及び理想主義の意味に就ては同じく一四七頁參照

第二節　社會主義

私有財產と自由競爭とを基礎とする個人主義が、漸く其の形體を整へんとしたるとき、既に私有財產制度の撤廢を唱ふる社會主義は、之と踵を接して、十八世紀の末に發生したのである。元來社會主義的思想の淵源は古く、遠く古代の霧の中に失はれ、人類に貧と涙とが生じたる其の時に始まると云ふ。[1] 然

1) Achille Loria: Contemporary Social Problems, 1911. p. 83.

し吾人の所謂眞正の社會主義は、フランス革命以後産業革命を背景として現はれたのである。フランス革命の思想は所有權を認むるや否やに就ては、二つの異る傾向を有したるが如くである。例へば Morelly, Mably の如きは、財産の私有は、此の世の惡德の源なるを以て、之を共有にせざるべからずと唱へて、社會主義的意見を述べ、革命期に入つても Babeuf の如きは所有の平等を唱へて千七百九十六年五月將に叛亂を起さんとした事がある。此の如く革命思想の中には、社會主義の思想を見出すことが出來る、しかし大勢は所有權を認むるに傾きルソーの如きも所有權は市民權の内最も神聖なるものなりと云ひ（註一）、同じく革命思想の別派と目すべき重農學派も亦、私有財産制度を以て自然秩序の花なりと稱した。[1] 故に千七百八十九年の人權宣言の第十七條に於ても、所有權は神聖にして侵すべからざるものなるを以て、何人も之を奪はるべからず云々とある。之れ卽ち此の革命が自由を認めたるも、平等に及ばずとせられ、又持てるものの革命たるも、持たざるものの革命に非ずと稱せらるゝ所以である。

1) Gide and Rist: History of Economic Doctrines, p. 6. note

註一 ルソーが社會主義者たるや否に付ては異說がある、此には "Grande Encyclopaedia" 中の Economie Poilique (1755) に依つた。—Gide and Rist, History of Economic Doctrines, p. 199 note.1

然しフランス革命が私有財産を是認したるは、必ずしも論理的に必然の因緣があるのではない、革命思想の中には、將來發展して社會主義を産むべき萠芽を藏する。第一に、私有財産の是認は自由平等なる標語より來る、其の時其の所に於ける結論なりしやも知れない、然し之れ唯一時其の形を托したるに過ぎないので自由平等と云ふが如き根本的の要求は必ずや、新なる時新なる所に於て再び新なる表現の形色を捉ふるに相違ない。況んや革命は古き傳統の權威を破つて、自由に價値を判斷せしむる傾向を馴致した、之れ其の思想の内容にも增して、新なる思想の爲に路を拓いたものである。革命が私有財産を肯定したるは、唯其の論理的必然の結論に至るの遑なくして、半途に停止したるのみ、早晩此の中より私有財産に反對する思想の表はるべき運命を有する。[1]

第二に革命思想の源を爲したるジョン・ロックは私有財産を辯護して、財産は

1) Werner Sombart, Sozialismus und Soziale Bewegung, 1908. s. 34.

過去の勞働の成果なるが故に之を認むべしとなし、重農學派も亦之と同一の論據に立つて、之を認めんとした。私有財産其のものを擁護するの根據を、勞働に求むるの思想は、却て勞働せざるものに、財産の所有を認むるに、反對する思想を生む可能性を有す。ゾムバルトが共産主義は革命思想の正當なる相續人なりと云へるは此の間の消息を云ふに外ならない。[1] 此に於て革命思想に養はれた幾多の社會主義者輩出するに至つた、之れ卽ち Godwin, Condorcet, Saint Simon, Fourier, Louis Blanc, Proudhon, Cabet, Robert Owen 等で、エンゲルスの所謂空想的社會主義者と稱せらるゝ一群の思想家である。[2]

空想的社會主義はマルクス、エンゲルス等の科學的社會主義と比較して、二つの點に於て區別せらる。一は將來の社會を畫くに至りし徑路であつて、後者が普遍妥當的の研究に依るに反し、前者は自然に與へられた獨斷に依る。第二には其の理想實現の方法に於て異る。後者が階級の團結に依つて、其の實現を圖らんとしたるに反し、前者は各個人の啓蒙によつて、之が實現を期待するのである。何故に初期の社會主義が空想的たりしかは、其の流出したる

1) Werner Sombart: Sozalimus und Soziale Bewegung, 1908. s. 46.
2) Friedrich Engels; Die Entwicklung des Sozialismns von der Utopie zur Wissenschaft, 1882.

革命思想の性質を檢するによつて、之を解するを得る。元來フランス革命の思想は二つの淵源を有する、一は自然法より來る目的觀で、一は自然科學より來る機械觀である。此の時代の社會主義が理想を描くに獨斷的たりしは、革命思想の目的觀より來れるもので、理想實現の方法に就て依然として個人に囚はるゝは、機械觀より來る結果である。個人主義經濟學も亦始めはフランス革命思想と共同の地盤の上に成長したものである。故に自然法より來る目的觀と自然科學より來る機械觀とを併有した、しかしスミスよりベンサムを經るに及んで、目的觀は漸次影を潛めて、全く機械觀のみの上に立つに至つた。[1] 此の關係が空想的社會主義と個人主義經濟學との異同を語る點である。二者が共に個人に着眼するは機械觀を共通に有する結果で、唯前者は尙目的觀を有するに拘はらず、後者は機械觀のみなる結果、二者の傾向に差異を來すに至つた、此の間の消息を最もよく語るものが、ゴドウィンとマルサスとの論戰である。[2] 科學的社會主義も亦全く機械觀の上に立つことは、個人主義と其の趣を一にする、唯其の機械觀の基礎たる自然科學を異にするのみである。[3] 個

1) 本書 35-43 頁
2) Roylance Kent: English Radicals, 1899, pp. 216-217.
3) 本書 167-168 頁

人主義が空想的社會主義と異るが如く、科學的社會主義が空想的社會主義と異るも亦、其の基礎に機械觀の外に目的觀を有せざるの點に在る。而してマルクス、エンゲルス等が千八百四十八年「共產黨宣言」を公表して以來、空想的社會主義は其の光彩を失ひ、後方遙に其の形影を沒したのである。然し科學的社會主義が其の所論の精緻を求めて、自然科學的に偏し、却て人間活動の自由を沒却するに至れるを以て、最近新カント派の學者が目的觀と社會主義とを調和せんと試みるや、空想的社會主義は其の研究の方法に於て幼稚である、しかし往くべき理想を高く標榜する點に於て採るべきものありとして、久しく忘れられたる空想的社會主義は、再び新しき眼を以て看返さるゝに至つたのである。[1]

同じく此の時代の社會主義に屬するも、空想的社會主義と系統を異にせる一群の社會主義者がある、之れ卽リカルド派社會主義者 (Ricardian Socialist) と稱せらるゝものである。リカルドは價値の源が勞働にあるを說きて、所謂勞働價値說を述べた。[2] 然し自身は之によつて資本に對する報酬を傷つけんとす

1) Michael Tugan-Baranowsky: Der Moderne Sozialismus in seiner geschichtlicher Entwicklung, 1908.
2) A. C. Whitaker: Labour Theory of Value in English Political Economy, 1904. pp. 16–40.
Jacob Hollander: David Ricardo, 1810. pp. 66–70.

る意思なく、又現存社會組織を根本的に變更する學說なることを豫想しなかつたけれども、當時既に反資本主義的傾向は存在して居つたので、勞働こそ價値の源である、勞働者が全生產物を收得せざるは不當なりとする社會主義的思想に援用されたのである。彼等は既に餘剩價値とか勞働全收權とか云ふ語を用ゐて居つたので、遙かに後年のカール・マルクスに暗示を與へた所が尠くない、其のリカルドの價値說より出でたるの故を以て、リカルド派社會主義と稱せらる、其の主なるものとして次の五人を擧げることが出來るであらう。

Charles Hall: The Effects of Civilization on the People of the European States, 1805.
William Thompson: An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth, 1824.
John Gray: A Lecture on Human Happiness, 1825.
Thomas Hodgskin: Labour defended against the Claims of Capital, 1825
John Francis Bray: Labour's Wrongs and Labour's Remedy, 1833.

彼等の空想的社會主義と異なる所は、立論に獨斷を用ゐること尠く、現在社會の缺陷を說明するに、科學的方法を以てしたるに在る。之れ彼等が個人主

David Ricardo: Principles of Political Economy and Taxation, 1817 (Everyman's Library) pp. 5–6.
小泉信三氏"經濟學說と社會思想"第一章

義經濟より流出したるより來る當然の結果である。彼等と個人主義者とは社會組織に對する立論は正反對なるも、其の立論の方法に於て、其の社會觀の根本に於て、毫も異る所がない。彼等はリカルドの勞働價値說より出發したるのみならず、ベンサムの功利主義的社會思想の上に立つものである。[1] 就中ホールとタムソンとは熱心なるベンサムの門弟で、共に最大多數の最大幸福を主眼とする、唯何が最大多數の最大幸福たるかの見解に於て異るのみである。彼等が社會主義思想史上の地位は空想的社會主義と科學的社會主義との中間に位して、之が橋梁を爲したるに在るであらう（註二）。

註二 此の派の社會主義者は永く埋もれて人に知られなかつた、之れ蓋しミルの經濟原論が空想的社會主義者に就ては多く言ふに反し、リカルド派社會主義者には一言も言及して居なかつた爲である と云ふ。ミルの原論が經濟學界の權威たりし結果、ミル以後の人は空想的社會主義者を知るも彼等を知らなかつたのである。之れを地下より發掘して彼等の卓見を推賞したのがアントン・メンガー（Anton Menger: Das Rech auf den vollen Arbeitsertrag in geschichtlicher Darstellung. 1886. である、次でベーアが Geschichte des Sozialismus in England 1913. に於て之を述べ、メンガーの英譯に序文を書けるFoxwell により更に普及せらるゝに至つたのである。

1) 本書 145—146頁

以上の如き社會主義的反資本主義的宣傳が、實際に表れたるもの、卽ちチャーチスト運動である、元來フランスに於て革命を迎へたるものは第三階級のみなりしに反し、英國に於て革命以前に改革を要望したるものは、第三階級と第四階級との二つであつた。此の二つは相聯合して議會の改革を主張してフランス革命を迎へたのである。革命後の反動を經過して、再び改革運動の擡頭し來れるとき、選擧權の擴張を唱へたるも亦此の二派の聯盟であつた。然るに千八百三十二年 Reform Bill が通過して、第三階級は選擧權を得たるも、第四階級は何等得る所なく、而して之以上當分選擧權擴張の意思なきを知るや、第四階級は第三階級の背信に對して含む所が多かつた。次で改革せられたる議會は千八百三十四年貧民救助法を改正し、outdoor relief を廢して indoor relief を復活するや、[1] 勞働者は之を以て第三階級の利己的立法なりとなし、勞働者全體が結束して、普通選擧を實施せしめ、勞働者階級の欲するが如く、社會の改造を行はざるべからずとなした、之れ卽ちチャーチスト運動の原因である。

彼等は人民憲章（People's Charter）なるものを起章し、次の六點について選擧

1) Cunningham: Growth of English Industry and Commerce, 1919, vol. II. pp. 743–745.
F. A. Ogg: Social Progress in Contemporary Europe, 1916, pp. 230–235.

法の改正を要求した。

(一) 成年男子の普通選擧權 Manhood Suffrage.

(二) 平等なる選擧區 Equal Election District.

(三) 議會の每年開會 Annual Parliament.

(四) 議員の財產資格の撤廢 Abolition of Property Qualification for Members of Parliament.

(五) 無記名投票 Vote by Ballot.

(六) 議員の俸給支給 Salaries for Members of Parliament.

此の運動は十年間幾多の消長があつたけれども、憲章の內容については異る所がない、之れ卽ち彼等が Chartists と稱せられ、此の運動が Chartist Movement と名づけらるゝ所以である。

彼等が何故に議會の改造に熱心なりしかは興味ある問題である。凡そ勞働者階級が自己の境遇を改善する方法は三個に分つ事が出來る、第一は資本家との間の集合協約 (Collective bargaining) による勞働條件の改善である。第二は議會の改造をなして、勞働者に有利なる立法をなさしめんとするもので、第三は議會政策に失望して、革命的方法によつて勞働者の社會を建設せんとす

るもの、サンヂカリストの方法卽ち之である。チャーチストが何故に集合協約の方法を取らざりしかと云ふに、彼等の大部分が不熟練職工なりしと、此の十年間は不景氣の時代なりしを以て、雇主との集合協約に多くの期待を繫ぐを得ざりしに依る。而して彼等が議會改造に絕望して、革命的手段に訴ふるには尙多くの過程を經過したる後でなければならない。當時の勞働者が議會の改造に失望せざりしは、飽迄も英國式たる所以であつて、千八百三十二年迄行動を共にしたるベンサム一派の思想の惰力によるものと解すべきである。之を要するにチャーチスト運動の目的は、普通選擧の實施を求むるにあつた、しかし更に根本の目的は勞働者階級が政權を握りて、社會の改造を爲さんとするにある。その單に政治運動に止まらずして、社會問題的背景を有したるは、彼等の中心人物たる William Lovett (1810—79), Henry Hetherington (1792—1849), O'Brien (1805—1864) 等が皆、ロバート・オーエンの門弟たりし事を以て之を知る事が出來るであらう。

今簡單に運動の經過を述べんに、千八百三十六年 London Workingmen's Asso-

ciation なるもの成立し、會の目的としてあらゆる合法的手段によりて、凡ての階級に平等の政治的社會的權利を與ふる事を掲げた。而して千八百三十七年の總選擧に於て、會員は檄を飛ばして、普通選擧に賛成する議員を選擧すべしと宣傳し、同年 Birmingham Political Union 之に加はり、千八百三十八年五月八日 Willam Lovett は前記の憲章を起草して之を公に發表した。千八百三十九年初めて憲章は議會に請願せられしも否決せられ、更に千八百四十二年五月再び院内に請願せられた。此の時其の請願書に署名せるもの約三百萬人、書類の長さ六哩に及び、三十人の勞働者が之を擔ひて院内に運べりと云ふ。然れ共此の年も亦有名なるマコーレーの反對演說に逢ひて否決せられた。此の間英國全土に亘りて、盛んなる示威運動と暴動とは各所に起つた。元來チャーチストの中には二つの潮流があつて容易に調和せず、一は Lovett の Moral Force Party にして、他は Feargus, O'Connor の Physical Force Party である。此の二派の分裂は運動の衰亡を導き千八百四十八年歐洲全體が動搖したる時、再びチャーチストは四月十日を期して、六百萬人の署名せる請願書を提出

せんとしたるも、ウェリントンの軍隊に阻まれて成功せず、此年を以て運動は遂に分裂瓦解した。

チャーチスト運動は如何なる效果を齎したるかと云ふに二つを數ふる事が出來るであらう。一は政府及び資本家の反省を促がしたる事であつて、彼等の運動は勞働者なる階級が、無視すべからざる社會的威力を有する事を知らしめた。千八百四十七年の工場法改正、千八百四十六年の穀物條例の廢止の如きは、明かに此の運動の效果の現れたる者と見るべきである。第二には勞働者階級をして階級的自覺を强めしめ、彼等の知識を增し社會運動に訓練を與へた事である。而して運動自體は僅に十年間にして消滅したるも、彼等の主張したる六點は其の後に於て漸次實現せられたからして此意味に於ても運動は無意味でなかつた(註三)。

此の運動が四十八年に消滅したる理由は、一は之より先き既に適當の指導者なく、組織整頓せず、思想亦一致しなかつた爲め、内部の結束始めより堅くなかつたのと、一は上層階級が勞働者に有利なる立法を漸次行ひたると、經濟界

の景氣回復して、之より千八百七十二年迄は英國工業の全盛期であつたので、勞働者は集合協約により其の地位の向上を企て得たからである。之を要するに初期の社會主義は殆個人主義の確立と時を同じくして其の根本立脚地に疑を挿み、チャーチスト運動は之等の反資本主義的思想が、既に一部思想家のものに非ずして、勞働者階級に漲れるものなるを示した。しかし初期の社會主義は學問的體系としては尙精緻を缺き、チャーチストは偉大なる目的の爲に戰ふには、未だ其の自覺充分ならず、訓練に於て缺くる所が多い、共に其の大成を八十年代に俟たなければならない。卽ち個人主義に滿足せず、而も徹底に缺くる所あるは、其の過渡時代の產物たる所以である。

註三　チャーチスト運動に關しては最近に於て文獻が續々現はれた、其の主要なるものは次の如くである、より詳細なるものはホベツルの書物の卷尾を參照ありたい。

Thomas Carlyle: Chartism, 1839.
R. G. Gammage: History of the Chartist Movement, 1894
F. F. Rosenblatt: Social and Economic Aspects of the Chartist Movement, 1916.

B. W. Sisson: Decline of the Chartist Movement, 1916.
Mark Hovell: Chartist Movement, 1918.
M. Beer: History of British Socialism, vol. I. p. 280 ff. vol. II. pp. 1-199.
上田貞次郎氏　階級鬪爭としてのチャーチズム（商學研究第一卷第一號）。

第三節　勞働組合

勞働者が團結の力によつて、自己の境遇を改善せんとするは、フランス革命以前に始まる。其中歷史上に最も有名なるものは、London Corresponding Society である。[1] 此の會は千七百九十二年蘇國の靴工 Thomas Hardy によつて作られたもので、倫敦のみにて會員の數三萬を越えたりと稱せらる。之が中心の人物に、Horne Tooke, Thomas Paine, ゴドウィンの親友 Thomas Holcroft がある。此の會の倫敦支部の勞働者に對して、John Thelwall が講義をした時の教科書が卽ち、ゴドウィンの「政治的正義論」(Political Justice, 1793) である。之等の急進的なる勞働者の會合は、官憲の恐怖を招き、千七百九十四年 Habeas Corpus Act は停止せられて中心人物は捕へられ、次で、千七百九十九年の結社禁止法 (Anti-

1) Graham Wallas: Life of Francis Place, 1919. pp 20-28.

Combination Law) によつて會自身も解散を命ぜられた、然し此の會は英國勞働運動史上に於ての最初の主要なる活動であつて、後年の勞働運動の首領は皆此の中に在つて、思想上の訓練を受け、やがて各地方に四散したのである。ベーアが London Corresponding Society を以て Labour leader の Seminary と稱したるは至言と云ふべきである。[1]

ウォーターロー大戰後の產業不安に際して、勞働者の團結は最も必要を感ずるの時であつた。然るに英國勞働者は前述の結社禁止法(千七百九十九年に制定せられ、千八百年更に改正せらる)によつて組合組織を禁止せられて全く活動を束縛せられて居たのである。元來千五百四十八年以來勞働條件改善の爲にする團結は禁ぜられて居たのであるが、此の時代には勞働條件は治安判事の決定するものであつたので、勞働條件變更の爲めに徒黨を作るは、卽ち裁判所の命令に背反するものなりとの見解の下に、處罰せられたのである。故に裁判所の命令を遂行するを目的とする團結は、決して禁止せらるゝことはなかつた。之れ此の時代の立法が千七百九十九年及び千八百年の結社禁

1) M. Beer: History of British Socialism, vol. I. p. 125.

止法と區別せらるゝ所以である。[1] 此の時は既に裁判所が勞働條件を決定する慣例は、久しく絕えて居たので、若し裁判所の命令に背反すとの趣旨ならば團結を禁止するの理由はなかつた。卽ち結社禁止法は全く之と別個の理由を以て、フランス革命に脅かされたる反動として、一切の人の集團を危險なりとし之を嚴禁したるものである。此に於てか此の時以後の勞働者は勞働條件を決定する治安判事を有することなく、而して彼等自ら團結して之が改善を期することを得ず、頗る同情すべき地位に陷つた。

此に於て勞働運動の第一の目標は、先づ結社禁止法の廢止を迫るに在つた。例へば戰爭後作られた Humpden Club は普通選擧の實施、穀物條例の撤廢、結社禁止法の廢止を要求し、婦人勞働者によつて作られたる Female Reform Association も亦、千八百十八年七月五日の會合に於て、穀物條例と結社禁止法との廢止を要求した。此の以後勞働者の要望は實に此に集中せられたのである。會々勞働運動者中に Francis Place, John Grast の如き人物現はれ、下院議員 Joseph Hume と共に、巧に閣員ピール及びハスキッソンを導きて、遂に千八百二十

1) Sidney Webb: History of Trade Unionism, p. 57 ff.

四年の法律に依り千八百年の結社禁止法を廢止した(註一)。此の事は法制史上頗る重大なる事件であつて、一新紀元を劃すべきものたるに拘はらず、多く人の注意する所とならなかつたが、會々束縛を脱せる勞働者が各地方に於て猛烈にストライキを爲すに及び、始めて資本家の驚愕を買ひ、千八百二十五年前年の法律を廢止して稍々苛酷なる取締を設くるに至つた。然れ共勞働者の團結を不法ならずとする根本原則は、之が爲めに變更せらるゝことなく、永く桎梏の下に苦しみたる勞働者は、始めで自由に解放せらるゝに至つたのである。

註一 プレース等が巧に此の法律を作らしめたる消息は頗る興味がある、事の詳細は Wallas: Life of Francis Place, pp. 197-240; Webb: History of Trade Unionism, pp. 57-107 に明である。

此に興味あるは勞働組合に對する個人主義者の態度である。由來團結の自由なるものは個人主義の立場よりして、二樣に之を解釋することが出來るであらう。即ち若し當事者の意志の自由に重を置かば、當事者が團結を作らんとするに、之を禁止するは當事者の自由を妨ぐるものであつて、團結の自由

を認むるは即ち、個人の自由を認むるより來る當然の歸結なりとするは其の一說である。然れ共亦反面より之を見れば、既に多數が集まりて團結を爲す以上は、必ずや第三者(勞働者の場合には雇主又は非組合員なる他の勞働者)又は當事者自體を拘束し、之が自由を抑止するものと云ふべく、此の點に重きを置かば結社を禁ずるは即ち、個人の自由を高調する個人主義の必然の結論なりとも解釋し得られないではない。かくの如く二樣に解釋せらるゝ結果當時の個人主義者が勞働組合に對して採りたる見解は必ずしも明瞭ではなかつた。此の微妙なる不統一を表現せるものが即ち千八百二十四年と千八百二十五年の法律である。此の二つの法律は一見其の差異を發見するに苦しむ程に類似せる外形を有するも、前者は原則として勞働者の團體的行動を公認し、唯例外の場合に於てのみ之を處罰したるに反し、後者は原則として之を不法として、唯例外の場合に於てのみ之を合法とした。此の如き立法の差異は即ち個人主義の二樣の解釋が、此に法律の上に表はれたるに外ならないのである[1]。

1) A. V. Dicey: Law and Public Opinion, pp. 150-158, 190-210, 467-476.
Edward Jenks: Short History of English Law, 1920, pp. 323-339.

然し此の二つの法律は、假令微妙なる差異を有するとも、千八百年の結社禁止法を廢止せるものなる點に於ては、毫も根本趣旨を異にするものではない。此の立法が社會思想史上に重要なる意義を有するは、卽ち此の點に在る。假令組合の行動に付ては幾多の制裁を付するも、組合自體は之によつて適法とせられたのである。かくの如くして認められたる勞働組合は一の團體として漸次大をなし、個人の爲し能はざる幾多の職能を發揮し來れるを以て、無言の裡に團體の重要を宣傳したると同じく、團體主義の傾向を助長するに大に力があつた。更に又若し組合の自由を認むれば、其の集團が第三者たる組合外の勞働者の自由を侵害することあるを覺悟しなければならない、此の如き場合にも結果に於て組合の活動が勞働者全體の幸福とならば、其の意思を拘束すること亦止むを得ないものと認めたものと云へる。此の事は既に「自由」なる空言に囚はるゝことなくして、其の眞に勞働者に齎す結果に着眼したものとも云ひ得る、若し果して然らば勞働者の幸福の爲ならんには國家が勞働法規を制定するも亦認めなければならないことにならないか。始めは個人

の自由を認むるより出發して、遂に組合なる人の集團は認めらるゝに至つた。此の事は個人主義の破綻が奈邊に潛めるかを示すと共に、其の遂に如何なる所に歸結すべきかを暗示する。此の如く看來らんか、組合公認の事たるや、隱密の裡に個人主義と團體主義との推移を表すものと云ひ得る。千八百二十四五年の立法は、單なる法制史上の一事件たるに止まらない、此の中に時代の變化は脈々として躍動しつゝあるのである。

組合は千八百二十五年の法律により解放せられ、自由なる活動を得ることとなつたけれども、此の時以後は不景氣が續いた爲に、組合の活動は充分なることを得なかつた、然るに千八百三十年市場の景氣回復するや、組合運動に新たなる傾向現るゝに至つた。元來之より以前の勞働組合とは、一種類の職業に從事する勞働者が、地方的又は稀に全國的に結合するに過ぎなかつたのが、千八百三十年所謂 "New Unionism" の現るゝや、苟くも勞働者たらば、其の職業の如何を問はず、全國すべて之を一團となし、勞働者の勢力を强めんとした。此の種の計畫は John Doherty の企てたる所にして、Grand General Union of the

United Kingdom を作り、次で千八百三十二年更に名を改めて National Association for the Protection of Labour を作りしが、何れも大なる成功を見ずして止み、次で千八百三十四年ロバート・オーウェンは同じく此種の計畫に着手し、Grand National Consolidated Trades Union なるものを作り、約五十萬の組合員を含み、之によりて總同盟罷業をなし、やがて勞働者によりて産業の管理をなさんとする遠大なる計畫を抱いた、當時オーウェンの此の擧が如何に注目を惹きたるかは、當時の倫敦タイムスの論調によりて之を知ることが出來るであらう、然れども此の計畫も亦一年間繼續することなく、オーウェン等の社會主義者、理想家は徒に勞働者の不信を買ふに止まりて、New Unionism は挫折し、再び各 Trade Union は資本家との集合協約によりて、賃銀、時間等の勞働條件改善の舊路に復し、千八百三十八年より、十年間のチャーチスト運動ありし場合にも、熟練勞働者たる彼等は此の政策を棄つることなく、超然として傍觀者の態度を取つて來たのである。

穩健なる勞働組合の運動に入れる後と雖、必ずしも雇主との交渉が凡て圓

滿であつたのではない、例へば千八百五十九年の倫敦の建築勞働者のロック・アウトの如きは、最も激烈なる勞働爭議であつた。又組合は千八百二十五年の法律に滿足したのではない、同年の法律は組合を合法と認めたけれども、之れ唯名義上組合の禁止を解いた丈で、組合員が勞働爭議に際して、執る行動に對しては、一々嚴重なる制裁が伴つた、之が爲めに結局組合自體の存在を無用ならしむることになるのである。此に於て勞働運動は第二段の目標として名實組合をして自由ならしめんと企てたのである註二。又組合は役員又は組合員より財産の侵害を受くる場合にも、法律の保護を求むる事が出來ないので、此の方面の立法も亦彼等の求めてやまざる所であつた。千八百六十七年 Royal Commission 設けられ、約二年間勞働組合に關して調査したる結果、千八百六十九年 Trade Union Funds Protection Act. 千八百七十一年 Trade Union Act. 千八百七十五年 Conspiray and Protection of Property Act. が制定せられ、此に於て始めて組合は財産の安全と行動の自由とを完全に獲得することを得たのである。恰も全國組合の統一をなす Trade Union Congress は、千八百六十八年始

めて第一回を催し、十萬の職工を代表したりしが、千八百七十三年開きたる第五回の大會には、七十萬を代表し、同年 Joseph Arch を首領として Agricultural Labourer's Union なる組合は農業勞働者七萬を有し、翌七十四年勞働者階級は始めて Alexander Macdonald, Thomas Burt なる二人の代表者を議會に送る事を得、同年又 Women's Trade League 始めて成つた。之等の時期は所謂過渡時代の末期に當り、既に團體主義の時代に接近するも、之等の活動は以て如何に組合の勢力が增加したるかを示すものである。

註二 勞働組合に關する立法は凡そ三階段に分たる、一は組合自體を不法なりとする時代で、英國に於ては千七百九十九年、千八百年の立法に依り、千八百二十四五年迄が之に當る。第二段は組合自體は不法に非ずと認むるも、組合員の行爲に對して、嚴重な取締を爲して、其の行動を束縛する結果、實際上に於て組合の活動を抑制する時代である。英國に於ては千八百二十四五年から千八百七十五年迄が之に相當し、我國の治安警察法十七條は此の時代の立法に相當する。第三階段は組合員の行動をより寬大ならしめ、名實組合をして自由ならしめんとするもので、英國に於ては千八百七十五年以後が之に當る。英國以外佛獨諸國も亦大體此の徑路を通れるが如くである、尙 Dicey: Law and Public Opinion, pp. 467-476 及び拙著「勞働問題研究」四〇八—四一一頁參照。

勞働組合の活動に對しては個人主義者は始よりして懷疑的の態度を持して居た、之に對する彼等の標榜したるものは賃銀基金說 (Wage-fund theory) である。卽ち一定の時一定の所に於ては、賃銀の爲に支拂はるべき一定の基金がある。此の基金を勞働者の數にて除したるものが、卽ち一人當りの平均賃銀である。若し組合の團結の力によつて賃銀を增加し時間を減少せしむれば、之によつて或は基金の減少を生じ、或は非組合員勞働者の賃銀の減少を來すのみであるとなし、組合の活動は勞働者相互の反噬であるとなした。若し勞働條件を改善せんとなさば、そは一は勤勉によつて基金の增加を圖るか、或は產兒制限を爲すことによつて勞働者の數量を減少するの外なしと斷じたのである。然し組合多年の活動は單に組合員の境遇を改善したのみならず、非組合員が之が爲めに悲境に陷りたりとの實績を示さない。此の事は事實に於て賃銀基金說の誤謬を示せるもので、個人主義者の受けたる一の打擊である。更に組合の活動は漸次勞働者の勢力を伸張し、やがて選擧權の擴張を要

求し漸次自己に有利なる立法を要望するは逆睹するに難くない、然らば組合の活動を通じて、團體主義の時代は促進せられつゝあると云ふべきである。更に組合の活動の結果が齎す影響にも增して、個人主義の受くべき打擊は、組合の活動自體である。個人の爲し能はざる職能は、いかに個人の集團によつて爲さるゝかを示すことになつて、組合の活動は無言の裡に團體主義の宣傳を爲しつゝあると等しい。過渡時代の消息は此にも見出すことを得るのである。

第四節　勞働立法

勞働組合は主として成年男子の熟練勞働者の組織する所である。從つて未成年又は女子の勞働者は、之が恩惠に浴する事が出來ない。然るに未成年者は其の精神及び身體の成長の半途に在るが故に、又女子は男子に比して脆弱なるのみならず、其の健康は次代の健康に影響する所が尠くないと云ふ點で、一般成年男子と自ら異るものがあつた。此に於て組合の恩典に浴するこ

との出來ない之等の人達の保護の必要は、當事者の幸福の爲のみならず、別に一般公衆が之より受くる影響と云ふ特種的原因も加はつて、一層其の切實を感ぜられたのである。當時勞働者の中に如何に未成年者又は女子の多かりしかは、シャフツベリー卿が千八百四十四年下院に於て、十時間法案を辯護したる時の報告によつて、之を知ることが出來るであらう。即ち千八百三十九年に於て、British Empire の工場職工數四十一萬九千五百六十名の內、二十四萬二千二百九十六名、即ち約六割は女子にして、其の中十一萬二千百九十二名は、十八歲以下の未成年者である。綿工場に於ては、全職工の五十六パーセントは女子なりと云ふ。之等の職工の生活が如何に悲慘を極めたるかは Cheyney, Gibbins, Engels, Hammond 等の詳細に說く所であつて、今此に再び之を紹介しない（註一）。

註一　拙著「勞働問題研究」三四三―三四六頁參照。尙當時の勞働者の生活に就ての參考書は同書三五八―三五九頁參照

一般に英國勞働立法の歷史として最も適當なるものは Hutchins and Harrison: History of Factory Legislation, 1911. である。又千八百二年以前に於て、中世以來幾多の勞働法規

はあつた。之等の法規の近世の勞働法規とは、全く其の性質を異にするもので、之に關しては Stanley Jevons: The State in Relation to Labour, 1886, pp. 34-36; W. J. Ashley: Economic Organisation of England, pp. 104-105, 168-169 等參照すべきである。

既に之等の勞働者が集合協約によつて、勞働條件を改善し得ず、而して其の保護は別に特殊的切實を加ふるものとせば、國家は法律の規定を以て、雇主と之等の勞働者との契約の約款に干渉を試み、勞働時間を制限し、就業年齡を制限し、徹夜業を禁止し、就業作業を制限しなければならない。然るに個人主義者は契約自由の原則を標榜して、雇主も勞働者も何れも自由を保持すべく、契約の內容形式に就て制限を加ふることに反對する。此に於て勞働立法の主張者は個人主義の思想と戰はねばならない。此の時の立法論者は主として勞働者以外の人々で、勞働者階級のものは、或は之に熱心に加擔し或は之に冷淡であつた。而して個人主義と勞働立法との經緯は、社會思想史上最も興味ある一節であつて、過渡時代の特質を說明する好典型である。

所謂勞働立法の起原は千八百二年に遡ることを得る。然し同年の法律及び千八百十九年の法律は弱者を保護すると云ふ Common law 傳來の精神の

發露とも解釋し得べく、又人道主義の發露とも言ひ得るので、最大多數の最大幸福を標語とするベンサム一派の思想とは、必ずしも牴觸するに至らずして濟んだ。此の事は千八百三十三年の立法に就ても亦大體さうであつた、所が千八百三十年 Richard Oastler が "Slavery in Yorkshire" と題する書物を公表して、輿論に訴ふるや、工場勞働者問題は資本家を攻擊し、新なる道德的秩序を作らんとする立脚地の上に形を採るに至つた。かくして同一の問題が從來の如く、單純に弱者保護の立場より見ることが出來なくなつた、個人主義者が眞劍になつて勞働立法に反對するに至つたのは此の以後である。次で千八百三十年より十時間運動始まるに當りて、此の關係一層具體的となり、個人主義と勞働立法との對立、此に始めて鮮明となるに至つたのである。

勞働立法に對する個人主義者の態度は、個人主義其のものゝ原理よりして、元より反對である。個人を元として國家なるものに別個の存在を認めざる彼等は、國家が干涉をなすが如きは認むる能はざる所である。斯の如き個人主義の根本原理より來る反對の外に、彼等が反對したる論據は所謂 Wage-fund

theory である。若し勞働時間を減じて賃銀基金の額を減ずれば、徒に勞働者の賃銀を下ぐるに止まりて、却つて勞働者の不利益となるであらう。而して Nassau Senior の云ふ所によれば、産業の利益は最後の一時間によりて得るものなるを以て、勞働時間を一時間減ずれば利益は失はるべく、一時間半を減ずれば産業は絶滅すべしと。由來個人主義者が社會問題に對して、用ひたる反對論據は常に賃銀基金説にあつたのであるが、勞働立法に關しても亦此の學説を適用して反對した。

個人主義者に反對して勞働立法を主張したる者は主としてトーリー黨に屬する人々にして、之に勞働運動者の一部が附屬した。元來トーリー黨は國家の Paternalism を主張するものなるを以て、同情すべき勞働者の人々に恩惠を施して國王又は國家に對して感恩の情を寄せしむるは、トーリー黨本來の心持に合する所以である、又弱者を保護することによつて、自己の優越感を自覺して樂しまんとする心は、保守的思想家の持たないものではない。更に今や資本家と勞働者とは互に對抗して、國内戰爭の如き觀を呈しつゝある。若

し此の狀態に放任せば、秩序亂れて國内不統一に陷るの怖れがある。故に勞働者に同情し彼等の反感を和げて、國内の統一を計るはトーリー黨傳來の政策に合する所である。斯くしてトーリー黨と勞働問題なる奇妙なる提携が始まつたのである。以上の如く述べ來るならば保守黨と勞働問題と云ふ組合せが、必ずしも無緣のものに非るを知り得る。況んや此の當時トーリー黨は新鮮なる分子を多數參加せしむることによりて、十八世紀末のトーリー黨とは頗る其の面目を異にして居た。即ち反對黨なるホイッグ黨が個人主義を標榜せる結果として、政治思想上は必ずしもトーリー黨に屬するに非るも、個人主義功利主義に反對するの故を以て、トーリー黨に屬したるものあること之である。此に於てか十八世紀末のトーリー黨は徒に保守頑迷なる政黨に過ぎざりしも、此の時代のトーリー黨には却つて進歩せる思想を有せる者ありて、ホイッグ黨よりも或點に於て時代に先んじて居たのである。

此の時トーリー黨の中にヂスレリーなる天才ありて、勞働問題が將來の重大なる問題となる事を看破し、之を捕ふることによりて、久しく逆境にありし

トーリー黨をして、回生の機運に向はしめ得べしとなし、自黨中の一群をして十時間運動の先頭に立たしめた、此の派を稱して Young England Party と云ふ。Richard Oastler, Michael Sadler, Robert Southy, Lord Shaftesbury 等其の主なるものである。[1] サウシーは嘗てコールリッヂと共に、フランス革命の思想に共鳴し、Pantisocracy なる共産社會を作らんと努力したる事あつたが、後一轉してトーリー黨に屬したるものである。[2] 彼は本來詩人である、しかし社會問題を最も早く注目したる一人にして、ダイシー教授は彼を稱して Prophetic Precursor of modern collectivism と云ふ。[3] シャフツベリー卿は最も頑固なる宗教の人にして彼が勞働問題に對する熱心は、一に資本家階級の功利主義に對する反感と、勞働者の生活に對する同情とより來れるもので、特に一定の社會思想を有する人ではない。彼自らは勞働立法の運動が奈邊に社會を驅りつゝあるかを意識しない、されど社會運動者中に斯の如き人ある場合に、運動を徹底する事が多い。運動の終局の方向と自己の之に對する地位とを、明白に意識せる者には躊躇と思索とがある、しかし卿にはかくの如きものがなかつた。「彼が今

1) M. Beer. History of British Socialism, Vol. II. pp. 179-180,
2) 〃 〃 Vol. I. pp. 120-123.
H. N. Brailsford: Shelley, Godwin and Their Circle, pp. 51-55.
3) A. V. Dicey: Law and Public Opinion, p. 215.

何處を歩みつゝあるかを知らざる者よりも遠く道を行くものなし」(No one goes so far as the man who does not know where he is going.) との言は、シャフツベリーに就て特に其の適切なるを感ずる。サドラーも社會思想に對して、必ずしも明白なる理解を有したるものではない、然し始めてリカルド等の經濟學者の根本思想を突きたる者は彼にして、此の人あるにより運動は個人主義との對立を明かならしむる事を得たのである(註一)。若し夫れ勞働運動者に至りては、トーリー黨とは社會に對する根本思想に於て、相去ること千里なるも今只十時間運動なる特定問題について、暫く彼等と歩調を一にしたるのみ、其の將來に於て袂を分つことあるは固より知るべきのみである。

註一 A. V. Dicey: Law and Public Opinion, pp. 223-232.
尙シャフツベリー卿に關しては Hodder: The Seventh Earl of Shaftesbury as Social Reformer., Gibbins: The Biographies of Social Reformers 等の中に卿と工場勞働立法との關係を知るべき材料が多い。

千八百三十二年勞働時間問題の爲に、議會に調査委員設けられ、サドラー之が委員長となつたが、同年の總選擧に於て落選し、シャフツベリー之に代り、議

會內に於ける運動を指導した。恰も穀物條例廢止の運動將に酣で、十時間運動と穀物條例とは進步黨と保守黨とが互に敵黨を攻擊する題目となつた。穀物條例廢止の宣傳に於ては、進步派は地主が地代を貪るが爲に、勞働者はパンの高さに苦しみつゝありと唱へて保守黨の地主に迫れば、保守派は資本家が利潤を貪るが爲に、長時間婦人及び少年勞働者を虐使しつゝありと稱して、進步派の資本家を攻擊した。前者に就ては保守派、後者に就ては進步派が共に不利なる立場に陷り、此の二者は千八百四十年代に政界を騷がしたる二大問題であつたが、千八百四十六年穀物條例廢止せられるゝと共に、翌千八百四十七年十時間法案は遂に議會を通過し、其の後多少の改正を經て千八百五十年に完全なる法律となつたのである。

十時間法成りて個人主義の熱心に主張せし契約の自由は破られた。之れ個人主義の第一の敗北である。更に此の法律を始めとして、今後續々成れる勞働法規は、皆何れも國家の干涉を認め、國權の擴張を齎すものに外ならない。然るに斯の如き國家觀念は、個人主義によりて說明し得ざるものなるを以て、

既に事實として國家の干涉にして增さば、之を說明し得る新らしき社會思想を求めなければならない。此の事は個人主義にとりての第二の打擊である。此の運動に參加せるものは、前述せる如く勞働問題なるものに對して一定の學說を有したのではない。只勞働時間を短縮せんとする個々的の問題として之を扱ひたるのみである。けれども假令運動者が扱ふ態度は個々的なりとしても、既に契約自由を排して國家の干涉なる事實を齎せりとせば、無言の中に時代は重大なる廻轉をなしつゝあるものと云はなければならない。固より後人の注目を惹くは、其の程度の加はり其の事實の重なれる後なるべきも、變化が知らざる中に既に進行しつゝありし事を注意せざるを得ない。此の進行を促進したるものは保守派である。彼等は偶然の行掛より勞働問題に盡力した、其の結果が保守派其のものの本來の要求と、反對の方向に走りつゝあるを自ら氣が付かなかつた。保守派は自ら知らずして勞働問題に重要さを與へ、社會の進行を急速度に驅りつゝあつた。思想史上に於ける十時間運動の興味ある所以は實に此の點にあるのである。而して保守派と勞働者

との提携は永遠に反對に向ひつゝある線が、唯一點に於て交叉したる關係である。其の聯盟は只僅かに時間短縮の一點にのみ保ち得べく、進んで所有權の廢止をも主張せんとする勞働者の要求と、封建時代の主從的觀念を維持せんとする保守派とは、早晩分るゝことあるは當然である、同舟の吳越を分れしむるものは、時の經過が事態を分明ならしむれば足るのである。此の問題に就ては保守黨が正しきに非ずして、進步派が行くべきに行かざるの不徹底なりしのみ。やがて此の三者が夫々其の立場を明かにするに及び、保守派と勞働者とは却て相提携するに至つた、之れ十九世紀の末期である。

勞働立法と關係しては居ないが、過渡時代を示す一の現象と言ふべきものは、經濟界に於ける會社の流行である。產業革命以後企業の規模擴大するに從ひ、個人の資本と能力とを以てしては、不充分なる事多く、ために續々として株式會社の設立を見るに至つた。此のことは鐵道の如き危險多き企業について特に然りであつた。政府は之が爲に千八百二十三年 Railway Company

Acts. を制定し、千八百五十六年より六十二年に亘り Joint Stock Company Acts. を制定し、之等の會社の爲に各種の便宜を與へた。此事は既に個人の力を以てしては爲し能はざるものあるを知らしめ、團體の必要を認めたるのみならず、斯の如き團體を解釋するに到底個人主義の不充分なる事を示したのである。彼等は法人擬制說なるものを以て之を說明したるも、擬制なる觀念は其の場合の少なき時に於てのみ首肯し得る、然し其の數の夥しき場合には、擬制なる觀念を以て說明するは首肯し難い。更に鐵道の敷設に就ては、必要ある場合には、個人の土地家屋等の所有權を侵害することをも認めた。斯の如くして國家が必要の場合に、私有財產權の侵害を許したるは、既に個人主義の思想と相反するものであつて、此事を甘んじて認めたる議會は、既に私有財產制度の絕對性を否認したると等しい。之を要するに會社の流行は、個人主義の不充分なる事を現し、新しき思想の來らざるべからざる事を促すに與つた、否新しき民衆の感じは來て居た、唯之を表現する思想の出現を俟つのみである。

第五節　理想主義

個人主義は社會事情の變遷に因り、前述の如き幾多の反對思想に出會した。之等の思想は經濟政策上の異說であつて、個人主義と同一平面に在る反對思想であるが、個人主義は其の基調たる思想上の關係よりして、別に理想主義と云ふ有力なる敵手を引受けざるを得なかつた。元來個人主義は自然主義と必然の因緣を有するものではない、然し十八世紀以來の英國個人主義は自然主義の上に立脚して居たのである。之に依れば我々の知識は感官に依つて得る經驗の集合であつて、經驗以外に別に我等に內在する先驗原理を認めない。若し果して然らば、我々は積極的に經驗を統一する精神の主體ではなくて、唯感官に依りて外部より經驗を受取る一個の機械たるに過ぎない。又若し我々に普遍妥當性を有する先驗原理が內在せずして、唯感官による經驗が卽ち智識を成すとするならば、感覺は各個人の主觀性のものであるから、智識の普遍妥當性を否定せざるを得なくなる、之れヒュームによつて導かれたる懷

疑說の由つて來る所以である。此に於て人格の權威を高唱せんとするもの又は懷疑說の結論に滿足せざるものが、進んで自然主義に反對したのである。

個人主義は又功利主義と必然の因緣を有するものではない。個人主義者は必ずしも功利主義者たるを必要としない、又個人主義は必ずしも最大多數の最大幸福の原理によつて、主張せらるるを必要とするものではない。然し十八世紀以來の個人主義は、卽ち功利主義と密接の抱合を爲して居たのである。功利主義は元來利他的傾向を說く高貴なる道德たるに拘はらず、不幸にも利己主義と誤認せられて、資本家の飽くなき貪慾を助長するものと解せられた。又功利主義は快樂說の上に立つ結果、價値の標準を物質の分量に置く唯物論たりとの批難は免るゝことが出來ない。此に於て人間に利己心以外より高き精神の存在することを高調せんとするもの、又は價値の淵源を人格に置かんとするもの相競つて功利主義を攻擊するに至つた。[1]

認識論上より前者の自然主義に對する反對を主として試みたる者は、スコットランド學派 (Scottish School) 及びコールリッヂ等であつて、倫理說の上よ

1) 本書 85-87頁 及び 113-116頁

り後者の功利主義に反對したるものがカーライル、ラスキン等である。スコットランド學派の思想は遙に後年のカントの思想と符合する所があり、其の他の人々は明に獨逸理想主義哲學の影響を受けたるものである。既に個人主義が自然主義及び功利主義と必然不可分の關係を有するものでないならば、以上の如き攻擊は必ずしも個人主義自體の崩壞を來さずとも濟み得る筈である。然し歷史上の個人主義は自然主義、功利主義と密接不可分の因緣を有したのであるから、以上の如き攻擊は個人主義の基礎を震撼せしめたのである。而して理想主義は單に個人主義と同一平面に在つて利害得失を爭ふ思想ではなくて、立體的の關係に在つて個人主義の立脚地を批判せんとするものである。個人主義の反對思想たる社會主義の如きも、此の點に於ては、理想主義の批判を受くべき立場に在る。此に於て理想主義の出現は、人と人との關係、人と物との關係に、新しき立場を作らんとするもので、其の影響は前三者に比して遙に偉大である。

理想主義の源は之をスコットランド學派に歸すべきである。此の學派の

建設者はトーマス・リード (Thomas Reid) であるが、稍リードに先つて同系統の思想を抱ける者にリチャード・プライス (Richard Price) がある。彼は Review of the Principal Questions in Morals, 1757. に於て我々には感覺を以て知り能はざるものを知る力あり、之れ卽ち悟性 (understanding) であると云ひ、何が善たるか惡たるかは自明の原理によつて、判斷し得るもので、其の原因を究むるも效ない、結局說明し得べからざるものに逢着する。善なる行爲をなすべきの義務は其れ自體義務として感ぜられるので、全く賞罰を離れて存するものであると云ふ。又或る行爲は正義の意識より出で、之を目的としたる場合に於てのみ道德的と稱することが出來、他の目的の手段として爲されたる場合には、如何なる時も之を道德的なりと云ひ難いと云ふ。是等の言は極めて斷片的であるけれども、遙にカントの倫理說を想はしむるものがある。[1]

トーマス・リードはアダム・スミスがグラスゴーを去るや、千七百六十四年彼の跡を襲うて道德哲學の敎授となつた。同年彼が著した Inquiry into the Human Mind on the Principles of Common Sense は英國思想史上に於て重要なる意

1) James Seth: English Philosophers and Schools of Philosophy, 1912. pp. 227–230.

義がある。彼も亦カントと等しくヒュームによつて獨斷の夢を覺されたものである。彼はヒュームに書いて曰はく、『私は形而上學に於てつねにあなたの門弟と公言する。私はすべての他の人を併せたよりも此の種のあなたの著作からより多くを學んだ。あなたの體系は其の各部が一貫して居るのみならず、一般に哲學者の間に認めらるる原理より正當に演繹されたものと私には見える。あなたが「人性論」(Treatise of Human Nature)に於て導いた結論が私をして疑の念を起さしめた迄は、其の原理に就ては嘗て問題にすることを想ひ及ばなかつた』[1]と。彼はヒュームが人性論に於て懷疑論を述ぶるや、此に歩を止めて省みたのである、採るべき路はヒュームと等しく懷疑論に了るか、又はヒュームの立論の出發に遡つて之を檢察するかにある。彼はカントと共に後者の路を採つた。彼は云ふ、本來人間には先驗的に判斷力が與へられて居る。其の判斷を便宜上種々分析說明するのが科學である、科學によつて分析せられた感覺が集まつて判斷をなすのではない。始に分析をなしたる場合には明に主體なる人間の判斷力の存在を前提として、之を說明すると云ふ謙

1) Jamas Seth: English Philosophers and Schools of Philosophy, 1912, pp.230–23.

虛な使命を果さんとしたるに過ぎないものが、其の分析が精緻となるに從つて、其の前提たる判斷の主體を忘却するに至つたのである。感覺は夫れ自體に於て主體と客體との關係である。主體なき感覺は單なる一片の抽象的觀念である。我々には先天的に原理が與へられてある、此の原理によつて始めて各種の感覺に統一が付くのである。彼は此の原理を稱して natural knowledge, fundamental reason, common sense と云ふ、カントの純粹理性先驗的範疇に相當する觀念で、之より此の學派は亦常識學派 (Common sense school) と稱せられる。リードがスコットランドの思想界に及ぼせる影響は頗る大であつて(註一)、ベンサム主義全盛の時代に於てスコットランドの一角に孤壘を守り、遙に後年獨逸より輸入せられた理想主義の先驅をなし、之が爲めに進路を招いたのである。彼に次ぐ者に Adam Eerguson, Dugald Stewart, Thomas Brown がある。[1] 其の影響は遠く佛國に及び、同國に於て千八百十六年より千八百七十年迄は、大學に於ける哲學の講義にはスコットランド哲學を題材としたと云ふことである[2](註二)。

1) W. R. Sorley: History of English Philosophy, 1920, pp. 207–210.
2) James Seth: ibid, p. 236.

註一　Seth Pringle Pattison: Scottish Philosophy, A Comparison of the Scottish Philosophy and German Answer to Hume, 1885, 3rd edition) 1898, pp. 6, 67-68, 115, 129.

此の書は題名の示すが如くヒュームに對する答としてリード及びハミルトンとカントとを比較したものとして興味がある。

註二　リードの主たる著作としては外に次の二書がある。

Essays on the Intellectual Powers of Man, 1785.

Essays on the Active Powers of Man, 1788.

後述のハミルトンは千八百四十六年にリードの全集を出版した。カントは其のプロレゴメナの序言に於てリードをオスワルド、ビーチー等と同一水準に置いて共にヒュームを解せざりしを難じて居る、しかしリードを後の二者と同一に取扱ふは妥當でないとは一般に哲學史家の云ふ所である(桑木、天野共譯縮册カント哲學序說一一頁參照)

千八百二十九年はジェームス・ミルが「精神現象の分析」(Analysis of the Phenomena of the Human Mind)を著して、ベンサム一派の爲めに重要なる文獻を加へた年であるが、又此の年はサー・ウィリアム・ハミルトン(Sir William Hamilton)が「エヂンバラ評論」誌上に「被制約哲學」(The Philosophy of the Unconditioned)を公にして、始めて批判哲學の種を蒔きたる年として記憶さるべきである。彼は夙

にリードの影響を受け、後千八百十七年から二十年に亘つて獨逸に遊び、此にカント哲學の感化を受け、スコットランド學派と獨逸理想主義哲學との連鎖を爲したのである。彼はカントに倣つて吾人に先驗原理の內在するを主張するもので、從つて一切の萬象は此の原理に照らして見たる我等の印象に外ならない。カントが物自體は知ることが出來ないと云つた樣に、彼は曰ふ「心又は物に對する我等の知識の全體は相對的なり――制約せられてある、――相對的に制約せられてあり。其が內界のものであれ外界のものであれ、絕對的には卽ち物自體に付ては、我々は何事も知らざるなり、唯分らずとのみ知る、……」と。[1] 之等の言を見るときは自然主義の傳統固き英國思想界に、既に獨逸理想主義が如何に浸入したるかを知ることが出來る。更にカントにとつて純粹理性批判が實踐理性批判の必然の前提たりしと同じく、ハミルトンにとつても亦吾々の知識の限界を述べることは、信仰の領域を確實ならしめんが爲であつた。彼は曰ふ「絕對者(The Infinite) 就て我等は知ることを得ずと云へばとて、それが我々に取て信ぜらるべきなりと云ふことを否定するものに

1) Seth Pringle-Pattison: ibid. p, 156.

非ず、……』と。[1] かくして彼によつて信仰は一段の高處に立つて肯定されたのである。彼の此の積極的方面を神學上に採用したるものがマンセル(Henry Longueville Mansel)であり、[2] 而して彼の消極的方面を踏襲したるものが後年のスペンサー及びハックスレーの不可知論(Agnosticism)である。[3] 千八百三十六年より千八百五十六年其の死に至る迄彼がエヂンバラ大學教授として及ぼしたる感化は頗る偉大であつて、ヴァイチに依れば、之より以前スコットランドの大學否英國の大學に於て、之に匹敵するものありしや否や疑はしく、之より以後は確に類例がなかつたと云ふ。[4] 當時如何に彼の名聲が顯著たりしかは、ミルが直覺說の代表者として彼を選び、彼の學說を打破する事が卽ち經驗派の勝利を告ぐるものなりと看たるに依つても、之を知ることが出來るであらう(註一)。

註一 ミルは千八百六十五年に Examination of Sir William Hamilton's Philosophy. を書いた。之に關しては Autobiography, 1873, pp. 155-157. 參照

同じくスコットランド學派に屬して、カントの影響を受けたるものに、ウィリア

1) Seth Pringle-pattison; ibid. pp. 179-181.
2. Leslie Stephen: English Utilitarians, 1908, vol. III. pp. 376 ff.
3) James Seth: ibid. pp. 305-307.
4 John Veitch: Hamilton, 1882, p. 22.
瀨山政道氏「英國の理想哲學の發達」國家學會雜誌大正十年三月號

ム・ウィーウェル(William Whewell)がある。彼はケンブリッヂ大學の教授として、始めは自然科學を研究し後哲學に轉じた。千八百三十七年 History of the Inductive Sciences を出し、千八百四十年 Philosophy of the Inductive Sciences founded upon their History を著はした。彼は自然科學の研究者として又英國の學者として、經驗を重んじ、從つて歸納法を重要視したのであるが、彼がカントの認識論より受けたる影響は、彼をして經驗以上の或るものが既に吾等の心の中に準備せられてあるを看破せしめ、之あるが爲めに經驗が統一せられて法則を發見する事が出來るのであると云ふ。彼がカントに對する研究は充分に正確であつたとは云ひ難い、しかし彼によつて始めて歸納法の說明は明にせられた。固より彼の重を置いた點は歸納法自體に非ずして、其の背後にある先驗原理であつたのである。然し彼によつて明にせられた歸納法は此の方面の研究を刺戟したること尠くない。彼より先驗原理の部分丈を除いて、歸納法に關する暗示を受けたのがジョン・スチュアート・ミルであつて、ウィーウェルなかりせばミルの論理學體系は書かれざりしならんと云はれて居る。[1]

1) Harold Höffding: History of Modern Philosophy, 1915, vol. II. pp 391-393.
J. S. Mill: Autobiography, pp. 119, 128-129.
, : System of Logic, 1843, preface

以上の人々より時代に於ては先立つも、後代の人との關係に於て、此に特筆すべきものはコールリッヂ (Samuel Taylor Coleridge) である。今日に於て彼の思想を檢するも、如何にして彼が十九世紀前半の思想界に斯の如き至大の影響を與へたるかを理解するに苦しむ、しかし彼の影響は哲學、宗教、歷史、文學、政治、社會問題等に及び、彼を述ぶる事なくして、十九世紀の英國思想を語ることは出來ない。彼は千七百七十二年十月二十一日に生れ、青年時代にはフランス革命の思想に心醉し、ヒューム及びハートレーは彼の最も深く感化を受けたものであつた。彼は長男の生るゝやハートレーに因んで名づけ、Observations on Man を枕に藉いて眠つたと云ふ、以て如何に彼が自然主義の影響の下に育つたかを知ることが出來る。ゴドウィンの「政治的正義」現るゝや、當時學窓に在りし彼は、Southey と共に米國に Pantisocracy を建設せんとして志半途にして遂げざりしも、彼が實際問題に興味を有することを之によつて示した。千七百九十八年にウォーズウォースと共に叙情詩集Lyrical Balladsを出し、同年より翌年に亘りて獨逸に赴き、始めて理想主義の哲學に觸れ、歸來獨逸思想の

紹介に努め、英國に於ける理想主義を齎す事に最大の功績を擧げたのである。

彼は今日迄輕蔑せられし Fancy と Imagination とは嚴格に區別すべきものなるを述べ、Fancy とは偶然の主觀による感覺の再現に過ぎざるも、Imagination とは客觀的の法則に依るので創造的のものである。Fancy が取るに足らざるものなるが故にとて、Imagination をも之と同一視するは誤まれるの甚しきもので、感官を以て見えざる世界を見えしむるものは、卽ち Imagination に他ならずとした。又千八百一年カントの哲學に觸るゝや、彼は Understanding と Reason とを區別すべしとなし、Understanding とは自然界を見る力にして、Reason とは精神の世界を見る力である。自然に對する悟性を以てして、精神の世界を見ることは出來ない。十八世紀思想の誤りは、人間に Understanding の力のみを認めて、Reason の力を認めず自然界にのみ適用すべき Understanding を以て、精神界をも見んとしたるにありとした。之等の思想は固より系統ある理想主義の思想と云ふには尙足らない、しかしベンサム全盛の當時に於ては空谷に跫音を聞くの感があつたのである。[1]

1) James Seth: ibid, pp. 322-324.

彼は取り纒めたる著書を殘さない、僅かに千八百十七年にBiographia Literaria 千八百二十五年に Aids to Reflection がある丈である。其の他稍彼の思想を系統的に纒めたるものとして、友人 Joseph Henry Green の著 Spiritual Philosophy of S. T. Coleridge, 2 vols. 1865 之等の書物に現れたる思想も、極めて斷片的で、一貫せる系統を缺くの憾がある。其の內容に於ても、レスリー・スチーブンの如きは彼の思想は獨逸哲學者シェリングの剽竊に過ぎずと云ふ。[1] 之を要するにコールリッヂの力は其の書物の中に在らずして、彼の知人門弟の上に現れたる人格の感化に在る。Carlyle, Ruskin, Frederic Maurice, Henry Newman, John Sterling 等は皆彼の感化を受けたる後輩であつて、彼の思想は斷片的である、しかし彼は彼等の前に獨逸理想主義の哲學を紹介し、彼等をして自ら開拓するの路を通じたのである。彼の影響はジョン・スチュアート・ミルの如き反對思想の雰圍氣に育ちたる者にも及びミルはベンサムに劣らざる刺戟を彼より受けた。[2] 彼無かりせば後年のオックスフォード運動なかりしなるべしとはカーライルの言にして、又彼無くば後代の理想主義は擡頭するに、より多くの年月を必

1) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. II. pp. 373-374. 380.
2) J. S. Mill: "Coleridge" in Dissertations and Discussions, vol. I. 1859.

要としたであらう。[1] 彼が實際上になしたることは、古き社會制度の上に新しき光を投じたる月影の如きものであつた。ベンサム一派によつて改革と破壞とを叫ばれて來た當代の社會制度は、彼によつて新しき光を投げられて見返さるゝに至つた。ベンサムにとつて爲されたことは當時の社會制度が如何に眞理に背反するかを明にするにあつた。コールリッヂによつて爲されたことは、當時の社會制度の中にも如何に意味が籠れるかを明にするにあつた。咎めらるべきものは國家自體でもなく教會自體でもない、唯十八世紀の國家であり教會である、其の時の偶然の缺陷の爲めに受くべき破壞より社會制度を救つたのは彼である。かくて人々は徒に保守派たらず徒に破壞黨たらずして、靜に社會制度を見返すことが出來た、此の事が後代の團體主義の到來に、如何に重要なる準備たりしかは之を知るに難くはない。

カーライルも亦コールリッヂの如く始めは十八世紀の自然主義の中に育ちたるも、神を認めず人間を以て生命なき機械と見る見方は、彼が幼少より受けたるピュリタン主義の滿足せざる所であつて、懊惱する事久しく、彼自身の所

1) Harold Höffding, ibid, pp. 376-377.

謂絶對不眠の三週間を費したる事もあつた、遂に自我は嚴然たる權威を以て、自然主義の機械觀に永遠の否定 (everlasting No) を宣言した。然れども之れ只自我の獨立不可侵を信じたるに止まりて、未だ積極的に靈的生活と機械觀との關係を明かにしたのではない、之が解決に暗示を與へたるものは、卽ち獨逸理想主義の哲學であつて、之によつて機械觀は靈界の事に適用すべからざるを明かにした。之れ卽ち永遠の肯定 (everlasting Yea) にして、此の間の消息は自叙傳的の著書なる Sartor Resartus, 1833. に明かである。

彼が當代に爲したる業蹟は、二つの方面に分たる。一は人及び社會を機械觀的に見る見方を排するにある。此の世界には Cause-and-effect-philosophy によりて、解決するを得ざるものありとして、理屈に代ふるに想像 (Imagination) の力を高調した。彼が Sartor Resartus に於て云はんと欲する所は畢竟平凡の眼底に映じては、此の世は僞多き混沌たる假現の世界である、しかし假現を通してより深き意味を眺むるを得る者には、此の世は啓示の世界、靈的原理の表象なりとの教訓を與へんとするにあつた。之れ又彼の歴史に對する見方に現

れ、歴史は單なる事件の連續に非ずとして、所謂 Welt-geschichte (世界歴史) の中に Welt-gericht (世界裁判) を見出さんとした。第二に彼は功利主義が人間を以て Pleasure-and-pain measuring machine と見、富其のものゝ蓄積を以て能事終れるかの如く說くを慨して、富は夫れ自體に於て尊きに非ずして、若しそれが尊しとせば靈魂の成長のために必要なるが故にして、又此の意味に於てのみ富は尊きに過ぎずとして、物質的の欲望の上に、超然として神靈の威嚴を置くべきものなるを敎へた。曩に述べたるが如く、個人主義は人と世界とを機械的に見、快樂を以て夫れ自身價値あるものと見たるを以て、カーライルの鋭利なる攻擊は、すべてベンサムの一派に集中したのである。

實際問題に對する彼の見解は、千八百三十六年の Chartism, 千八百四十三年の Past and Present, 千八百五十年の Latter-Day Pamphlet 等によりて窺ふことが出來る。國家に就ては、個人主義者の自由放任論を排斥して、國家はなすべき社會的目的の多くを有すとのプラトー的の見解を持ち、又當時の生產方法が機械的に流れ、自由競爭の無政府的狀態を歎じて、中世のギルドの昔に歸れと

叫んだ。此の點に於て遙かに後年の guild-socialism の到來を豫言したるの觀あるは興味がある。彼の思想は學者の思想と云ふよりも、詩人の情熱と云ふべく、整へる系統をなしては居ない。又論ずる所稍もすれば、極論に亘る事ないではない。例へばデモクラシーを罵り、奴隷制度を辯護し、ダーウィンの進化論を輕んじたるが如き、何れも其の儘としては是認し難い、しかし當時の個人主義的思潮に對する反動として之を見れば、其の由來を解することが出來ないではない。現代に於ては彼が說きたるが如き單純さを以て、複雜なる社會問題を處理するを得ない。彼以後多くの變化ありて、彼は現今に於て當時の如き勢力を有しない、しかし、斯の如き變化其のものを齎らしたる事も實は彼に負ふ所大であつて、彼がヴィクトリア朝の中頃に於て、豫言者の如き風丰と言葉とを以て、人間と世界とに對する新たなる見方を紹介し、Moral regeneration の必要を叫びて、よりよき事に眼を注がしめたるは、時代の變化を齎すに多大の效果があつた。當時學窓にありし青年が、如何に彼に動かされしかは、エドワード・ケアードの一文に見るも明かである。[1]

1) Edward Caird, Essays on Literature, 1892, p. 218

カーライルを master と呼ぶジョン・ラスキンは、始めに美術研究者として知られて居た、中世のゴシックの建築を研究するに及び、此の事が彼と中世とを媒介する源となり、進んで中世の工藝的生活を見、現代の工場生活と比較するや、此に彼は社會問題を批評する事に轉じたのである。彼によれば人間の喜びは自己を表現するに若くはなく、而して自己の表現は最も良く藝術に於て表はる。中世の職人が其の職業に向ふや、彼等の創造的衝動を滿足せしめて、喜びを以て之に對したるに拘はらず近世の勞働が喜びを齎さずして苦痛を與ふるは、毫も creative impulse を滿足せしむる道なきがためなりとし、其の原因を機械の應用と分業とに歸した。而して勞働者を救ふの道は、彼等に creative impulse の滿足を與へて、眞に人間としての喜びを與ふるに若くはなしと唱へて、社會問題の解決に從來と異れる別個の方面を提唱した。彼は又好んで經濟學を批評し、價値とは正統派の經濟學者の云ふが如く、生產費の多少需要の多少に依るに非ずして、その財貨が如何に人間に役立つかによりて定まるべきものであるとした。彼の經濟學の批評は、其の儘に受け取り難い、しかし

外面より經濟學を批評して、功利主義に沒頭せる時代をして、より高きものに眼を注がしむる力ありたる事はカーライルと其の趣きを同じくする。

彼はカーライルの如き巨大なる人格者ではない、又其のなしたる所餘りに多方面に亘つて、集中せざるの感がある。しかし千八百六十年を境としてカーライルに代りて、當時の青年を動かしたるものはラスキンである。彼の社會批評はカーライルの如く只漠然として、現代社會の機械的なるを罵倒するのではなくて、彼の藝術觀より來れる纏りたる一見解を持つて居たので、彼の社會批評はカーライルよりも具體的の結果を擧ぐる事を得た、卽ち彼及びその門弟 William Morris の力により、勞働者の生活上に創造の滿足を與へんとする思想は、やがて千九百六年に Orage 及び Penty の guild-socialism を生むことゝなり、藝術批評家の夢の如き憧憬が、實際政策として具體化せんとするの傾向を現すに至つたのである。[1)]

以上述べたる理想主義者は、多くは始め自然主義の中に育ち、遂に之を通過して新なる境地を開拓したる人々である、此の點に於て彼等は遙に時代の變

1) F. W. Roe: The Social Philosophy of Carlyle and Ruskin, 1921, pp. 312-322

遷に先立つものである。しかし彼等の思想は尙系統と精緻に於て缺くる所がある。學者の所謂、獨逸哲學の process を取らずして conclusion のみを取りたるものである。眞に獨逸哲學を紹介し、個人主義を葬むるには、後期の理想主義の出現を俟たなければならない、之れ卽ち彼等を以て過渡時代の思想なりとする所以である。

第六節　オックスフォルド運動と基督教社會主義

十八世紀の自然主義が宗教の世界を認めざるは云ふ迄もない所である。既に十八世紀の中頃に於ても、從來の宗教を持續せんとするのは、僅に Deism の形に於てのみ、之を保ち得たのである。十九世紀に至りてベンサム等の思想勢力を占むるや、無神論的の傾向は益々盛となつた。此の時恰も獨逸に於けるシュライエルマヘル (Schleiermacher) が理想主義哲學の上に神學を建設したると同じく、新しき哲學の上に宗教を認めんとしたるものは、卽ちコール

リッヂであつて、彼の"Aids to Reflection", 1825. は、英國に於ける神學復興の源と稱せられる。[1] 彼によりて新に信仰を皷吹せんとする氣運漸く動ける時、會々オックスフォルド大學を中心として、卓越せる宗教家が陸續として輩出したので、彼等は何かの形を以てベンサム一派の思想に反抗し、英國教會をして昔日の如き權威を得せしめ、時代の無神論的傾向を反省せしめんとした。恰もベンサム主義を奉ぜるホイッグ黨は、數個の立法によりて或は官職に就くに當りて宗教上の誓をなすの必要を解き、或は從來不遇の地位にありし舊教徒をしてアングリカンと、同等の立場に置きたるが如き、何れも宗教の立場を無視し、或は教會の區別を無視するものゝ如き觀があつたので、教會内の人々はホイッグ内閣に對して止みがたき反感を有し、政府より宗教の事を獨立せしめなければならないとの信念を固めつゝあつた。

千八百三十三年ジョン・ラッセル卿のホイッグ内閣は、愛蘭に於ける十個の僧職を廢止した。兼てより政府の教會に對する態度を憤慨せる教會内部の人々は、之を以てホイッグ内閣の國教會に對する挑戰なりとし、同年七月十四

1) A. B. D. Alexander: Shaping Forces of Modern Religious Thought, 1920, pp. 318, 314-347.

日オックスフォルド大學のジョン・キーブル(John Keble)は"National Apostasy"(國民的背信)と題する演說をなし、政府の處置を攻擊し教會の獨立尊嚴を主張した。偶々オックスフォルド大學の中にありし Hurrel Froude, John Henry Newman, Edward Bouverie Pusey の如き人々皆之に應じて起ち、若し此の儘に放任せば、教會は解散せられ宗教は地を拂ふべしとなし、全國の僧侶に檄を飛ばして、教會のため宗教のために立つべき事を要求した。彼等は自己の主張を述ぶるがために、"Tracts for the Times" なる小冊子を刊行し、教會は國家と別に獨立の存在を保つべき事、僧侶の信仰の生活に缺くべからざる地位を有する事、各人の個人的判斷は教會の命令によりて制限せられざるべからざる事を論じた。之を Oxford Movement 又は Tractarian Movement と云ふ。彼等の神學上の意見は今此に說くの必要はない、此の運動が宗教的熱心を復活せしめたる力は偉大にして、オックスフォルドを中心として當時の青年にして、ニューマンの影響を受けざる者尠く、一時"Newman fever"と云ふものが流行したと云ふ位である。此の運動の具體的結果としては、千八百四十四年ニュー

マンが舊教徒となりて國教會を脱したるが爲に一打擊をうけ、千八百五十一年頃に於て運動遂に全く消滅したけれども、此の運動の意義は社會的事業としてに非ずして、其の當時の思想に及ぼしたる影響にある。

此の運動の結果と目すべきものを擧ぐれば、次の三個に歸するを得るであらう。

第一は久しく忘れられたる宗教の復活である。ウェスレーがオックスフォルドを中心として、メソヂストの運動を起したる時より恰も百年を經て、[1]久しく消えて居た信仰を復活せしめ、ベンサム一派の知らざる世界が我等にある事を自覺せしめて、個人主義の崩壞に側面より援助を與へたことである。此の信仰の復活が差當り時事問題に影響したのは、後に述ぶる Christian Social-ism である。

第二には彼等は教會に於ける儀式を重んじ僧侶を重要視し、個人の判斷を輕んじた。彼等は Organization を重んじた、從つて彼等の憧憬の對象は中世の Catholic Church にあつた。ニューマンが後羅馬教會に投じたるが如きは、よく

1) 本書 135-136頁參照

之を説明する一例である。信仰生活に於て組織を重んじ個人の判斷を輕じたる點に於て、彼等は云はば教會内に於て團體主義を唱へたものである。社會思想の變化は先づ宗教の中に表はれる、ルーテルの宗教改革が近代個人主義運動の源たり、近くはメソヂスト運動が十八世紀個人主義の先驅たりしが如き其の適例である。先づ教會の中に唱へられたる團體主義は、やがて社會思想として個人主義に代るべき新思想の到來を豫じめ告ぐるものと言へるのである。

第三に彼等は好みて What is a church? なる問題を研究し、國家と教會との關係を論じた。彼等の主張に依れば、教會とは夫れ自身一個の Societas Perfecta にして、國家によりて始めて其の存在を認めらるゝ社會ではない。夫れ自身獨立の生命を有し歴史を有し使命を有する社會である。斯の如き社會は國家によりて意の儘に左右せらるべき性質のものではない。之れ彼等の主張の骨子である。此の事は二十世紀の始めに於て、國家の絶對權の疑はるゝに及び、始めて彼等の運動の意義が認めらるゝに至つた。之れ卽ちオックスフ

ォルド運動が現代的意義を有す所以である。（註一）

註一 Thomas C. Hall: Social Meaning of Modern Religious Movement in England, 1908, pp. 208-215.
A. B. D. Alexander: Shaping Forces of Modern Religious Thought, 1920, pp. 318-343.
U. G. Hutcheson; Oxford Movement, 1906.
M. Beer: History of British Socialism, pp. 178-180.
Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. III. pp. 477-507.
A. K. Rogers: English and American Philosophy since 1800, 1922, pp. 100-110.
J. A. Froude: Short Studies in Great Subjects, vol. IV, pp. 231—360.
尙第三の多元的國家觀の見地より此のオックスフォルド運動を觀察せるものは次の二書である。
H. J. Laski: Problems of Sovereignty, 1917, pp. 60-110.
J. V. Figgis: Churches in the Modern State, 1914.

オックスフォルド運動自體が勃興せる宗教熱の結果なると共に、又之が宗教熱を起したる一の原因である。彼等と相並んで、立場を異にするも同じく宗教の復興に與つた一群の人々がある、此の人々を Broad Church Party と言ふ。彼等も亦オックスフォルド運動の人々と共に、コールリッヂの影響の下に育ちしものである、只オックスフォルドの人々と異る所は、後者が舊教的

にして教義の解釋が嚴格なるに反し、前者は自由なる解釋をなしたるにある。Hare, Whately, Arnold は其の著しきものであつて、更に Frederic Denison Maurice に至りて此の派は最良の代表者を見出すことを得た。而してモーリスは單に宗教を各人の內的の問題とする事に滿足せずして、社會問題と宗教とを結び付くる事を企て、宗教史に新しき一節を加ふると共に、社會問題に新たなる解釋を與へたもので之れ卽ち Christian Socialism である。

モーリスは若くしてコールリッヂの影響を受け、倫敦大學の神學の教授となり、後ケンブリッヂ大學の哲學の教授となり、其の學識に於て肩以上儕輩を拔くものと稱せらる。彼の門弟 Charles Kingsley (1819—1874) は詩人にして小說家又實際運動家にして、其の著書 Alton Locke は千八百四十四年より四十八年に至る Chartist movement を記述せるもので、勞働問題を題材とせる小說として、最も人の注意する所である。其の他 J. M. Ludlow, Thomas Hughes の如き、何れもモーリスの弟子であつて、彼と共に基督教社會主義を唱へたるものである。彼等の主張する所によれば、社會主義は最も良く中世の僧院の中に行

はれたので、基督の教を解釋すれば、結局共產主義を是認しなければならない。社會主義なき基督教は冷やかにして、基督教なき社會主義は根なき花の如しとなし、基督教を社會主義化し、社會主義を基督教化せんとし、又經濟學を批評して利己心の上に經濟學を建設せず、十字架の上に經濟學を築くべしと唱へた。

彼等の運動は千八百四十八年四月十日、卽ちチャーチスト運動が崩壞した る其の日より始まれりと稱せらる。同年五月六日 "Politics for the People" なる雜誌を刊行した、此の雜誌は始め二千人の購讀者を有して居たが、其の讀者は主として、勞働者に非ずして智識階級の者である、勞働者は彼等の教へを聽く餘裕を有しなかつたのである。彼等の目的としたる所は Chartists を基督教化せんとするにあつた、しかし以上の如き理由によりて其の目的を達するを得ず、間もなく廢刊し、千八百五十年 Tracts on Christian Socialism を刊行したが、之も間もなく廢刊し、同年十一月二日更に Christian Socialist を出し、千八百五十二年 Journal of Association と改めたるも、何れも失敗に終つた。別に以上の

如き宣傳の外に、勞働者を集めて生產組合を造り、勞働者自身をして事業を管理せしめ、其の收益を等分するの企を各方面に試み、此方面の計畫は英國に於ける組合運動を助くる一事となつた、しかし千八百五十四年に至りて宣傳も事業も共に消滅し、Christian Socialism なるものは、僅かに六年間實際的活動をなしたるに止つた。

彼等のオックスフォルド運動の人々と異る所は、後者が中世に憧がるゝに反し、前者が飽迄も現代を離れざらんとし、後者が基督教を單に宗教とするに甘んずるに反し、前者は其の中より行爲を引出し、此世に神の國を造り出さんとしたるにある。又彼等と社會主義者とは、其の爲さんとする事柄について趣を同じく、しかし其の考へ方は全く反對であつて、社會主義者が唯物的なるに反し、彼等が基督教の教義より出發するの差がある。然れ共ベンサム一派の功利主義個人主義に對し反對なるの一事に至りては、オックスフォルドの人々も社會主義者も彼等も全く立場を同じくする。彼等の實際的事業としては、以上の如く短命に終つたけれども、後世に殘せる結果は二つの點にある。

一は彼等が勞働者の教育に着目し、ロンドンに Working Men's College を造つたことであつて、Ruskin, Tyndall, Rosetti, Seeley 等の學者美術家は相次で、此の學校の講壇に立ち、英國勞働者の智的訓練に貢献したる事著し。第二には彼等が智識階級と社會問題とを結びつけたる點にある。今日迄勞働者以外に社會問題に熱心なる者は、多くは社會主義者のみであつた、彼等の努力は勞働者のために何物かをなす事が、如何に人間としての義務なるかを知らしめ、信仰と社會問題とを不可分のものとした。之より以後眞面目なるものが、社會問題に注意することゝなり、社會問題は唯物的の者のみが活動するものに非ずして、理想主義者も亦働くべき權利と義務とを有するものとの結果をも齎した。此の點の影響は、如何に高く評價するも高きにすぐることは出來ないであらう(註一)。

註一 基督教社會主義に就ては最近に於て一好著を加へ得た C. E Raven; Christian Socialism 1920. がそれである。著者は教界の人である。著者の態度に關するラスキーの批評は興味がある(New Republic, Dec. 7. 1921.)

第七節 結論

以上過渡時代を構成する各種の思想を略述した。彼等の或るものは私有財産の廢止をも行はんとする、或るものは普通選擧を實行して經濟組織の改革を行はんとする。然るに或るものは中世のギルドに還れと叫び、或るものは封建時代の主從關係を讃美し、或るものは羅馬教會の規律と組織とに憧憬する。唯物的思想は經濟的境遇改善の必要を叫べば、理想主義者は人格の權威を說き、愛の宗教を宣ぶ。凡そ夫れ自身に於て矛盾し對立する思想は、期待せずして、過渡時代に雲集したるの感がある。彼等は唯個人主義なる大立物を中心にして、混沌として渦紋を作りつゝあつたのである。個人主義は彼等の反抗に出會して、如何に其の內容を改め其の進路を更へたるか、而して如何にして團體主義に接續したるか、之れ吾人が次に語らんと欲する所である。

第四章　過渡的思想家としてのジョン・スチュアート・ミル

第一節　緒論

社會思想は三個の階段を經過する。素朴なる團體主義の時代は第一期である。人は自然に團體の中に、制度の中に、產れて生き、而して其の中に死す、團體と自己との關係に就き、毫も反省する所なき時代、卽ち之である。次に始めて人は自己の存在を意識する、かくて思索する自己は現實の自己を客觀的に注視して、現實の自己が如何に團體の爲に、多くの束縛を受けつゝあるかを自覺する。此に於て個人を團體より解放せしめんとする時代が來る。之れ卽ち個人主義の時代である。やがて第三の時代に於て個人と團體との對立は、征服せられ調和せられ、團體と個人とは結局二にして一なることが見出される、之れ卽ち眞正の團體主義の時代である。例へば希臘に於ける、自然學影響

時代の思想、ソフィストの思想、プラトー及びアリストートルの思想の如き、近世に於ける重商主義、十八世紀の個人主義、十九世紀の團體主義の如きは、以上の經過の最も顯著なる實例である。而して團體が硬化して、當初の清新を失ふや、再び個人主義的の反動を招來する。かくして個人と團體との對立は今日迄然りしが如く、今後も亦辯證法的に其の發展を幾度か繰返すであらう。ミルは此の對立を稱して liberty と authority との爭なりと云ひ[1]、デライル・バーンスは liberty と order, emancipation と concentration との消長なりと云ふ[2]。一は內部より湧く自發の力に重を置き、一は外部より來る强制に重を置かんとする。此の二つの對立は社會思想の經緯を成す中心問題である。

すべて社會思想は前提 (pr-conception) を有する[3]。此の前提は社會思想の基調を成し、其の立論の出發點にして又究極の理想となる。多くは當時勢力ある哲學的の思想が社會思想家により無批判的に受入れらるゝものである。今社會思想の前提たる哲學思想を見るに、其の變遷も亦、同じく三個の階段を經過する。漫然として本有觀念の存在を認め善の意識の內在を肯定する獨

1) J. S. Mill: On Liberty (New Universal Library), 1859, p. 1.
2) Delisle Burns: Political Ideals, 1917, p. 283.
3) Thorstein Veblen: Place of Science in Modern Civilization, 1919, p 82 ff.

斷主義は其の第一期である。次で人間を自然と同一視して自然を研究すると同一の方法を以て人間を研究し、本有觀念の存在を否定して、經驗を以て知識の唯一の源なりとし、又善なる意識の內在を否定して、人は利己心の外何物も持たずとする、之れ卽ち自然主義の時代である。やがて此の懷疑と否定とを經過して、經驗を統一する先驗原理を認め、善ならんとする心の內在を肯定せんとする、之れ卽ち理想主義の時代である。希臘に於けるアッチカ時代以前の思想、デモクリトスの思想、ソクラテス、プラトーの思想の如き、近世に於けるデカルト、スピノザ、ライブニッツの思想、ベーコン、ホッブス、ロック、バークレー、ヒュームの思想、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルの思想の如きは、其の變遷の顯著なる實例である。自然主義と理想主義とは一は物に重を置き、一は人に重を置かんとし、一は外に眼を注ぎ、一は衷に眼を注がんとす、此の二つの對立は今後も亦其の消長を繰返すであらう。現に最近に於けるヘーゲルの思想に出發してシュトラウス、フォイエルバッハに始まれる自然主義の思想、新カント派の理想主義の思想の如き其の適切なる事例である。而して今、近世社會

思想史を見るに、素朴なる團體主義は獨斷主義の上に立ち、個人主義は自然主義と抱合し、團體主義は理想主義を基礎となして居る。

個人主義と團體主義、自然主義と理想主義、此の二つの對立は單に過去に於て存したる、歷史上の對立に止まるものではない、今後も幾度か回轉を經驗するであらう、否此の二つの對立は啻に我等の外に於て存するのみならず、今現に我等自身の胸奧を往來しつゝある。我等の中に夫れ自身矛盾し對立する二つの思想は、自ら意識することなしに自ら征服し調和することなしに、混然として雜居する。本來は個人主義に屬する意見を團體主義に屬する意見と併立せしめ、本來は理想主義者たるに拘はらず、自らは自然主義者なりと揚言しつゝある。此の混沌たる狀態を整理し、各々の思想をして其の所を得しむるには、社會思想を構成せんとする者にとりて先づ爲されざるべからざる所である。個人主義の長所短所は何處に在るか、如何にして團體主義に道を讓らざるべからざるか、自然主義は何處に破綻を藏するか、自然主義は如何にして理想主義に代はられざるべからざるか。更に個人主義と自然主義とは本

來の性質上必然の因果關係を有するか、或は又寧ろ偶然の事態が二者をして提携せしめたるに非るか、個人主義は却て理想主義の上に立脚するを以て一層合理的とするのではないか。すべて之等の問題は社會思想の研究者にとつて寔に興味ある題目である。

今以上の如き問題を抱いて、十九世紀英國思想史を見るに、此の個人主義と自然主義とより成る思潮は、團體主義と理想主義とより成る思潮と會流して、混然たる波瀾を起しつゝある。由來英國は經驗哲學（empirical philosophy）の祖國と稱せらる、所謂經驗哲學とは自然主義より產れたる一種の哲學である。ベーコンを始めとして、ロック、バークレーを經て、ヒュームに至つて經驗哲學は絕頂に達した。而して其の哲學の上に立脚してアダム・スミス、ベンサム、マルサス、リカルド等の個人主義の社會思想は構成せられたのである。個人主義は千七百七十六年スミスの富國論によつて始めて唱へられた。しかし其の時代を動かす勢力となりたるは十九世紀の初期の初めである。千八百三十二年の選擧法改正は彼等の勢力の最初の表現であり、千八百四十六年の穀物

條例の廢止に於て、彼等が思想界に於ける地盤は不拔のものと認められた。然し千八百六十年代に於て漸く凋落の兆は表はれ、千八百八十年代に於て團體主義の擡頭に會ふや、遂に思想界の背景に姿を沒したのである。之より先き個人主義全盛の時代に於て、之と反對の傾向を有する各種の思想續々として表はれ、個人主義を包圍の裡に陷れた。例へば其の中に空想的社會主義、リカルド派社會主義がある、既に十九世紀の初期に於て私有財產制度の基礎に攻擊を試みたのである。又其の中に勞働組合運動あり、勞働立法の運動がある。更に理想主義の哲學は個人主義の基礎たる自然主義を突き、オックスフォルド運動の人々と基督教社會主義の人々亦然りである。之等の思想は或るものは個人主義其のものを批難し、或るものは自然主義を批難する。個人主義を批難する思想は、個人主義と等しく自然主義の上に立ちつゝあるものもある。夫れ自身に於て互に對立し矛盾する思想は、唯個人主義なる共同の敵を挾んで、相聯盟し相提携したのである。此の包圍の裡に於て個人主義は一方に於て、反對思想の攻擊に耐ゆるが爲に、更に其の根柢を固め基礎を確實

にした、個人主義が不朽の文献を後世に殘したるは、其の全盛の時代に非ずして寧ろ凋落の機運の動きたる時である。更に一面に於て、個人主義は其の根本の立場を覆さざる限度に於て、其の內容を改め進路を更へて、徐々として理想主義と團體主義とに、接近の傾向を示したのである。

時代を辿つて以上の變遷を究むることは、我等の研究に何等かの示唆を與ふるに相違ない。然し若し此に其の生涯を此の過渡時代に送り、身を以て一の思想より他の思想への推移を體驗したものがあるならば、其の人を捉へて其の生立を探り其の推移の跡を辿るに如くはない。如何となれば漫然として時代の思想史を語るは、唯混在する各種の思想を外面的に比較するに過ぎない。然し一人格者の內的歷史を採るならば、其の前期の思想は何が故に後期の思想に變化したるか、前期の思想は夫れ自身に於て當然に後期の思想となり得べき萠芽を藏したるか、其の推移は毫も飛躍に非ずして、當然の成長と目せらるべきか等、すべて之等の事項は一人格者を捉ふるによつて始めて明にせられ得る、蓋し人格者は生命の主體であり、論理の所有者である、彼の內的

變化は必ず內面的必然性を有するに相違ないからである。

我等は今叙上の目的に副ふべき數名の人を擧げることが出來る。其の第一はミス・ハリエ・マルチノー (Harriet Martineau, 1802-1876) である。[1] 彼の女は千八百三十二年に於ては、選擧法改正を祝ひて、人類歷史の飛躍なりと讃嘆した個人主義者であつた。リカルド、マルサスの經濟學を平易に書き綴りたる Stories in Illustration of Political Economy, 1832-34 は、個人主義の普及に貢獻したこと決して尠くない。ベンサムの學徒は孃の勞作に謝する所多かつたのである。然し千八百四十九年に於て三十年平和史 (History of the Thirty Years' Peace) を著すや、社會問題は彼の女の心を苦しめ、個人主義の原理が之を解決する能はざるに惱んでゐた、更に千八百五十三年に於てはコムトの實證哲學 (Auguste Comte, Philosophie Positive) を譯するに至つた、而してコムトは個人主義の最も鋭利なる攻擊であつたのである。此の一女性の內面的變化の中に顧み來れば、時代の變化は脈々として躍動しつゝあるのである。更に第二の例として小說家ディケンスを (Charles Dickens, 1812-1870) 擧げることが出來る。彼は固よ

1) A. V. Dicey: Law and Public Opinion. 1917, pp 414-224,

り系統ある哲學の所有者ではない、然し彼が初期の小說に表はれたる根本思想は、畢竟ベンサム主義に歸することが出來る。[1] 千八百四十六年彼が主筆となりたる Daily News は、マンチェスター派の有力なる機關雜誌で、自由貿易を唱道したのである。然るに千八百五十四年彼が Hard Times を出すや、主人公をして云はしむる所は經濟學と功利主義とに對する皮肉と嘲弄とに外ならない、而して彼が筆にしたる倫敦貧民窟の生活は、勞働者に對する同情の心を喚起し、團體主義の擡頭に與かる所が尠くない。[2] 彼が一管の所說はアッシュレーの活動、カーライル、ラスキンの理論に毫も劣る所が無かつたのである。若しまた政治家としてのグラッドストーンを見るならば、其の變化の跡は一層鮮かである。[3] 彼は始めトーリー黨に屬して居た、次でビールに從つて穀物條例を廢止するや、遂に自由黨に移り、個人主義は久しく彼を支配した信條であつた。然し千八百七十年に於て彼は愛蘭農民の爲に、國家の干涉を叫びつゝあつたのである。

以上は個人主義より團體主義への推移を辿れる二三の人々であるが、更に

1) H. S. Maine: Popular Government, fifth edition, 1909, p. 153.
2) B. L. Hutchins: "Charles Dickens and the Social Movement," Sociological Review, 1912.
3) L. T. Hobhouse: Liberalism (Home University Library) pp. 102-106.

自然主義より理想主義への推移を示せるものも亦決して尠くない。例へば詩人テニソン (Alfred Tennyson, 1809-1892) は始めは科學と發明を讃美し、理性を謳歌して居た、彼の "Locksley Hall" の一篇は此の時代思想を表現せるものとして、當時の青年の胸を躍らしたのである。[1] 然しやがて科學と理性に失望して、より高きものに憧るゝ時代は來た、彼の "In Memoriam" の一篇は明に此の轉回を示せるものに外ならない、時代の變化は此の詩壇の天才に最も良き縮圖を見出されるのである。更にコールリッヂ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) を見るに、彼も亦年若き時ハートレーの "Observations on Man" を愛讀して、枕に藉いて眠り、最初の小兒にハートレーと名づけたと云ふ、[2] 之を以ても如何に彼が此の聯想心理學創始者に影響せられたるかを知ることが出來る。然し彼が千八百一年カントの哲學に觸るゝや、彼は遂に英國に於ける理想主義紹介の先驅者となつたのである。又更にカーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) を見るに、彼は青年時代にヒューム、ギボン、ダランベールより思想上の影響を受け、數學と自然科學との研究に沒頭し、其の最初の作物はレゼンドルの幾何學

1) C. F. G. Masterman: Tennyson as a Religious Teacher, 1900, pp. 216-233.
2) James Seth: English Philosophers and Schools of Philosophy, 1912, p. 321.

の飜譯であつたのである。然るに次で自然主義に「永遠の否定」を宣告するの時は來り、更に獨逸哲學に觸るゝや、「永遠の肯定」を宣言するの時は來たのである、此の間の消息は自叙傳的作物なるサーター・レザルタスに詳である。[1] 之等の詩人、哲人の思想史を繙くならば、如何に彼等が自然主義の裡に育てられ、而して之を脱するに多くの苦心を爲したるか、而して遂に理想主義の彼岸に安住の地を見出したるかの徑路を辿ることが出來るのである。

過渡時代の變化を語るに、以上の如き多くの代表者を數ふるを得る、然るに拘はらず吾人は今此にジョン・スチュアート・ミルを拉し來つて、之を最良の代表者とするは果して何に依るか。其の第一の理由は彼が哲學者たると同時に社會思想家であつたと云ふことである。由來英國の哲學者は抽象の思索に滿足せず、社會制度の論議に指を染むる者が多い、然しミルに至つては哲學と社會思想との關係は最も切實である。彼の哲學は千八百四十三年の「論理學體系」に於て述べられ、之によつて根本思想は確立したのである、次で千八百四十八年以後の諸作は其の適用に外ならない。即ち彼を選ぶことによつて

1) Thomas Carlyle: Sartor Resartus, 1833, Book II, Chap. VII, IX

個人主義と團體主義、自然主義と理想主義との二つの推移は同時に之を看取し得るの便を有する。第二に彼の經歷は個人主義自然主義の雰圍氣に育てられて、之を脱したると云ふ單純なものではない。彼はジェームス・ミルを父とし、幼少の時よりベンサム、リカルド、マルサス等の大家に親炙し、個人主義の寵兒として育てられたのである、千八百十二年父ジェームス・ミルはベンサムに書を送つて、ジョンを以て我等二人の後繼者たらしめんと云ふ。[1] 齡未だ六歲の少年に對して、師父の期待が如何に大なりしかを知ることが出來る。而して彼の「論理學體系」に於て經驗哲學は最良の傑作を見出し、彼の「自由論」によつて個人主義は好個の教科書を得たのである。斯の如きミルの經歷は彼を特出せしむるに餘りある。第三に彼は異例と目すべき程に伸縮力と順應力とを有して居た、新なる時代の思想に適應することを瞬時も怠らなかつたのである。[2] 過渡時代の各種の思想は、一々敏感なる彼が胸奥の琴線に觸れずんば止まなかつた、彼は周圍に動ける數多の思想を豐に胸に汲み入れたのである。而も彼は鋭利なる論理的頭腦の持主である。今迄懷ける思想と何等の

1) Leslie Stephen: English Utilitarians, 1900, vol. III. p 3.
2) John Stuart Mill: Autobiography (Popular edition), 1873, p. 139, 145.

連絡なしに、必要の課程を踏むことなしに彼は新なる思想に移り得なかつた、彼の頭腦は論理の飛躍を許さなかつたからである。今一人格の內的歷史を見ることの利益は、彼に於て特に其の切なるを感ずる。第四に擧ぐべきことは彼が自叙傳を書いて殘したと云ふことである。彼の自叙傳はトルストイ、ドストエフスキー等の近代露西亞の自傳的作物に見るが如き深刻なる反省に於て缺くる所があるであらう。我等が自叙傳よりして聞かんと欲する多くの事は、語られずして失望することはないではない、然し我等が今求めんとするが如き思想史上の推移に就ては、之を語つて遺憾なきを覺ゆる。此の書は人間の精神が如何に不斷の成長を爲し得るものなるかを語る、永遠に貴ばるべき人生の記錄である。若し彼にして自叙傳を殘さずとするも、彼の作物を檢することによつて、我等はミルの靈的變化を辿ることは出來るであらう、然し彼れ自身により、內面より思想の推移を語られたことは幾何の便宜を與へられたるか、知るべからざるものがある。以上の如き數個の理由は、此にスチュアート・ミルを以て過渡的思想家の代表たらしむるに餘あるを感ぜしめる。

かくて本文は過渡的思想家としてのミルを語らんとするもので、ミルの思想の全部を語らんとするものではない。彼はアダム・スミス以來の博學なる經濟學者である、哲學、宗教、倫理、論理、政治、經濟等の各方面に亘つて、該博なる蘊蓄を藏して居た、之等の各部門の一つに就て、彼を語るも容易ではない、殊に經濟學者としての彼には、述ぶべきことは極めて尠くない。然し本文はいかなる意味に於ても彼の思想を靜的に述べんとするものではない、彼の思想の跡を動的に辿つて、其の中に英國思想史の推移を窺はんと欲するものである。

（註一）（註二）

註一　此に個人主義とは自由放任主義の意に用ひらる、個人主義に本來如何なる意味あるかは第四節結論に於て詳說する。團體主義とは自由放任主義に反對する一切の思想を云ふ。自然主義とは人間を以て自然の一部と看做し、自然を研究すると同一の研究方法を以て人間を研究せんとするものを云ふ。[1] 理想主義とは自然主義と反對に人とは知識の客體たることあるも、本來知識の主體なるが故に、自然に對すると同一の研究方法を適用すべからざるを云ふものとする。プラトーは此の意味に於ては理想主義者と云ふことは出來ない、何となれば彼の力を極めて反對したるは自然主義ではなくて、單なる個人の主觀的の意見である、[2] 彼は單な

1) W. R. Sorley: Ethics of Naturalism, 1904, pp. 17–18.
R. B. Perry: Present Philosophical Tendencies, 1916, p. 45.
2) R. 〃 〃 pp. 114–115.

る個人的意見に對して普遍的なる知識の存在を主唱したのである。從つて彼は認識論を試みはしなかつたけれども、普遍性を有する知識の存在を說いた點に於て近世の理想主義者と撰を一にする、彼を理想主義者に數ふるは此の點に於てである。

註二 ミルの著書として主要なるは次の如きものである。

Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, (1831) 1844.

System of Logic, ratiocinative and inductive, 1843.

Principles of Political Economy, 1848.

On Liberty, 1859.

Dissertations and Discussions, 4 vols., 1859–1875

Considerations on Representative Government, 1861.

Utilitarianism, 1863.

Examination of Sir William Hamilton's Philosophy, 1865.

Auguste Comte and Positivism, 1865.

Inaugural Address at the University of St. Andrews, 1867

England and Ireland, 1868.

On the Subjection of Women, 1869.

Autobiography, 1873.

Three Essays on Religion, 1874.

Letters edited by H. S. R. Elliot, 2 vols., 1910.

Letters Inédites de John Stuart Mill é Auguste Comte, by M. Lévy-Bruhl, 1899.

彼の著書を讀むことが彼を研究する上に於て必要なるは言ふを俟たない、しかし論文集に收められたる論文を讀むことは著書に劣らず必要である、今四卷の Dissertations and Discussions 中に於て必讀と目すべきものを擧ぐれば次の如くである。

Vol. I. Professor Sidgwick's Discourse on the Studies of the University of Cambridge, 1835

Bentham, 1838

Coleridge, 1840.

Vol. II. M. De Tocquiville on Democracy in America, 1840.

Bailey on Berkeley's Theory of Vision, 1842.

Michelet's History of France, 1844.

The Claims of Labour, 1845.

Guizot's Essays and Lectures on History, 1845.

Dr. Whewell on Moral Philosophy, 1852.

Vol. III. Thoughts on Parliamentary Reform, 1859.

Bain's Psychology, 1859.

Austin on Jurisprudence, 1863.

Plato, 1866.

Vol. IV. Thornton on Labour and its Claims, 1869.

Professor Leslie on the Land Question, 1870.

Maine on Village Communities, 1871.

Berkeley's Life and Writings, 1871.

Papers on Land Tenure, 1870-73.

此の外に千八百六十九年彼がジェームス・ミルの Analysis of the Phenomena of the Human Mind に註解を付して出版してゐる、其の註解は彼の心理學說を知る上に必要の樣に思ふが著者は之を手にして居ない。又ミルが社會主義に就て書いた遺稿はレン・テーラーの序文を附して千八百七十九年二月より四月に亘り Fortnightly Review に連載せられた、其の文章は他の著書中の社會主義に關係ある部分と併せて Socialism by John Stuart Mill, edited by W. D. P. Bliss, 1891. 中に收められて居る。

邦譯としては今泉淸次郎、石田憲次兩氏譯「ミル自叙傳」と野上信孝氏の「婦人解放の原理」がある。

ミルの生涯を知る原本的材料として最も適當なるものは、彼の自叙傳であるが、其の外に直接彼と交遊ありたる次の人々の記錄又は傳記から幾多の材料を得ることが出來る。

Alexander Bain: John Stuart Mill, 1882.

〃 James Mill, 1882.

James A. Froude: Thomas Carlyle (1795-1835), 1882

〃 〃 (1834-1881), 1884.

Graham Wallas: The Life of Francis Place, 1919.

Arthur Sidgwick: Henry Sidgwick, A Memoir, 1906.

F. W. Maitland: Life and Letters of Leslie Stephen, 1906.

John Morley: Recollections, 2 vols., 1917.

ミル及彼を圍む多くの知名の人々の印象記としてカロリン・フォックスの Memoirs of Old Friends, 1882. は貴重な材料と思はれるけれども手にして居ない。一卷の傳記としてミルを語つたものとしては次の如きものがある。

W. L. Courtney: Life and Writings of J. S. Mill, 1888.

Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. III. 1900.

Julius West: John Stuart Mill, Fabian Tract. No. 168.

彼を語て詳細を極めたものはスチーブンの書に及ぶものはない、ミルの思想を論ずる觀察の鋭利なるに於ては他に之れ以上のものを求めることが出來る、しかし此の書の特長は同時代の形勢を詳にしてミルと周圍との關係を明にしたるにある。尙 Charles Douglas は John Stuart Mill, a Study of his Philosophy, 1895; The Ethics of John Stuart Mill, 1897 の二書を書いて居る、共にミル研究の興味ある文獻だと云ふことであるが著

者は讀んで居ない。一書物中一章を割いてミルを論じたるものは數多いであらう、著者が參考したるものは次の如きものである。

Albert Lange: J. S. Mill's Ansichten über die Soziale Frage, 1866, ss. 1-152.
Ernest Albee: History of English Utilitarianism, 1902, pp. 191-267.
William Graham: English Political Philosophy, 1899, pp. 271-347.
W. M. Davidson: English Political Thought, 1915. pp. 158-234.
John MacCunn: Six Radical Thinkers, 1910, pp. 39-87.
John M. Robertson: Modern Humanists, 1908, pp. 62-111.
Frederic Harrison: Tennyson, Ruskin, and Mill, 1899, pp. 285-322.
R. H. Hutton: Criticisms on Contemporary Thought and Thinkers, 2 vols., 1908, vol. I. pp. 171-203.
H. A. Taine: History of English Literature, translated by H. Van Laun, 2 vols., 1886, vol. II. pp. 477-517.
John Morley: Critical Miscellanies, 3 vols., vol. III. 1909, pp. 37-92.
D. G. Ritchie: Principles of State Interference, 1902, pp. 82-123.

右の内、其の洞察眼の鋭利なるに於て其の見識の卓拔なるに於て、群を拔くものは、アルビーの著とマッカンの著である。

其他一般の學史がミルの爲に相當の頁を割くは言ふ迄もない。哲學史としては獨逸の學者がミルに與ふる頁は多くない、ヘフディングの「近代哲學史」(Harald Höffding: History of Modern Philosophy, vol. II, 1915.)は著者が功利主義の系統に屬する丈、ミルに對する叙述は同情に富む。英國のみの哲學史は勿論ミルに多大の頁を與ふる、例へばソーレー、フォルシス、セッスの如きそれであるが、殊にセッスの哲學史(James Seth: English Philosophers and Schools of Philosophy, 1912)は一讀の値がある。倫理學史としてはシジィウィックの倫理學史の外ヴントの「倫理學」の第二卷「倫理學の體系」より暗示を受けたる所が尠くない。ミルの心理學に就てはウォレン氏の聯想心理學史(H. C. Warren; History of the Association Psychology, 1921)は便利である。經濟學史に於てはボーナーの「哲學と經濟學」(James Bonar: Philosophy and Political Economy, 1909)のミルに關する叙述は有益である。ミルの「經濟學原論」は由來説明書の乏しきを以て有名である。僅にオルダーショウの摘要(L. Oldershaw: Analysis of Mill's Principles of Political Economy, 1915)あるのみであるが、バルグレーブの經濟學辭書のミルの項には經濟學原論の概論が紹介されて居る。

邦文としては次の三文がある。

河上肇氏「社會主義者としてのジョン・スチュアート・ミル」經濟論叢第八卷第四號
同　「ミルと勞働問題」同第八卷第五號
櫛田民藏氏「ジョン・スチュアート・ミルの社會思想」國家學會雜誌第三十三卷第八號

第二節　思　想

第一款　總　論

今ミルの著作に表はれたる思想變化の實蹟を辿る前に、先づ年代を追つて彼の內的歷史を述べ、如何なる外來の影響が與れるかを見たいと思ふ。彼の生涯は思想史的に區分すれば、之を三段に分つことが出來る、第一は千八百六年彼の出生より千八百二十六年に至る間で、ベンサム思想の下に生長した時代卽ち之である。第二は千八百二十六年より千八百五十一年に至る間で、所謂內的生活の危機を通過して、狹隘なベンサム思想を脫し、各方面より新なる思想を豐に取入れた時之である。第三は千八百五十一年テーラー夫人と結婚してより、千八百七十三年其の臨終に至る間で、第二期に對する或る意味の反動により、第一期に復歸したるが如き時代である。此の間英本國は勿論、歐洲大陸の思想及實際の變化は相次いで、彼が身邊に迫つた、彼は外來の刺戟に裕に胸を開きつゝ、而も內面生活の自然なる展開を毫も傷つくることなくして、不斷の成長を爲し來つたのである。

彼は千八百六年五月二十日倫敦に生れた。父はジェームス・ミルである。父ミルは千八百八年ベンサムと相識るや、熱心なるベンサムの門弟となり、氏の多數の門弟を率ゐて、Philosophical Radicals の先頭に立つたのである。[1]

ベンサムの哲學は自然主義であり、其の倫理學は功利主義である。ミルは之等の方面に於て一流の學者ではない、しかし彼が聯想心理の學說を以て功利主義の一缺陷を充たさんとしたる、精神現象の分析(Analysis of the Phenomena of Human Mind, 1829)は分析心理學上に於ては今も尙貴ばるべき重要なる文獻である。我がミルが父として、その手によつて育てられたるジェームス・ミルが、此の如き思想の人なることを知らば、ミルの自然主義が如何に根柢深いかを知ることが出來るであらう。しかし重要なるは父ミルの思想よりも、寧ろ其の性格である。ミルは言ふ『ブルータスが羅馬人の最後と呼ばれたるが如く、我が父は十八世紀の最後の人であつた』と。[2] 此に所謂十八世紀の人とは理性を萬能視して情操の力を無視するものを意味するのであらう。然らばジ

1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 117-118,
2) 〃 〃 p. 117.

ヱームス・ミルは實に其の好典型であつた、彼は詩を以て迷信なりとし、感情を以て賤しむべきものとなし、家庭の中に絶對に宗教を入れなかつた[1]、此の事は當時の英國の家庭としては極めて珍らしいことである、彼の將來の理想主義的轉回が、毫も幼少時代の宗教の影響に因ることのないのは、誠に興味ありと云はねばならない。父ミルは之に加ふるに貧困の中を育つて來た、意志の强い奮鬪的の人物である、ミルは此の巨大なる父親の膝下に、後年豐に開くべき情操を全く押へられつゝ育てられたのである。

父は人間の優劣の差は一に教育に依ると云ふヱルヴェシアスの言を固く信じて、ジョンに對して理想的の教育を實施した、之れ卽ち異例と目せらるべき早教育で、彼が自叙傳に詳しく語る所である。三歳にして既に、希臘語は教へられ、八歳にして羅典語は教へられ、同時に數學の課程に入つたのである、齡十二にして彼の學修は新なる時期に入つた、今迄は思想の補助となり手段となるもの卽ち、語學、數學等を修めたのが、今や思想夫れ自身の學修に入つたからである。先づ選ばれたるものは論理學であつた、ミルは幼少の時、論理學

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 25.

を授けられたことに關しては、多大の感謝を拂つた、それは不合理の議論を分析して、誤謬の何處に在るかを見出すことを教へて呉れたからで、彼をして正確に物を考へることを鍛へた點に於ては、數學に優ること萬々であると云ふ。次でデモステネスとプラトーとの思想に接した、前者よりは如何に適切なる方法に依つて聽衆に語るべきかを教へられ、後者よりは所謂ソクラテス流の對話法によつて、正確なる考方を訓練せられた。彼は思想の內容に於てに非ずして研究の方法に於て、プラトーニストと云はるべき程に、プラトーに憧憬して居たのである。

十三歳の時三年前に出版せられたリカルドの經濟原論を父より教へられた、之れ彼が經濟學への入門の第一歩である。父は原論を平易に解いてジョンに口授し、ジョンが之を編纂したものが卽ち、千八百二十一年の Elements of Political Economy である、次に進んでアダム・スミスの富國論を讀んだ、父はリカルドの眼を以てスミスの誤を見出さしめんことを目的にしたのである。雷に彼が年少にして、既に之等の正統派經濟學に親炙したのみならず、リカル

ドは父ミルと親交あつた爲に親しく家庭に出入し、ベンサムの邸宅は彼等父子が好んで訪問した所であつた。此の事はミルが幼少の時、いかに個人主義の大立物に愛撫されたかを示すものである。個人主義の經濟學が彼によつて好個の代表者を期待したのは決して不當ではない。

千八百二十年父親の監督の下に於ける勉學の時は終つて、彼は佛蘭西なるベンサムの弟の許に立つて、約一年滯在して居た。此の佛蘭西旅行は色々の意味に於て、彼にとつては重要であつた、先づ第一に彼は峻嚴なる父の壓迫から脱れて、優しい情愛に充ちた佛蘭西の社會に迎へられたのである。彼は元來父の下に感情を冷に壓へらるゝに相應しい人ではない、いづくかに漏らして欲しい優しい心の持主である、佛蘭西の滯在は久しく押へられた情緒をして自由に流れ出でしめた、彼自身嘗て知らざりし自己を發見したに相違ないのである。第二に彼をして佛蘭西及び佛國語と親しましめた。彼が若しコールリッヂの如く獨逸に向つたならば當時全盛なりし理想主義に接したであらう、しかし彼が獨逸に赴かずして佛蘭西へ往つたと云ふことは、彼の將來

の運命に多大な影響があつたに相違ない。彼は佛蘭西及び其の國語と親んだ爲に、後年に於てサン・シモン、コムト等の社會思想に接することが出來たのである。此の旅行の意義は其の時得たる收穫に在るよりも、寧ろ其の後に於て彼が將來の展開を促す萠芽をなした點にある。

千八百二十一年七月歸國してから後、彼の學修は自學の時期に入つた、會々後年の有名なる法律學者ジョン・オウスチンと羅馬法の研究を續けて居た時に、父は此の書を讀めと云つて、彼の手にベンサムの「立法論」を置いた、而して此の書を讀んだことは彼の生涯に於て一新紀元を劃すべきもので、其の內的歷史に於て一の回轉機を爲すものであつた。[1] ベンサムは既に彼の幾度か親しく會つた人である、ベンサムの思想は彼の父を通じて、今迄既に彼を導いて來て居たのである。然し親しく其の述作に觸るゝに及んで、新なる感激は彼に迫つたのである。ミルが感じた第一のことはベンサムの研究の方法に在つた。彼は言ふ。

かやうに私に深甚の印象を與へたのは、ベンサムが「自然の法則」「正しき道理」「道德心」「自

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 37.

然の正義[1]等の文言から演繹し來れる世間一般の道德及び立法に於ける推論法を批判し、此等は假面を被つた獨斷說で、堂々たる偉さうな言辭の蔭に隱れて自己の感情を他人に押付けんとするもの、其の堂々たる言辭も實は其の感情に就て何等の理由をも擧げず、却て其の感情を自己の理由とするのであると說破した章であつた。私は曩にはベンサムの原理が、凡て此等の俗說をして存在の理由なからしめたとは氣が付かなかつたのである。是に於てベンサム以前のあらゆる道德說は仆れた、事實玆に思想上の新時代が初まつたのだと云ふ感じが勃然として起つた。……懲罰に付し得る諸の行爲と云ふ大きい複雜な問題に、行爲の結果の快樂苦痛と云ふ倫理學上の原理を指針として、科學的分類法が適用され、ベンサムが此等問題に關して始めて用ゐた精細な方法で、徹底的に論及しあるのを看た時、私は高所に連れ行かれ、其處から宏大な精神界の領域を通觀し、莫大なる智的成果が遠く天涯に延び連るのを見る事が出來た如くに感じた[2](註一)。

卽ちベンサムは法律倫理等の社會科學に、自然科學に於けると同一の方法を用ゐんとするもので、彼は此に始めて明白なる自然主義の洗禮を受けたのである。第二に彼の感じたものはベンサムの思想の內容であつた。

尙ほ讀み進んで行くに從ひ、此の智的明快に加へて、人事の實際的改善の前途が眼前

1) 'law of nature,' "right reason," "the moral sense," "natural rectitude."
2) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 37-38.

に開けて、私の熱心を喚起した。……彼は人間の意見及び制度法規が如何なるものであるべきか、いかにすれば其をして其の正にあるべき狀態になすことが出來るか、又現在それが如何に甚しく理想と懸隔してゐるかと云ふ事に就て、此の書の頁每に一層晶明宏豁なる見地を開拓するが如くに見えた。私は此の書の最後の卷を讀み終つた時、別人となつた。ベンサムが理解し、さうして此の三卷を通じて適用した通りの「功利の原則」は、私の知識信仰の離れ離れで、斷片的な組成分を結合せしむる要石として適確に當嵌まつた。それは私の事物の考へ方に統一を與へた。私は今や獨自の意見を持つた。一の信條、一の教義、一の哲學を有つた。宗教と云ふ言葉の最善なる意味の一つに於て一の宗教を有つた[1]。

卽ちミルは此にベンサムの最大多數の最大幸福を以て善なりとする倫理說と、之を以て社會制度の理想とする社會思想とを敎へられたのである。彼は從來も自ら知らずして、功利主義を奉じて來た。今や其の信條は意識の界に上つて、體系と基礎とを與へられたのである。前途に往くべき目標を與へられ、諸事批評の標準を捉ふるを得た。此の年少思想家の喜悅や察すべきである。彼はかくて完全にベンサムの門弟となつたのである。

1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 38-39.

註一 本文に於て自叙傳よりの引用は今泉、石田兩氏譯「ミル自叙傳」から借りた、唯私の慣用上極めて僅かの部分に變更を加へた、譯者の寛恕を乞ふ次第である。

其の後に於て彼はロックの論文集を繙き、エルヴェシアスを見、次でハートレーの「人間に就ての諸觀察」(Observations on Man, 1749)に接した。此の書は聯想心理の作用を以て精神現象を説明せんとするもので、ジェームス・ミルの學説に重大な影響を與へ、又ミルの心理學を作るに與つたものである。更に進んでバークレー、ヒューム等に及び、英國經驗哲學の先師よりして、彼は充分に受くべきものを受けた、而して一方蘇國學派のトーマス・リード、ヅガルド・スチュアート及びトーマス・ブラウン等の著作[1]にも接したのである。

千八百二十三年彼は同志と Utilitarian Society なる會合を作り、二週間に一回色々の問題に付て討議した、之は彼をして年長の友人と接せしめ、獨り持てるとき曖昧たること多い思想を、確實に精錬することに與つた、又同年彼は生活の資を得る爲に東印度商會の書記を奉職した、此の地位は千八百五十八年同商會の事務が政府に移るまで三十五年間彼の勤務して居た所で、彼が主要な

1) 本書218-221頁參照

る著述は其の餘暇に爲されたのである。英國思想家が獨逸の學者と異る所は、彼等が學壇に在らずして、實際生活に交つて居るといふ點にある。ミルが東印度商會の勤務は二つの事を彼に敎へたらしい。一は同僚と語り、彼等の話を聽いて居る時に、通常の英國人が何を考へ、如何なる表現の方法が彼等の理解に恰當なるかを示したにある。一は實際事務に從つて居る間に、大事を成さんと欲する時には些細な事に付て周圍と爭はず、努めて妥協をして往くことが必要であることを知つた、小事で爭ふことは大事を成就する所以でないことが分つた。

かくてミルは年少にして既に一家の見を懷き、千八百二十四年ベンサム一派が雜誌「ウェストミンスター・レヴィュー」を發行するに及んで、彼は其の投稿者の一人として、同志の爲に奮鬪したのである。以上彼の內的歷史の第一期を見るに、それは要するにベンサム心醉の時代である。彼はベーコン以來ロック、バークレー、ヒュームに傳はる英國自然主義者の一群に加はつたのである。年少にして既に一主義を奉じて、街頭に宣傳したる彼は、確に早熟の秀才と呼

ばるべきであつた。しかし彼は果して此の思想に固着して一貫することが出來るであらうか。彼は感情を殺し、想像の力を押へて、機械の如くに育てられた、智識を吸收するに急にして、創造の源泉を養ふことは、毫も顧みられなかつた。父ミルの人となりは之に甘んずることが出來たであらう。しかしジョンは父ミルと同一に扱はるべき人ではない、彼の人間味は遂に之に對して叛旗を翻すことなきか。又彼は正確に物を考へることを敎へられたしかし世に最も尊ばるべきものは、正確に考へることではなくて、正確に考へらるべき思想自體である。彼は思索の方法より眼を離して、思想の內容を求むるの時は來らざるか。功利主義は彼にとつて思想であるとは云ひ得る、しかしそは本來は父ミルが彼に授けたもので、彼は傳統として受入れたに過ぎない、彼れ自身の內部より湧き出たものではない。すべて外より與へられた思想は、一度は自身の體驗に徵して、之を省察するの必要がある、然らずんば其の思想は彼の全部を支配するものでなくて、彼の人格は分裂してゐる。此に於て彼は功利主義を疑つて、之を省察するの必要なきか。彼の第一期はかくの如き

問題を殘して、第二期に接續する。

ミル思想史の第二期は憂愁の時代を以て始まる。彼が自叙傳第五章に "A Crisis in my Mental History. One Stage Onward." と題して語る所卽ち之である。彼は云ふ。

千八百二十一年の冬、私が始めてベンサムを讀んだ時以來、そして殊にウェストミンスター・レヴィューが始つた時以來、私は眞に人生の目的とでも言ひ得られるものを有つた。世界の改革者たると云ふのが私の目的であつた。私自身の幸福に關する私の概念は全然此の目的と一致して居つた。……數年の間はそれで可かつた。何となれば、其間世の中に行はれつゝある一般の改善と、私自身も他の人々と共に其の改善を促進する事に努力しつゝあるのだ云ふ意識が、興味ある潑剌たる存在を充すに足るが如くに見えたからである。然るに夢から覺めたやうに、此の幻覺から目覺める時が、遂にやつて來た。それは千八百二十六年の夏であつた。私は誰でも時折陷りがちな例の憂よりした神經狀態に陷り、すべて享樂や愉快な感激を味ふことが不可能になつた。……こゝに於て、私の勇氣は俄に崩れた。私の生涯が其の上に建設された全基礎ががら〳〵と崩れた。私の幸福は悉く此の目的の不斷の追求に見出さるべきであつた。目的が旣に魅力を失つたのに、どうして手段にまたと興味が湧

かうや。私は最早生きる爲めの何物をも有たぬらしく見えた。……私は獨り呟いた、私はかうして私の航海の初に於て淺瀬に乘り上げたまゝ棄て置かれたのである。艤裝に申分なく舵もあるが、帆が一つも無いのであると。[1]（ミル自叙傳譯一八七―一九七頁）

此の憂愁は千八百二十六年から二十七年にかけて續いたのであるが、之に就てはミル研究者の間に色々の異說がある。或は彼が千八百二十五年から二十六年にかけて、約一年ベンサムの「法廷證據の合理性」（"Rationale of Judicial Evidence"）の編纂を助けたので、其の非常なる努力が、彼をして神經衰弱に陷らしめたのであるとなして、之を全く生理的の現象と解するものもある。しかし此の如き皮相なる說明は事件の眞義を抹殺するものと思ふ。私の解釋に依れば彼は功利主義なる路上に置かれて、父の命ずるまゝに只管に之を步んで來たのである。しかし今彼は立ち止まつて、自らの判斷によつて自己の進路を省察する時に來たのである。最大多數の最大幸福と云ふが如き目標を掲げて、社會の改良を圖らんとすることは、極めて遠大な志望であつて、幾多

1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 76-80.

の自己の快樂を犧牲として、始めて實現が可能である。しかるに社會の改良は、自己の野心を果たすが爲に、自己の虛榮を滿たすが爲に行はるゝこと決して尠くない、然し利他的の行爲を利己心に基いて爲す時に、必ずや其處に破綻が來らずに居ないのである。何となれば利他的行爲は必ずしも利己心とすべての場合に調和するものではない、社會の改良を拋つて利己心に敗るゝか、利己心を殺して別個の基礎に立つて、社會改良を續くるか、二者其の一を選ばざるべからざる時が來る。殊に幼少にして社會の改良に志すものは、其の自我は必ずや强大なるに違ひない、利他的行爲を爲して喜ばんとすることに表はるゝ自我は强大なる丈、反面に於て利己的の自我も亦强いに違ひない、之れ卽ち社會改良が必然に逢着せざるべからざる一の難關である。

此の難關に逢着せずして濟み得る場合は三つある、[1]一は其の反省の缺くるが爲に自ら矛盾を意識しない場合である。二は其の人が本來利他的の傾向が强い爲に矛盾を感じない場合である。三は利己的の根據を肯定する場合である。第一の場合たるにはミルの思索の力は强過ぎた、第二の場合たるに

1) Thomas Hill Green: Prolegomena to Ethics, 1884, pp. 420, 428-429.

は彼には人間的の煩惱が勝ち過ぎた、第三の場合たるには彼の利己心は既に痲痺して居た、利他的行爲を爲すことによつて、他人より贏ち得る名譽や賞讃によつて動くには、彼は既に之等のものに飽いて居た、利己的根據に立つては彼の活動の精力は湧くべくもなかつた。更に重要なることは彼の衷心に徐々として利他的傾向が意識されて來たのではないか、此の利他心が利己的根據を認むるを肯じないのである、かくして彼は社會改良の根據を改訂するの必要に迫られたのである。

ミルの憂愁はやがてマルモンテルの追憶記を讀むに及んで、漸次消散したのであるが、此の間に於ける體驗は彼の內的歷史にとり極めて重要なる意義がある。第一に彼は其の衷心に利他心を發見したからである。或る行爲は其の行爲を爲すことが、利益を齎すが故に爲すに非ずして、其の行爲自體の爲に之を爲さんとする欲求、卽ち善は善たるが故に之を求むるの心を見出したのである。善を爲さんとする內心の命令は最大多數の最大幸福を圖らしむる、而して之を圖る時に、善を爲すとの意識が我等に快樂を感ぜしめる。快樂

は目的として追求せらるべきものではなくして、結果として得らるゝものである。外より之を求むべきものではなくて、內より湧き出づべきものである。人は自己の最大の快樂をのみ求むとの人生觀を有するベンサムの門弟にとり、以上は驚異に値する發見と云ふべきである。第二は彼の人生の目的は最大多數の最大幸福を求むるにあつた、然し人の世界が行爲のみに止まるものならば範圍に於て最大多數を擧げ、事柄に於て最大幸福を求めよとの功利の原則は、すべてを盡す指針であらう、しかし若し上述の如く利己心か利他心かの問題が起るならば、如何なる態度を以て行爲に臨むべきかゞ更に重大なる問題となる、卽ち此に至つて彼は行爲の世界の前に精神の世界があることを知つたのである。何を爲すべきかの問題の前に、何であらねばならぬかゞより重大である、功利主義は to do の思想であるが、to be の思想ではない、始めて彼の眼は內面的敎養に向つたのである。

私の意見が此の頃受けた今一つの重要な變化は人生の福祉の最高要件の一として、私が始めて個人の內的修養 (internal culture) に對して、其の當然の地位を認めたと云

ふことであつた。私は外圍の境遇を整理する事及び思索行爲の爲めに人類を訓練する事ばかりに、殆ど唯一の重みを置く事を止めた。……感情の陶冶と云ふ事が、私の倫理哲學上の信仰の最も基本的な點の一つとなつた。そして私の思想と趣味とは日に益々此の目的に役立ち得ると思はるゝすべての事に向いた。[1]（ミル自叙傳譯二〇四—二〇五頁）

以上の二點に於て、ミルが昧達の境に達したと云ふのではない、之を求むることは、彼を化してトーマス・ヒル・グリーンとすることである。彼は唯其の方向への進路に就いたのみである、しかし之のみを以てするも重要さは充分である。彼にして憂愁の時代なかりせば、彼は平凡なる功利主義者として、今は遠く時代の背景に葬られたに相違ない、しかし彼は之を通過することによつて、快樂計量器(Pleasure and Pain Measuring Machine)に了らずして、人間として思想界に立つことが出來たのである。之れミルの內的歷史に於て最も興味ある一節にして、又此に英國思想史の分水嶺があるのである。

此の以後ミルの興味は詩歌藝術に向つて、之等のものが人間修養の手段として、重要の意義あることに氣付き、又音樂に對する趣味が復活して來た。而

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 82.

して千八百二十九年の秋ウァーヅウァースの詩を讀むに及んで、天然の美を讃へる其の詩、人の感情を謠へる其の詩は、憂愁の後の彼にとつては、旱天に膏雨を得たるの感があつた。父ミルの冷やかな教育を受けて育つた彼がいかに、別人となつたかを知ることが出來るであらう。

恰も此の時大陸に於ては、十八世紀思想に對する新運動が起つて居た、卽ち一は十八世紀の自然主義に對する理想主義の勃興でカントによつて唱へられ、同一の系統に屬するローマンチックの文藝はゲーテ、シルレルによつて旗を擧げられた。而して此の運動を英國に紹介したものはサミュエル・テーラー・コールリッヂである。彼は決して系統ある哲學の所有者ではない、しかし彼によつて偏狹なる英國思想界は、獨逸哲學に接するを得たのである。ミルは或は直接コールリッヂにより、或は其の門弟フレデリック・モーリス、ジョン・スターリング、トーマス・カーライルにより、或は直接ゲーテの作物を讀むことによつて、[1]ベンサム思想が滿たすを得ざりし缺陷が、滿たされたのである。之等の人々の思想はミルとは全く異る立場の上に立つものである、ミルは之を

1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 87, 92–93.
之らの人々に就ては本書226–232, 240–242頁參照

充分に悟得しなかつた樣である、之を以て單に十八世紀に對する十九世紀の反動なりとして、何れも盾の兩面を表現するものなりとなした。此の點に關する論評は後述するとして彼が狹隘なるベンサム思想の洞窟を脫してゲーテの所謂 manysidedness を見たことは、啻に今迄知らざりし新なる考方に接したのみならず、舊來の考方を冷に批判することが出來たのである。彼は彼等により、人間の胸奧に普遍我の內在せるものなるを敎へられた、又歷史を眺むる眼を示された、更に今迄破壞改革をのみ叫んで來た社會制度が、いかなる意味を有するかを敎へられた、彼は此に又靜に社會制度を見返すことが出來たのである。之等の影響が彼の後年の思想を、いかに變化せしめたるかは後章に於て詳述する。

十八世紀に對する新運動は又佛蘭西に於てはサン・シモン、コムト等の社會哲學となつて現はれた、之は佛蘭西革命の破壞の跡を收拾すべく建てられた新思想である。千八百二十九年と三十年に於て、ミルは始めて彼等の作物に接したのである。彼等がミルにとつて驚異を感ぜしめたことは、個人に對する社會なるものを提供したことである。彼等の自由放任主義に對する論評は、眞理に滿ちて居るものと思はれ、舊派經濟學の缺陷に眼を開かしめた、私有財產相續制度は人の世の有る限り、永續するものと疑はざりし彼をして、少くも一度は批判と省察とを容るべきものと考へしめた。更に重要なることは彼等が人間及び社會を動的に觀た一種の歷史哲學である。殊にコムトの彼に與へた影響は顯著であつた、一方に於て其の實證哲學は、ベンサムより受けたる自然主義を確めたると共に他面に於て、コムトの利他心に關する說明は、ミルの人間性に關する見方の改訂に與ることが多かつたのである（註二）。

註二 此の點を見ればコムトが旣に矛盾の人たることを知ることが出來る。一方に於て實證哲學を唱へつゝ、他方に於て社會及び社會心を鼓吹し、遂には人道敎を說くに至つたからである。此の點の思想上の矛盾は Edward Caird: Social Philosophy and Religion of Auguste Comte, 1893. に極めて巧に說かれて居る。

此の時代にミルが受けたる影響として數ふべきものに、蘇國哲學者 (Scotch philosophers) がある。彼は第一期の時代に於て旣にトーマス・リード、ヅガルド・スチュアート、トーマス・ブラウン等の著作に接して居た、ハミルトンの哲學に

接したのは遙に後年に於てゞあるが、彼等がヒュームの哲學に對する批評は、獨逸理想主義より來る批判と共に、ミルに反省を與へたであらう。殊に彼等が人間に本來道德心なるものあつて、利己心と全く別に發達したるものと說明したるは、彼に何等かの暗示を與へたに相違ない、殊に此の派に屬するウィーウェルの自然科學に關する哲學的研究は、ミルの論理學體系の構成に與る所尠くなかつたのである。[1)]

千八百三十年彼はテーラー夫人に紹介せられた、爾來二十年間の交遊の後、彼等は遂に結婚するに至るのであるが、此の交遊は波瀾少き學者の生涯に、光彩を添へた一のロマンスである。テーラー夫人はミルの言に依れば、個々の人の中に見出すも珍しとすべきあらゆる美しき性格を、一人格に併有したるものなりと云ふ、又詩人シェリーに比すべき人であつた、しかしシェリーの生涯に於て達し得た成長の程度は、彼女に比すれば一介の小兒に過ぎなかつたと云ふ。又カーライルは詩人であつて、ミルは思索家であつた、而して彼女は二者を併せて尙より偉大であつた。又抽象的哲理を實際に適用する頭腦に

1) Guido de Ruggiers: Modern Philosophy (English translation), 1921, p. 243.
H. C. Warren: History of the Association Psychology, 1921, p. 95.
本書219-225頁參照

就ては、ミルは全く彼女の弟子たるに過ぎなかつたと云ふ。[1)] 之等の言より推して考へられるテーラー夫人は、世に類稀なる婦人である、しかし之に關してはミル研究者の間に樣々の異說がある。或はカーライルの彼女に對する痛罵の言を引き、ミル兄弟、グロート夫人の言を引いて、ミルの言が甚しく誇張に失するものなることを咎める。テーラー夫人が如何なる女性であつたかの研究は本論と直接の關係はない、唯彼女が何をミルに與へたかと云ふことが重要である。而して之に關してはミルとテーラー夫人との交遊自體がミルに與へた影響と、テーラー夫人が其の言を通してミルに與へた影響とを分つことが出來ると思ふ。ミルは元來豐な情操の持主である、彼は冷かな論理を說きつゝ、胸に己に應へて吳れる心を求めて居たのである、之を滿足せしめたのがテーラー夫人である。ミルにとつては愛の當事者の才能の優劣は重要ではない、戀を懷くことによつて、理性以外に人を動かす力の潛めることを悟つて、彼の人間性觀は變つたに違ひない。戀愛の有つ神秘性は、ミルをして物質慾の外に世界あることを示したであらう、かくて彼は憂愁の時代に始まつ

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 101, 107, 142.

た內的革命を完成したのである、此の點は恰もコムトが愛人 Clotilde de Vaux を得た時と類似する、ミルが彼女の影響の一として「特に人間的な要素」(properly human element)が彼女より流れ出たと云ふのは此の點を云ふのであらう[1]。以上は二人の交遊自體が與へた影響であるが第二にテーラー夫人は假令ミルの言ふ程に優れた女性でないとしても、何物かを自分に持つた人であつたに違ひない、彼女の言と性格とより出でたる影響は、後述の第三期を述ぶる時に讓らうと思ふ。

千八百三十六年ミルは病後の靜養の爲め、テーラー夫人と大陸を漫遊した時より彼等の關係は親族友人の非難する所となつて、彼は此の以後全く社會より隱退して、靜に讀書と執筆とに日を送つた。以上ミル思想史の第二期を見るに、それは要するにベンサム思想より離れて、あらゆる新なる思想を豐に取入れた時代である。しかし彼は第一期に於て得たる根本思想は結局之を棄てなかつた、自然主義個人主義は依然として彼の窮極の立脚地である、否新思想を獲た後に却て舊思想の中今迄知らざりし眞理の潛めるものを窺はし

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 142.

めた[1]。故に彼が隱退してより、執筆した二大著は、共に舊思想の代表的作物とも云ふべきものである。即ち System of Logic と Principles of Political Economy とは此の時に成つたのである。前者は彼が千八百三十二年之に着手して一旦中止したが、千八百三十七年ウィーウェルの「歸納的諸科學の歷史」(History of Inductive Sciences) の出づるに及んで再び之に着手し、次でコムトの實證哲學 (Cours de Philosophie Positive) の出づるに及んで、ミルは多大の示唆を之から得た、かくて千八百四十三年「論理學體系」は公刊された。此の書は一片の形式論理學の著書ではない英國經驗哲學の根本方法を論じたもので、自然主義者の認識論的研究である。ミルの根本思想は此の書によつて確定したので、爾餘は要するに其適用である。「經濟學原論」は千八百四十五年の秋より執筆して、四十七年卽ち二月革命の前に印刷に付されたのである。之より先き個人主義の經濟學は、着々として地盤を固め、終に千八百四十六年に穀物條例を廢止して、勝利を歌つたのである。今やリカルド以來の經濟學の大著は現はれて然るべしとの感は一般に强かつた。而して其はジョン・スチュアート・ミルを

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 96.

措いて他に其の人なかるべしとの世評であつた、何となれば彼は幼少よりジェームス・ミルを父とし、マルサス、リカルドより教へられ、既に幾多の論文に於て、多望の未來を示して居たからである。かくて此の書は四十八年の始め世に出で、忽ちに好評を博し、今に至るも經濟學教科書として使用せられて居る。

彼を代表する二名著が此の時代に現はれ、而もそは自然主義と個人主義との地盤の上に立つものなりと云ふならば、彼の第二期は果して何の影響を彼に與へたか。そは彼の立脚地の根本を破らないとしても、其の結論に於て從來と異り、其の根本の述べ方に於て舊套を脱して居る。殊に明に彼の舊來の立場と異る所を宣明したのが、千八百三十八年の「ベンサム論」と千八百四十年の「コールリッヂ論」である。憂愁の時代以後、彼の實質は變化したるに拘はらず、父の存在中は父との溝渠を少からしめんが爲に、止むを得ざる場合の外、自己の立場を公にしなかつた[1]。然るに千八百三十六年父の逝くや、二年を經て「ベンサム論」を公にして、先師の學説の短所と缺陷を忌憚なく批判し、更に二年を經て「コールリッヂ論」に於て、溢るゝ推讃の辭を理想主義に送つたのである[2]。

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 115.
2) 〃 〃 pp. 125–126.

此の二文はミル思想史研究の上に、貴重なる文獻たるのみならず、過渡的思想家がいかに、自然主義と理想主義とを送迎したるかを示して、人間の心の成長に興味を有する學究にとり、必讀の文字である。

ミル思想史の第三期は千八百五十一年に始まつて、第二期に對する反動により、ベンサム思想への復歸である。彼は同年テーラー夫人と結婚した、夫人との交遊がミルに與へた影響に就ては、既に第二期の條に於て説明した。夫人が其の言と性格とを通じて、ミルに及ぼしたる影響は稍區々であつて分明に之を一括することは困難であるが、大體に於て第二期の反動を促成したといひ得るであらう。彼は云ふ。

今や彼女のそれと併行するに至つた私の精神的進歩の第三期(まあ斯う名付けても可からう)に於ては、私の意見は廣さ並に深さを增し、一層多くを理解し、以前に理解してゐたものは今一層徹底的に理解した。私は今や私自身のベンサム主義に對する反動に於て極端であつた點から全然舊に復した。私は其反動が頂點に達した頃には多くの點に於て、交際社會及び世間普通の意見と根本的に異る確信を持つ人間には似合はしからぬ迄世間普通の意見に寛大となり、是等普通の意見中に起り始めた

淺薄な改善を援助する事に滿足して居た。當時私は私が今日是認する事が出來ない程、私の意見中の明に異端的な部分を壓へつけやうとして居た。今では此の異端的な部分こそ、其を主張する事が社會を改新する上に、何等かの效驗を齎し得る殆ど唯一のものであると考へるのである。[1]（ミル自叙傳譯三二四－三二五頁）（註三）。

又別の處に於て云ふ。

私の精神的發達の或る時期には、社會上並に政治上に於て、私が容易に干渉主義的傾向に陷り得た瞬間があつた、又或る時期には、反對の極端に走つた事の反動から、今程に徹底的な急進主義者及び民主々義者でなくなつたかも知れぬ瞬間があつた。他の多くの點に於けると同じく、此の二つの點に於ても、彼女は私を新しき眞理に導き、誤謬を脱せしめると共に、私を正しき處に保つて呉れて、大いなる裨益を與へた。總ての人から學び、新舊相調和せしめて、私の意見中に新意見を容るべき餘地を作らんとする私の用意と熱心とは、若し彼女の堅實な感化が無かつたならば、私を誘拐して、私の初期の意見を餘りに多く變更せしめたかも知れぬ。彼女は各種の考慮の相對的の重要さに關する正しき判斷によつて、私の心的發達に最も價値ある寄與をなした。此の事は、私が最近に發見したばかりの眞理に對して、其の本來の價値以上に重要な地位を私の思想中に與へる過を屢々防いで呉れた。[2]（ミル自叙傳譯三五四－三五五頁）

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 132.
2) 〃 〃 〃, p. 145.

かくて彼は第二期の反動から、再歸反動によつて第一期思想に返つた傾がある。此の傾向の頓に表はれたものが、千八百五十二年の「ウィーウェル博士の道德哲學論」である。[1] 此の論文に於て彼が功利主義の爲に辯じたる骨子は、第二期の時代に於ても決して棄てなかつた部分に違ひない、しかし其の內容よりも寧ろ其の態度の峻烈なるに於て、千八百三十五年にシヂウィック教授の思想を攻擊[2]したるに髣髴たるものがある。更に此の傾向の最も顯著なるものは千八百五十九年の「自由論」であらう。此の書は他のいかなる著作よりも、ミル夫人の參加の濃厚なるものであつた。恐らく之れ干涉に就て爲されたる最も熱誠なる抗辯であらう。自由放任論は他のいかなる人よりも、ミルによつて好個の代辯人を得たのである。此の傾向は夫人の死後稍變化したけれども、大體に於て其の儘繼續して晩年に至つた。彼は臨終に於て「自分の仕事は爲し終へた」（"My work is done."）と云つたとの事である。[3] 思ふに其の意味は六歲の時ベンサム、父ミルが期待したるに背かずして、最後までベンサム學徒であつたと云ふことに滿足したのであらう。

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussion, vol. 11.
2) 〃 〃 vol. 1.
3) W. L. Courtney: Life and Writings of John Stuart Mill, 1888, p. 165.

註三 ミル自身は第三期を以て「經濟學原論」公表の前に始まるとする。然し私は千八百五十一年より始まるとする。從つて此に引用した言は彼自身は千八百四十八年以前を語つて居るのであるが、私は五十一年以後を語るものとして使用した。誤解を避くる爲一言する。

然らば反問は必ず來るであらう、若し果してミルが第三期に於て、ベンサム思想に復歸したとするならば、何處に彼を過渡的思想家として扱ふ所以があるかと。私の之に對する答の第一は、第三期の反動なるものを誇大視してはならないと云ふことである。成程彼の著作目錄を檢するならば、千八百五十九年に於て「自由論」あつて、個人主義を述べ、千八百六十三年に「功利主義論」があり、千八百六十五年に於て直覺說の代表者「サー・ウィリアム・ハミルトン哲學の檢察」をなして、自然主義の爲に萬丈の氣焰を吐き、同年に於て又「コムトと實證主義」に於て、コムトに對する憧憬の反動を示し、遺稿「社會主義論」に於ては、「經濟學原論」中の意見に比して稍後退の傾向を表はして居る。若し斯くの如く見來るならば、彼は晩年に於て最も反動的傾向が強く見ゆるであらう。然し之れ唯皮相なる觀察である。彼の根本的立脚地は結局に於て全期を通じて動

かなかつたのであるから、其の根本の立場を述ぶべき機會が、偶然に外界に起つた爲に、之を高調するの必要に迫られたので、特に晩年に於て保守的になつた所以ではない。況んや晩年に於て彼が述べた個人主義、自然主義、功利主義は、其の名に於て、第一期と同一であつたにしても、其の立論の對象は甚しく異つて居る。彼がベンサム、マルサス、リカルドより受けた個人主義の對象は、貴族地主の特權階級の掌裡に在りし國權の干涉であつた。千八百五十九年に於けるミルの個人主義の對象は、無智なる勞働者の手に移らんとしつゝある國權と輿論の干涉である。彼が受入れた代議政體論は地主と貴族とに對する市民の代表である。彼が千八百六十一年の「代議政體論」に於て主唱する所は第四階級に對する市民の擁護である。彼が受入れた自然主義の對象は、シャフツベリー、ハチソン、バトラーの直覺說であるが、千八百六十五年に於ける自然主義の對象はハミルトンの哲學である。千八百四十八年の「經濟學原論」に於て論ずる社會主義は、空想的社會主義であるが、彼が千八百六十九年に遺稿「社會主義論」を書くべく刺戟されたのは、マルクス等によつて始められた國

際勞働者運動からである。[1] 此の如く時勢の變遷が彼をして、其の根本の立場を闡明すべき必要を生じたので著作日錄を一瞥することによつて、晩年の彼を保守的と目することは妥當でない。第二に假令彼が功利主義、個人主義を述ぶるとしても、之れ唯名辭に於て功利主義、個人主義たるに止まつて、其の立論の方法、其の考方、其の窮極の論據のすべてに於て、從來の同主義と趣を異にする、皮相なる主張の結論に囚はれずして、行間に躍如たる新傾向を觀取するものは、第二期の思想の飛躍が到る處に其の痕跡を刻することを認めるであらう。かくて彼は依然として英國思想史の橋梁たるの使命を演じて居る。然らば既に彼の內的歷史を時代順に辿り來れる吾人は、進んで其の變化が彼の思想にいかなる實蹟を止めたるかを窺はなければならない。

第二款　各論

第一項　自然主義より理想主義へ

當時人間に對する見方に、二つの種類があつた。自然主義及び直覺主義之

1) John Stuart Mill: Socialism, p. 64 ff.

である。前者は智識は經驗より成るもので、先天的の原理は毫も之に與るものではないと主張し、又人間に善の爲に善を爲さんとする先天性を否定せんとする。之れウィリアム・オブ・オッカム以來ベーコン、ロック、バークレー、ヒュームに傳はり、英國の誇りとする思想家は皆此の系統に屬し、十八世紀に於ける英國が歐洲哲學界に覇を唱へたるも亦之に依る。而して此の傾向の特に顯著となつたのは、ロックの「人間悟性論」に始まる。彼は云ふ、觀念の起源は經驗あるのみ、而して經驗は一は外界より吾人の感官を通じて來り、一は吾人の心の作用其の物より來る。前者は感覺にして、後者は反省である。吾人の心は拭へる板又は白紙の如し、之に觀念を刻するものは、唯經驗あるのみと。此の思想の系統は相傳へてミルの先師ベンサムに到つたのである。ベンサムは云ふ。

> 正邪の標準に關して今迄述べられたる各種の體系は要するに論者一個の好惡に歸することが出來る。……何等客觀的標準に訴ふることの義務を避るが爲めに、又論者の感情意見を讀者に强いんが爲めに案出せられたるに過ぎない。[1]

1) Jeremy Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation, 1789, (Clarendon Press) p. 17.

又云ふ。

"moral sense," "common sense," "understanding," "reason," "right reason," "nature," and "nature's law," "natural justice," "natural equity," "good order" "truth" 等すべて、之等の言は畢竟自己の命令に暗默に服從せしめんと欲する人々の獨斷である。[1]

ミルは幼少にして父ミルによつて此の派の中に育てられ、更に千八百二十一年ベンサムの「立法論」を繙きて此の派の思想に傾倒したるは、曩に述べたるが如くである。而して後年に於て彼の立場を更に確實にしたるはコムトの實證哲學であらう。[2] かくて彼は其の一生を通じて、結局此の根本思想から離れることをしなかつた。

然らばミルは何が故に此の派の思想に永く執着して居たか。彼は元來生れながらの社會改良家であつた、現社會の缺陷を認めて、之をよりよきものになさんとするは、彼の終生の志であつた。彼の哲學的見地は社會改良の實際的必要より來るのである。彼は云ふ。

さて此等兩哲學派卽ち直覺學派と經驗聯想學派との差異は、單に抽象的思辨の問題

1) Ernest Albee: History of English Utilitarianism, 1902, p. 179.
2) John Stuart Mill: Auguste Comte and Positivism (New Universal Library), p. 52
" Autobiography, p. 95.

ではない。それは、實際上の結果に甚大の關係を有し、進歩時代に於ける實際的意見のすべての大衝突の根柢に横つて居るのである。實際的改革家は强烈普遍の感情によつて支持さるる事物に、變革の加へらるべきことを絶えず要求し、或は既成の事實の外見的必然と不可抗とに疑問を挿まなければならぬ。そして此らの强烈なる感情は如何にして起つたか、此らの事實は如何にして必然にして打破すべからざるものと見ゆるに至つたかを示す事が、彼の議論の缺くべからざる一部分と成る事が屢々ある。それ故に感情及び道德的事實の、境遇及び觀念聯合に依る說明を阻害し、其等を人性の究竟的要素として取扱はうとする哲學、卽ち自ら好む所の眞理を直覺的眞理として誇張する癖があり、直覺を吾々の理性よりも更に高い權威を以て語る所の自然又は神の聲なりと考へる哲學と、實際的改革家との間には自ら相容れざる所が有るのである。特に私は早くから感じて居つた、人間の性格の顯著な差異をすべて天賦にして到底抹消し難きものと考へ、個人間、人種間、兩性間何れの差異にせよ、此等の差異の大部分は、啻に事情境遇の差異によつて起り得るのみならず、起るのが自然であるとの不可抗的證據を無視する現在一般の傾向は、偉大なる社會問題の合理的取扱に對する主要なる障礙の一つであり、人間的改善の最大なる邪魔物の一つであると。此の傾向は十八世紀に對する十九世紀の反動を特徵づけて居る直覺的形而上學にその源流を置いて居る。そしてそれは、一般の保守的傾向並びに人間の

懈怠心に取つて甚だ快適な傾向であるから、若し其の根柢を覆すに非ざれば、それは比較的穩健なる直覺哲學によつては、本當に正當視せられぬ程極端な點にまで、追及ぼされるに相違ないのである[1](ミル自叙傳譯三八二—三八四頁)。

同樣の說明は彼の著作の各方面に之を見出すことを得る[2]。要するに彼が自然主義に歸依する理由は二つある。一は消極的の理由で、直覺派の內在說を擊破せんが爲めである。人に生得の判斷ありとの說は、其の判斷が客觀的に表現し得ざるものなる結果、稍もすれば自己の獨斷の論據となつて、Status quo を喜ぶ徒の援護となる。加之、彼等は人の心と環境との關係を認めざる結果、環境の改善に冷淡である。社會改良を志す彼が、所謂 ontological or "innate principles" の學派を攻擊する所以は此に在る。第二に積極的には彼は社會科學を自然科學と同一に研究することによつて、社會科學の中より正確なる法則を導き出し、之を以て經國濟民の大本を提供せんとするにあつたのであらう。彼の自然主義を選擇する根本の動機が、實際的必要にあつたことは十八世以來の思想家に共通の現象で、いかに當時の社會が改革の必要に迫られて

1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 156-157.
2) 〃 〃 pp. 129-130,
〃 : System of Logic, preface.
〃 : Dissertations and Discussions, vol. II. p. 472

居たかを語るものである。[1]

既に彼の目的が直覺說を打破するに在るならば、先づ爲されねばならぬものは何であるか。彼は云ふ。

此の學說あればこそ、起源の記憶せられぬ凡ての頑迷な信念や、凡ての狂熱的な感情が、道理によつて自ら辯解する義務を免除され、それ自身で十全圓滿な理由であり辯證であるとされるのである。あらゆる根深き偏見を神聖化する爲に、是程便利な道具はまだ工夫された事がないのである。さうして道德、政治、及び宗教に於ける此の僞哲學の重なる强みは、之れが常に數學及び物理學の數學的部門の證據に訴へる點にある。之を數學物理學から追出すことは、卽ちそれをその根城から追ひ出す事である。……假令それが成し遂げられても、人間の偏見と依估量負とにしかく力强く根ざして居る考方から、其の思辨的支柱を奪ひ去つただけでは、それを克服する爲にほんの一步を進めたに過ぎない。けれどもたとへ僅に一步でも、是は全く必要缺くべからざる一步である。何となれば、結局偏見はたゞ哲學に因つてのみ打破し得るものの故、それが哲學の支助なきものである事が明示されるまでは、其の克服に向つて眞に步を進めるは永久に不可能である[2](ミル自叙傳譯三一八—三二〇頁)。

卽ち反對派を打破するが爲めには、先づ彼は認識論的研究から出立しなけ

1) W. R. Sorley: Recent Tendencies in Ethics, 1904, pp. 8-9.
Frank Thilly: History of Philosophy, 1914, pp. 517-518.
John Morley: Critical Miscellanies, vol. III, 1909, p. 42.
2) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 129-130.

ればならない。彼に依ればカントの哲學に於ては精神は物の屬性を知覺するものに非ずして、之を創造するものである。精神は經驗を統一するのみならず、經驗に何物かを附加し、經驗を超越するものなるが故に、半神祕的なる直覺の力を認むるに非ざれば、之を承認するを得ずと云ふ。[1] 彼が依つて立つたのはバークレーの主觀々念論である。[2] 智識は唯感覺より成る。物の屬性は第一性質たると第二性質たるとを問はず、何れも主觀的のものである。「事物が存在するとは知覺せられるとである」("esse is percipi")。[3] 然らば此の如き一時的の感覺から、いかにして外界を構成するとが出來るか。之に對してミルが使用したる說明は卽ち聯想心理說である。創造的な精神作用を認めざる經驗論者にとつて、恰好な武器は實に聯想の法則である。[4] 之によつて一感覺は他の感覺を聯想によつて誘發する。ミルに依れば外界とは、卽ち、ある一感覺によつて誘發せらるべき永遠可能性 (permanent possibilities of sensation) を有するものたるに過ぎない。精神とは感覺の集合 (cluster of sensations) である、又「意識を繫ぐ一筋の絲である」。心が既にかくの如きものであるならば、自然に

1) John Stuart Mill: Examination of Sir William Hamilton's Philosophy, p. 194, 456.
2) " Dissertations & Discussions, vol. IV. pp. 154-187.
3) George Berkeley: A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge, § III, 1710

關する法則も亦經驗の結果成立するものである。其の成立が經驗に依るならば、そは又他の經驗によつて變更せしめられるかも知れない、卽ち彼が法則の必然性を否定する所以である。[1] 二に二を加へて四となる原理は、我等の經驗の結果である、其の經驗が比較的多量なるが故に、其の確實性も亦多分なりと云ふに過ぎない。故に若し地球以外の他の遊星に往くならば、其處の經驗によつては或は二に二を加へて五となるやも圖られない。斯くして彼は一切を經驗に歸して a priori の存在を否定した。カントの批判書がいかに a priori が必要なるかを力說したるものに反し、ミルは如何に a priori が必要ならざるかを力說する。

彼はかくして認識の作用に毫も人間の先天原理の與るものでないことをのべた。然し前述したるが如く、彼の目的は單に思辨的必要より出でたるものでなくして、社會改良の實際的要求より出でたものである。故に直覺的の根城を突いた後、彼の研究は當然に實踐行爲の主體としての人間に及ばねばならない、社會科學を自然科學と同一の方法に依つて研究し、法則を發見する

4) Howard C. Warren: History of the Association Psychology, pp. 10-11.
1) John Stuart Mill: System of Logic, Book II, Chap. V, § 1, § 4.

ことが出來るならば、此に始めて直覺說より來る個人的獨斷を排して、客觀性を有する判斷を提供することが出來るであらう。かくして始めて status quo の論據を打破し、更に進んで社會改良の經綸を建設することが出來る譯である。之れ彼が「論理學體系」第六編に於て「道德科學の論理學に就て」(on the Logic of the Moral Sciences) と題して述べんとする所である。

社會科學を自然科學と同樣の研究方法に依らしめんとは、彼が若くしてベンサムより感得した所である。千八百三十八年彼は「ベンサム論」に於て云ふ。

彼は偉大なる哲人ではなかつたであらう。然し彼は哲學に於ける改革者であつた。彼は哲學の中に、そが最も必要としたるもの、之なかりしが爲に哲學が往きつまりし、あるものを注入した。之を爲したるは彼の學說の內容ではなくて、學說に到達した る方法である。彼は倫理學と政治學の中に、科學たるに必要缺くべからざる思索の慣習と研究の方法とを紹介した。[1]

彼が上述の論理學を書いたのは千八百四十年であるから、ミルがベンサムに對する讃美より推して、此の時彼がいかに社會科學の自然科學化に熱心で

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol. 1. p. 339.

あつたかを推察することが出來る。然し若し社會科學を自然科學と同一に扱ふとするならば、直に二つの反對が起るであらう。[1] 卽ち第一には人間の精神が法則に支配せらると云ふのは、我等の道德的創意を無視するものなりと云ふ、自由意思論者より來る反對之である。之に對して彼は自由と云ふことと必然と云ふことが決して矛盾するものに非ざるを云つて、反對說に答へて居る。[2] 之に就ては後に述べんとする。第二に來る反對は人間の思想、感情、行爲は、自然界の事物に對すると同一の意味に於て、科學の對象たり得ないもので、一定不變の法則に支配せらるるものではないと云ふ。之に對しては自然科學の法則も決して絕對的の眞理ではない、加之其の最近の發達に係る法則に競ては、僅に實現可能性が多いと云ふ程度に止るものもある。人間の行爲に就ても我等が日常の行爲に於て豫見し用意するは、卽ち多少の法則の存在を容認するもので、此の程度に於ても政治的、社會的科學に於ては其の與ふる實用は充分なりと云ふ。[3]

既に社會科學を自然科學的に研究するとして、ミルの構案は如何なるもの

1) John Stuart Mill: System of Logic, Book VI. Chap. I. § 2.
2) 〃 〃 〃 Chap. II
3) 〃 〃 〃 Chap. III. § 2.

であつたか。彼は同年の筆になつた「コールリッヂ論」に於て云ふ。

ベンサムとコールリッヂとは色々の點に於て異つて居た、然し彼等の等しく一致して居た點は、すべての他の哲學の基礎を精神(Mind)の哲學に置かねばならぬとしたことであつた。此の基礎を深く强く築き、其の上に上層建築を爲さんとすることは、彼等の生涯が献げられたる目的であつた。[1]

卽ち彼は精神の哲學を第一階段に置かんとする、而して彼の精神の哲學とは心理學に外ならない。或る心的狀態と他の心的狀態との繼起の法則を決定するものが心理學である。其の法則として二つの種類がある。第一に一度我々に感ぜられた意識は、之を感ぜしめたと同一の原因がなくとも、之を再現せしむる事が出來る。第二に其の第二の意識は所謂聯想の法則(Laws of Association)に從ひ、印象或は他の觀念によつて再現せしめられる。聯想の法則には三つの場合がある、第一は類似聯想(Association by Similarity)(例へばアレクサンダーとナポレオンの如き)である。第二は接近聯想(Association by Contiguity)(例へば靴音と來客の如き)であり、第三は習熟聯想(Association by Frequ-

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol I. p. 396

ency)(犯罪と刑罰の如き)之である。[1] 以上の如く精神現象を說明する心理學を第一段とし、之に次ぐ第二段に彼が置きたるものは「人性構成學」である。前述の如く聯想の法則によつて、各種の意識を再現するとが出來るならば、聯想を刺戟する外圍の影響は之を重大視しなければならない。例へば若し他人の爲に幸福を圖ることが、自己の利益を齎すとの事實を一度此に作るならば、聯想の法則に依つて、自己の利益と他人の幸福とは當然に聯想せられて、遂に人は他人の幸福を圖る性格を形成するに至るやも圖られない、ミルが注意したるは此の點である。かくて彼は外圍の與ふる刺戟と性格との關係を研究する學問の必要を認め、之を稱して Ethology or the Science of the Formation of Character と云ふ。[2] 此の學問にして成立するならば、我々は人間の性格を好ましき樣に形式する方法を悟ることが出來るであらう、社會改良に志すミルが之を渴望したるは當然と云ふべきである。第三段に置かんとするものが卽ち社會科學(Social Science)である。卽ち第一段に精神の學問として心理學を置き、次で中間に人性構成學を置き、最後に外圍其の物の研究を爲すべき社會科

1) John Stuart Mill: System of Logic, Book VI Chap. IV. § 3
2) 〃 〃 〃 〃 V § 4 〃

學を配せんとする、彼は云ふ、心理學、人性構成學なくしての社會科學は、生理學を知らずして、衞生學、病理學を研究するに等しい[1]と。

ミルの倫理說は千八百二十一年以來ベンサムの功利主義であつた。最大多數の最大幸福を善なりとするは、爾來彼の捨てなかつた信條である。人に善を善なるの故を以て爲すの先天性ありとする倫理說は、彼の如き立場に在るものゝ採るを得ざる所である。彼は直覺說の獨斷に代ふるに客觀的の內容を指示し、善なる觀念を社會事情の進步に適合せしめんとしたのである。彼は云ふ。

外的の標準に訴へんとする道德と、內的信念の上に根據を置く道德との爭は、沈滯の道德に對する進步の道德の戰である。單なる意見と傳統との神聖化に對する理性と討議との戰である。現存秩序が自然の秩序なるが故に、之に對する革新は罪惡なりとの學說は、物理學に於て社會政治の學に於て、今は誤れりと認めらるるが如く道德の界に於ても亦誤りとせられねばならない[2]。

思ふにミルは「論理學體系」を書いた時には、以上の如き倫理學を、彼の所謂社會科學の一部として「人性構成學」に接續する第三段に置かんと企てたのであ

1) John Stuart Mill: System of Logic, Book VI. Chap. VI § 1.
2) 〃 Dissertations and Discussions, vol. II. pp. 472–473.

らう。從來の如く「あらねばならぬ」と云ふ倫理學に代ふるに、心理學、人性構成學に基礎を置いて、かくせざるを得ぬ」立場に立つた倫理學の樣なものを計畫したのではあるまいか。かくしてベンサムが企てたるよりも、更に倫理學を科學的になさんとするにあつたのであらう。然るに後述するが如くに、人性構成學の建設は遂に彼の拋棄する所となつたので、新計畫の下に於ける倫理學は自ら斷念せざるを得なくなつた、之れ彼として當然着手すべき倫理學の著作を永く顧みなかつた所以であらう。然し假令當初の學問體系の一部としての倫理學は之を斷念したとしても、彼の奉じた倫理說の內容は何れにしても、功利主義たるに變化はないのであるから、此の學說の普及の爲に彼は努力を惜しまなかつた。今功利主義を詳細に述べることは、ベンサムの功利主義を反覆する所以であるから、之を別稿に讓るとして[1]、唯此には功利主義が從來の直覺派の倫理說と、いかなる點に於て區別せらるゝかを述べるに止める。

第一に功利主義は其の前提として、人は自己の快樂を求め苦痛を避けんと

1) 本書 第二章 第三節參照

する欲求を持つ、唯此の欲求のみによつて動くものなりとの、所謂心理學的快樂說を有する。ベンサムは「道德及び立法原理の序說」の卷頭に於て『自然は吾人を二つの主權者の下に置いた、其の二つとは卽ち快樂及び苦痛に外ならない』と云ふ。此の如く人間は自己の快樂のみを求むと云ふ人間性觀を基礎とする結果、一切の行爲の動機を此に認むるの外なく、又動機を此に置くことを不可としない。故に人の爲さんとする行爲の內容は直覺派の主張する行爲と差異ないとしても、其の行爲を爲さんとする所以は直覺派は其の行爲が善なるが故に善の故を以てのみ、之れを爲せと命ずる。然るに功利主義に於ては、其の行爲を爲すことが結局自己の快樂を齎すが故に之れを爲せと云ふ、行爲を爲す動力の出所に差異を生ずる。從つて善なる行爲を爲さざる場合に於ける制裁は直覺派に於ては良心の苛責に置かんとする。之れに反して功利主義に於ては、外部より何等かの壓迫を加ふることによつて當事者の利己心を刺戟するの外ない、卽ち制裁の出所を心の內外何れに置くかに差異がある。ミルが憂愁の時代を述べた折に、今迄受けた敎育は、外部よりの毀譽賞罰

によつて社會の改良を爲すべく鞭つたと述懷したるは[1]、之れを云ふに外ならない。

第二に功利主義は爲すべき行爲の內容を指示する。最大多數の最大幸福を圖る行爲が善なりと云ふ。彼等の叫ぶ所は最大多數の最大幸福であつて決して、自己の幸福ではない。他人の爲に自己を犧牲にすることは功利主義の最も喜ぶ所である。唯かくする動機が自己の幸福に在りと云ふに外ならない、爲さるゝ行爲の內容が何たるかと、爲す行爲の動機とは自ら區別せられねばならない、此の點に於て功利主義は利他主義を說くもので、利己主義を是認するものではない。之れ彼がウィーウェル敎授を反駁して次の如く云ふ所以である。

ウィーウェル博士は…良心義務端正と云ふが如き一切の名辭を自己の立場にのみ使用する…我々も亦ウィーウェル博士と同樣に良心、義務、端正の爲に起たんとするものである。之らの言と之に關係ある一切の感情は、直覺派の倫理說の一部を爲すと等しく、亦功利主義の倫理說の內容の一部を爲すものである。…氏は、吾々はいかなる苦痛を冒し犧牲を拂ふも正しき事を爲さざるべからず」との事を、唯彼のみの意

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 78.
" System of Logic, Book VI. Chap. II. § 4.

見となし彼のみの立場とする。恰もそれはすべての人の意見ならざるが如く、恰もそれは正しと云ふ言葉の意義如何に在るのではないかの如くに。問題の點は、何が正しきことの內容を定むるにあるのであつて、正しき事が爲されざるべからざるか否かに在るのではない。博士は獨り高尙なる主義を獨占せんが爲に、反對論者は同樣の意見を否定するものなりと誣ひるのである。[1]

既に功利主義が斯の如きものであるならば、功利主義は公共の福利を圖れと命ずる嚴肅高貴なる道德である。[2] 其の直覺說と異る所は、最大多數及び最大幸福なる言葉に於て、善なる行爲の內容を指示した點にある、最大多數及び最大幸福と云ふ計量的なる言辭を以て善の內容を指示し得るとする所に、彼等の機械觀的な物の見方が表はれる、此に其の差が存するのである。[3]

第三に功利主義者の所謂幸福なる觀念は物質的に解しなければならない。何故なれば既に善惡を判別する先天性を否定する以上、求むるものは感官的の快樂であつて、快樂は唯數量の差あるに止まり、性質の差を認めざるは、當然の論理的歸結でなければならない。直覺說に於ても、勿論幸福なる觀念を入れる、しかしそは善を爲したる結果感ぜられるものである。しかるに功利說

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol. II. pp. 459-460.
" Utilitarianism (New Universal Library), pp. 31-32.
2) Thomas Hill Green: Prolegomena to Ethics, 1883, pp. 246-247.
3) Wilhelm Wundt: Ethics (English translation by M.F. Washburn), vol. II. 1917, p. 142

に於ては幸福は善の內容を定むる一要素であつて、善の結果に非ずして、其の出發である、之れ其の直覺說と異る點である。以上の三點は、ミルが先師ベンサムより受け入れた當時の功利主義の特徵である。

上述したる所によつて、ミルの哲學上の立場、倫理學上の立場、社會科學上の立場は略之を悉すことが出來たと思ふ。すべてを通じて、彼によつて扱はるゝ人間は、唯外界の感覺を受取る所動的の生物である。法則に從つて聯想の作用を爲す一片の機械である。感覺的の欲求を追ふ衝動體である。若し彼にして此の見方に終始したならば、過渡的思想家として扱はるべき資格はない。彼は上述の自然主義的立場を述べつゝある旁ら、既に從來の人々と異る進路を求めざりしか、又上述の立場を述べたる後に於て從來の立場を脫却せんとはせざりしか、之れ吾人が述べんとする一項の眼目である。

千八百二十六年彼に憂愁の時代來るや、彼は立ち止まつて今迄の雰圍氣を省察することが出來た。狹隘なる自然主義より徐々として拔け出でたるは此の時以後である。而して新なるものを彼に與へたのは、先づ獨逸理想主義の

影響を受けたコールリッヂ等の人々で、次にコムトの社會的感情、利他心の說であらう。[1] 更に之に附加すべきものとして、蘇國哲學者の學說と、テーラー夫人との交遊を擧げることが出來る。之等の人々の影響によつて、彼には嘗て知られざりし新な世界が開かれたので、自分は之を理想主義への轉回と稱するのであるが、其の意味は彼が自然主義を去つて、理想主義を採つたと云ふ事ではない、自然主義的立場に於ては思ひ及ばざる、而してたゞ理想主義の立場に立つてのみ考へ得べき傾向が指摘し得るを云ふのである。然らば其は如何なるものであるか。

第一に私の擧げたいのは、彼が人間の內部に活動の餘地を認めたと云ふことである。單なる所動的なものではなくて、其處には能動的に働きかける、創造的な生命を認めたのである。之れ彼が上述の自然主義的立場を採りつゝ、而もベンサム、父ミルと趣を異にする所である。其の一を彼の聯想に關する類似の法則に見出す、父ミルは聯想の法則の一として類似の法則を擧ぐるを否定し、そは唯習熟の法則の一部として之を退けた。[2] 然るにミルは明に類似

1) John Stuart Mill: Auguste Comte and Positivism (New Universal Library), p. 90, 100.
2) H. C. Warren: History of the Association Psychology, pp. 86–87, 97.

の法則を以て聯想法則の一として數ふるのみならず、最も重要なるものとして之を掲げたのである。[1] 類似の觀念の聯想は接近聯想や習熟聯想と異つて、聯想の主體が其の類似するや否やの判別を必要とする、之が判別は單に外界の感覺を受取る機械の如きものの爲し得る所ではない、彼が自ら知らざる裡に、心の活動を認むるに傾いた一例を此に求むることが出來ると思ふ。[2] 其の二としては聯想の作用に化學的變化を認めたことを擧げ得る。父ミルは聯想の作用は機械的なものとのみ見た、例へば橙よりして蜜柑を聯想する時に、蜜柑なる觀念は形、色、臭、味等の單純觀念の機械的集合であると見た、然るにミルは此の場合を目して、之等の單純觀念の化學的結合があると說明した、彼は云ふ。

> 精神現象の法則は、時として機械的法則に似る場合があるが、又時として化學的法則に似る場合がある。……一つの印象が容易にそして卽刻に一群の觀念を呼び起す程、印象相互が結合して頻繁に經驗せられた時には、之等の觀念は屢々相混融し結合して、數個の觀念の如くに見えずして一個の觀念の如くに見える、恰も七色が急速度に

1) John Stuart Mill: System of Logic, Book VI. Chap. IV § 3.
2) Thornstein Veblen: Place of Science in Modern Civilization, pp. 152–153.

我々の眼に映じた時に、生ずる感覺が白色であると同じである。……數個の單純觀念の結合によつて生ずる複雜觀念は、それが實際に於て單純なるかの如く見える時には(卽ち各個の要素が意識の下に區別して考へられない場合には)單純觀念より結果す、之より發生すと稱すべくして、之より構成せらると云ふべきではない。[1] ……故に之等の場合は化學的心理作用の場合である。此の場合に於て單純觀念は複雜觀念を構成すと云ふよりも寧之を發生せしむと云ふ方が妥當である。[2]

父ミルの機械的說明に對して、彼が化學的說明を加へたるは卽ち、精神が單に所動的に觀念の結合をするのみではなくて、此に性質の變化を及ぼす活動が行はるることを認めたに外ならない。其の三の例として、彼が人間の自己及び外圍に及ぼす力を認めたことを擧げ得る。彼が「論理學體系」第六卷に於て、所謂道德學を自然科學と同樣に研究せんとしたる時に、直に起つた問題は人間の精神には意思の自由があつて、必然の法則に支配せらるゝものではないと云ふ反問であつた。若し必然論を採るならば我等の道德的創意心を無視することゝなり、又若し自由說を採るならば、我等の生活に於て、其の人の境遇と當事者の性格とを材料として、豫測をなし用意を爲しつゝある實際と矛

1) the Complex idea,……should be said to result from, or be generated by, the simple ideas, not to consist of them.
2) John Stuart Mill: System of Logic, Book. VI. Chap. IV. § 3.

盾する。更に境遇の人間に及ぼす影響を認めないことゝなつて、社會改良の必要を否定することとなる。此の問題は彼の永く苦んだ所であつた。

私の憂鬱が後になつて復た襲來した時、所謂「哲學的必然」[1]の學說が夢魔の如く私の生存を壓迫した。私は過去の境遇の免るべからざる奴隷であると科學的に證明されたる如くに感じた。私の性格も他の凡ての人々の性格も、吾々の支配の彼方にある力によつて形作られたるもので、吾々自身の力には全然及ばぬ如くに感じた。私は屢々獨言を言つた、若しも私が性格は境遇によつて作らるるてふ學說を疑ふ事が出來たならば、如何に心安く感ずるだらうと。……私は必然の法則が他人の性格に關しては信奉され、自己の性格に關しては信ぜられなかつたならば、そは世の幸福であらうと言つた。私はこの問題に就て頭を惱ましたが、遂に漸く之を通して光明を見た。[2]
(ミル自叙傳譯二四〇—二四一頁)。

彼の作つた結論は何であつたか。

今日かくも根氣好く普及して、そして意地惡く此の偉大なる學說(譯者註必然論を云ふ)を誤解せしめた言葉によれば、人の性格は、彼に對して作らるゝもので、彼によつて作らるゝものではない、それ故にその性格が今とは異つて作られんことを欲するも、そは詮なき事である。彼は性格を變へる力を持たないのであると。然し之は重大

1) Philosophical Necessity.
2) John Stuart Mill: Autobiography, p. 97.

な誤謬である。人は或る程度に於て自己の性格を變化せしむる力を持つ。性格は結局に於て彼に對して作らるものであると云ふことは、間接に彼れ自身によつて作らるゝことがあると云ふことゝ矛盾するものではない。人の性格は境遇其の中に體制を含めて)によつて作らるされど特別の方法にて之を改造せんとの自己の希望も亦其の所謂境遇の一である而して境遇の中でも決して力の小さいものではない。[1]

彼は境遇が性格を作ると云ふ形式を保持することによつて、必然論を採り、而も自己の意思を所謂境遇の中に含ましむることによつて、自由論を採つたのである。此の解釋が果して自由と必然の難問を解決するものたるか、否かは疑はしい、問題は依然として殘つて居る、唯我等の研究に於て必要なることは、此の句の中に現はるゝ彼の必然論に對する不滿の心である。更に人が其の意思を以て性格を更へ得る力を有すと認めんと欲した欲求である。之れ卽ち彼が境遇萬能論を唱ふるロバート・オーウェン等に反對した所以であつて、此に表はれた人の心は自己と周圍を改造し得る力の主體である。[2] 最後に擧ぐべきことは彼が「人性構成學」の建設を斷念したことである。「人性構成學」は人の性格と環境との關係を研究せんとするもので、人間を以て一定の法則

1) John Stuart Mill: System of Logic, Book VI. Chap. II. § 3.
2) 〃 〃 Chap. X. § 3

に支配せらるゝものとの前提に立つたものである。此の如き學問が若し果して實際に成立し得るものならば、便益を感ずる所尠くない、然し人間を對象として此の如き科學の成立し得るや否や頗る疑はしい。彼は千八百四十三年「論理學體系」を完了して後、「人性構成學」に着手せんとしたが、構案遂に成らず、荏苒時を經過せしめたが、遂に千八百四十四年四月三日コムトに書を送つて遂に之を斷念したと報じた。[1] 之れ彼が此の如き學問建設の不可能を感じたからで、之を感じたるは卽ち人間を一定の法則の下に律せしむることの不可能を認めたからではないか、此にも亦ミルの人間に與ふる地位が變更したる俤を讀むことが出來ると思ふ。

以上の諸點に於てミルは人の心の內部に活動の餘地を認め、人を以て生命の主體と看んとした。かくて或は從來の立場に立ちつゝ之と相並んで曾てなき立場を步まんとし、或は一度採つた路を棄て去つた、微細ではあるが、此に自然主義よりの離脫を認むるを得ないか。

第二にミルの變化として擧ぐべきは、功利主義に對する改訂である。彼は

1) Alexander Bain: John Stuart Mill, p. 79.
Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. III. p. 51.

功利主義を遂に捨てなかつた、然し彼の採つた功利主義は名はベンサムと同一のものであつても、其の實に於て大に異るものがある。元來ベンサムの功利主義は一方に於て心理學的快樂說を採つて、人間が唯自己の快樂を求めてのみ動くものなりと認めつゝ、他方に於ては公衆的快樂說を採つて、吾人は最大多數の最大幸福を圖るべきを云ふ。此の矛盾をいかにして解決すべきかはベンサム門弟の尠からず苦心した所であつた。[1] ミルは人間は必ずしも自己の快樂をのみ求むるものではないとし、所謂心理學的快樂說を拋棄して、功利主義より利己的分子を驅逐したのであつた。彼は「ベンサム論」に於て云ふ。

ベンサムは人間が靈的完成を目的として追求することの出來るものとは認めなかつた。唯自己の內的意識より湧く善を希望し惡を恐怖すると云ふ心のみに動かされて、唯其の事自身の爲のみに、人間が自己の性格を優秀の水準に引上げやうと云ふ欲求を持ち得るものとは認めなかつた。此の心は良心と云ふよりも廣い內容を持つたものであるが、良心と云ふ狹い形に於てさへ、人間性に此の大事實あることは彼の注意を脫した所である。……自尊の心と云ふ言も又は其の言に相當する觀念も、私の記憶する限りに於ては彼の全著作を通じて唯一回でも出て來ない。[2]

1) 本書102-109頁
2) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol. I. p. 359

卽ち吾人が公衆の幸福を圖るは、吾人の利益を求むるの故ではない、吾人に內在するあるものに對する奉仕の心より來ると云ふ。更に又吾人が公衆の幸福を圖らざる場合に於て、吾等を鞭つものは外部より來る賞罰に非ずして、善を爲せとの內部よりの命令なりと云ふ。今「功利主義論」の一節を引用すれば、次の如くである。

功利主義は他の道德の體系に屬するすべての制裁を持つ、又持てないと云ふ理由はない。其の制裁とは一は外部より來るもので、一は內部より來るものである。外部よりの制裁に就ては、此に詳しく述べるの必要がない。……吾々の義務の標準がどうであらうとも、內部より來る義務の制裁は、同一である、卽ち我々自身の心に在る感情である。義務に反した場合に於て、强かれ弱かれ感ぜられる苦痛の感である。其の感じが重大な場合に當つては、敎養ある道德的性格をして、義務に反する行爲を爲すを不可能たらしむことがある。……其の拘束力は一群の感情が內部に存することに在る、若し吾々が正義の標準に反することを爲さんとするには、其の感情を突き破らねばならず、又若し其の標準に反するならば、其の後に於て後悔の形に於て心の戰を爲さねばならぬからである。吾々が良心の本性や起源に付て、如何なる學說を有しやうとも、以上が其の內容を爲す要素である。[1]

1) John Stuart Mill: Utilitarianism (New Universal Library), pp. 51-53

假令彼は以上の道德的性情の起源を說明するには、依然として聯想心理の作用によつて、利己心より變化したものと云ふ說明方法を採つては居るにしても、[1]其の起源が何であらうとも、人間は利己的動機によつてのみ動くものではない、其の內部に道德的命令があることを認めて居る、之れベンサム學徒にとつて空谷に跫音を聞くの感があるではないか。更に進んで彼が快樂の說明を爲すを見るに、ミルは快樂に種類の差別があると云ふ。卽ち

或る種の快樂は他のものよりも、より望ましくより價値ありとの事實を認むることは、功利主義と全く相容るゝ觀念である。吾々が他のすべての物を評價するに、分量と共に品質を考慮に入るゝに拘はらず、快樂の評價に付てのみは唯分量のみに依るべしと思はるゝは不合理である。[2]

然らば其の品質の決定は如何にして爲さるゝやと云ふに、世間多數の人のよしとするものは卽ち品質の優れるものなりと云ふ。而して優れたる快樂を求むる者は、假令之を滿足し得ずとしても好ましく、劣れる快樂を求むるものは滿足し得たる場合に於ても好しからずとし、「滿足したる豚たらんよりも、

1) John Stuart Mill: Utilitarianism (New Universal Library), p. 69.
　　〃　　System of Logic, Book VI. Chap. II. § 4.
2) 〃　　Utilitarianism, pp. 15–16.

不滿足の人たらん方よく、滿足したる愚人たらんよりも、不滿足なるソクラテスたらん方より善し」との有名な言を述べた。[1]

元來功利主義とは、善なる意識の內在を否定し、客觀的に善の內容を表示せんとして發生したものである。然るにミルが其の客觀的表現の一部たる快樂なる語を說明するに當つて、價値の差別を認めて、價値觀念の內在を暗默に認めたるは非常なる矛盾である。善の內容を說明するに、善の觀念を前提としたるは循環論法の誹を免れない。之を咎むることは容易である、唯自分は此にスチュアート・ミルが自ら矛盾と知らずして、反對派の倫理說を採りつゝあるを認めて、吾人の所謂理想主義への回轉の一例とするに止める。

第三に擧ぐべきことはミルの人生觀が變つたことであらう。凡そ世に處する吾等の態度に二つの行き方がある。一は外部に表はれた仕事に重を置く行き方で、一は吾々の內部に在る心の成長に重を置く行き方である。後者を採る場合に於ても外部的の仕事を無視するのではない、唯心の成長の爲に仕事をするか、或は心の命令あるにより仕事をするか、何れにしても內心の發

1) John Stuart Mill: Utilitarianism, p. 18.

露としてのみ仕事を扱ふのである。ミルは千八百二十一年來最大多數の最大幸福を以て生涯の目的とした、卽ち彼の行き方は前者に屬するものであつた。次で憂愁の時來るや、彼に起つた反問は何であつたか。それは「若し此の世に於て最大多數の最大幸福がすべて實現せられた場合に於て、それは汝にとつて偉大な歡喜であり幸福であらうか」と云ふことであつた。彼の抑ふべからざる自己意識は、之に對して明瞭に「否」と答へたのである。[1] 私は此の中にミルの人生觀の回轉が讀まれると思ふ。從來彼の目的は社會改良に在つた。若し果して人間の目的が社會改良にあつたならば、それが實現された曉に於ては歡喜と快樂とを感じて人生を終つて然るべきである。然るに彼は之に否と答へたのである。此の時始めて彼は人生の目的が外の仕事に在らずして、內に心の成長を爲すにあるを感じたのであらう。固より社會改良は其の後に於ても彼の捨てた所ではない、しかしそは唯內心の命令がしかすべきを促すが故であつて、唯漫然として仕事を仕事として從事するのではない。すべての to do の奧には必ず to be がある。事業に狂奔するものも、實は心の成長

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 77.

を所期しつゝあるのである。唯問題は自ら之を意識するか否かに在る。ミルが憂愁の時代に於て、一歩を進めて之が意識の境地に向つたのは彼の生命が永遠性を有する有力なる原因の一である。例へば彼は「自由論」の中に於て、獨逸の學者フムボルドの言を引きて云ふ。

> 人生の目的卽ち、漠然たる刹那の欲望に依るに非ずして、永遠不易の理性の命ずる人生の目的は、各人の有する能力をして完全充足の一體として、最も高度にして又最も圓滿なる發達を爲さしむるに在る。故に人間として不斷に努力を傾けざるべからざる目的は、特に同胞の運命に影響せんと欲する者の絕えず眼を注がざるべかざる目的は、力と成長の個性である。[1]

又更に、經濟學原論中の一句を引けば左の如きものがある。

> 人生の實務は人の實際的教育の主要なる一部を爲すものである。書籍と學校の訓導とは大いに必要であり有益ではあるが、之なくしては行爲に人を資格づけ、目的に對して手段を適應せしむるの働に、人を資格づけるには不足を感ずる。訓導は精神的發達の必要條件の唯一つのものたるに過ぎない。他のもの卽ち殆ど缺くべからざるものは、能動的精力を潑溂として發揚せしむるに在る。勞働、工夫、判斷、抑制、すべ

1) John Stuart Mill: On Liberty (New Universal Library), p. 83.

て之等のものに對する自然の刺戟は實に人生の苦闘難闘である。[1]

之等の言を通じて見る時に、彼の人世の目的に對する見解が窺はれる。其の他彼がフォックス嬢に語れりと云ふ「何人も先づ十字架を負ふ堅き覺悟なくして、時代を益せんとして何事も爲すべからず」[2]の言の如き、「宗教の效用」に於て宗教を說きたる感激的の文章の如き、[3]彼の作物に屢々表はるゝ mental cultivation の力說の如き、[4]何れも彼の眼が外部に於ける結果を離れて、深く人間の內界に注がれたことを示すもので、彼は此の種の問題に付て、詳細なる說明を系統的には試みて居ない、然し彼が到達し得たる倫理的立場は、善とは自己の實現なりとせるトーマス・ヒル・グリーンと、殆其の差異を認むるを得ない。[5]

以上ミルが自然主義よりの解放として、三個の例を擧げた。此外言葉の內容よりも其の文體を見るならば、ベンサム、ジェームス・ミルの思ひ及ばざるものを見出す。[6] グリーン、ケヤードの文章と目するも、何人も怪しむものはないであらう。ミルが自然主義よりの推移は、上述の如く倫理的立場に於て最も著しいのであつて彼は結局認識論に於ては最初の立場を讓步しなかつた、然

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy (edited by Ashley), p. 948
2) John MacCunn: Six Radical Thinkers, 1910, p. 58.
3) John Stuart Mill: Three Essays on Religion, p. 109.
4) 〃 Autobiography, pp. 81–82.
〃 Utilitarianism, p. 26.

し仔細に點檢する時に、此の部分に就ても、彼は從來の立場の維持し難きを認めないではなかつた。經驗を以て智識の唯一の源なりとして、精神を以て一片の受動體とするは、遂に說明として徹底し得ないと見え、正直なる彼は、精神とは『終に說明し得べからざるもの』[1] (final inexplicability) となし、『又私自身の自我とも稱すべきものが其處に在る』と稱して、[2]從來の立場の弱點を告白した。此の弱點が卽ち、カントの批判的研究を必要としたる所以なるを思ふ時、彼が既に理想主義と相去る唯一步の所に在つたことを知り得るのである。

ミルの生涯は誠に高潔なる生涯であつた。彼の眼は自己の上に注がれずして、常に普遍的なる或るものの上に注がれた。彼は快樂を顧みずして、靈的な或るものを望んで居た。[3] 此の事は彼が理想主義への回轉を爲さざりし前と後とによつて毫も異るものではない。彼の學說の說く所と別に、彼の人となりは實に此の如きものであつた。換言すれば彼の學說が自然主義たり功利主義たる時に於ても、彼の性格は夙に理想主義であつたのである。此の事はベンサムの功利主義に就て既にしか云ひ得る。[4] 又父ミルに就ても亦同樣

5) Thomas Hill Green: Prolegomena to Ethics, 1883, pp. 196–205.
6) 特に自由論の卷頭の「デヂケーション」の如き功利主義論 19–20 頁の如き其の最も著しきものである。
1) John Stuart Mill: Examination of Sir William Hamilton's Philosophy, Chap. XII.
2) Harold Höffding: History of Modern Philosophy, 1915, vol. II. pp. 415–416.

である、ミルは父を評して、『彼は道德の學說に於てエピキュリアンであつた、しかし個人としての性格に於てはストイックであつた』と。[1] 此の一句はいかに功利主義者の學說と性格とに矛盾あるかを語り盡して餘蘊ない。ミルが上述の如く理想主義へ接近したるは此の潛める理想主義を意識の界に持ち出して、之をその學說の中に注入したるに在る、ベンサムに於て無意識なりしものの、ミルに至つて白日の下に現はれたのである。嘗てケアードは云つた事がある。

> Philosophy has to detect and bring to the light of day certain facts or relations which enter into the constitution of things, which indeed are presupposed in all our consciousness of them, but which, nevertheless, generally escape without notice. —— Edward Caird: Social Philosophy and Religion of Auguste Comte, 1893, 2nd edition, p. 74

即ちミルはベンサム等に比して、より哲學的になつた、かくて彼は理想主義へ轉回したのである。ミル思想史研究の興味ある所以は、實に此の一節にある。

然らば彼は完全に自然主義より蟬脫したるかと云ふに、決してさうではな

3) William Graham: English Political Philosophy, 1899, p. 272.
Frederic Harrison: Tennyson, Ruskin and Mill, 1899, p. 288, 290, 317.
4) 本書 164-170 頁
1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 27-28.

かつた。彼は「コールリッヂ論」に於て、コールリッヂに溢るゝばかりの推讃を爲しつゝ、同文同所に於て認識論に就てはロック、ベンサムの立場を正當とすと述べて、[1] 明に自然主義的立場を捨てなかつた。のみならず人間及び社會に關する研究者の最も注意すべき危險は、誤謬を眞理とすることに非ずして、一部の眞理を全部の眞理なりとするにありとした。[2] 而して所謂獨逸コールリッヂの哲學 (Germano-Colerigian Philosophy) は十八世紀の思想に對する反動である。十八世紀思想家が看過したる眞理の一面を代表するものにして、此の兩者は盾の兩面の如きもので、共に併せて眞理の全面を爲すものなりとなした。[3] 然し二者は果して盾の兩面といふべきものであるか。若しロック等の認識論を採るならば、そは個人主義、功利主義に終らざるを得ない。若し團體主義理想主義を採らんとするならば、ロック等の認識論を捨てなければならない。一方の立脚地の上に在りながら、他方の地盤の上に立てる結論のみを採るは、求むべからざる所である。兩者は其の本性に於て相容るべからざるものであるからである。彼はカントの批判哲學の思想の眞意義を遂に理解するを

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol I. p. 409.
2) 〃 〃 〃 p. 399.
3) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 92-93, 139-140.

得ずして、理想主義を以て單に十八世紀思想に對する反動なりとした。然し之れ獨逸哲學の功績に盲目なるものである。カントの認識論の上に立たざる理想主義的傾向は、之れ唯十七八世紀の素朴幼稚なる直覺主義への復歸であつて、眞正の意味に於ける理想主義ではない。彼の採るべき路は其の認識論を捨てゝ、カントの認識論の上に、上述の理想主義的傾向を建設するにあつたのである。彼が之を爲し得ずして一脚をロックに置き、而も一脚をコールリッヂに置かんとしたるは、之れ會々彼が過渡時代の思想家たる所以である。

第二項　靜的觀より動的觀へ

此に所謂動的觀とは、文化を以て不斷の變化を爲すものと認め、現在は過去の集積にして、又將來を產むべき一過程に在るものと觀るものを云ふ。靜的觀は動的觀と反對に立つものであるが、然し必ずしも文化を以て永久不易のものと斷ずるのではない、唯現在の狀態其の儘を認むるに止まつて、不易たるか進化があるかの問題に氣が付かないのである。ミルを育てた時代の空氣

は靜的觀のみあつて、動的觀はなかつた。それは思ふに十八世紀の社會思想が物理學の影響の下にあつたことに原因する。由來近世の社會思想は、三個の自然科學より影響を受けたと稱せらる、物理學、化學、生物學より來るもの卽ち之である。而して十七世紀は物理學發達の時代であつて、十八世紀は化學の時代、十九世紀は生物學の時代である。從つて此の三個の時代の自然科學に伴つて、社會思想は夫々影響を受けたので、十八世紀の社會思想を一貫せる物の見方、考方は、主として十七世紀の自然科學たる物理學より來れるものである。そうして物理學の對象たるものは無機物であつて有機物ではない、死物であつて生物ではない。故に變化なく生長がない、之れ物理學的見方が靜的平面的であつて、動的立體的ならざる所以である。相異る二個の物體の關係を研究するに止まつて、同一物を時間の經過に照して、時間上に先行せる其の物と後來の其の物との關係に注意を拂ふに至らなかつた所以であらう。

十八世紀の思想家は、現在の社會制度を唯其の儘に觀察したるに止まつて、過去の永き變遷の結果とは認めなかつた、從つて現在を構成するものとして

過去を眺むることを知らなかつた、之れ彼等が一般に歴史の研究に冷淡なりし所以である。ベンサムが歴史を輕んじたるは多くの人の云ふ所で、[1] ジェームス・ミルも亦歴史を眺むる眼を解しなかつた。彼等の個人主義經濟學は、演繹的抽象的なりとの理由を以て、多くの反對者から攻撃された。然し私の見る所に依れば彼等は必ずしも、歸納的でなかつた譯ではない、英國は經驗哲學の國であつて、歸納的具體的なるは英人性格の特長である。此の國に生れた經濟學が演繹的抽象的との非難を受くるは解し難い。思ふに此の種の非難を受けたる理由は、人間性を以て利己的なりとした前提を到る所に適用したるに依るのであらう、然し彼等が人間性を以て利己的なりと斷じたるは、彼等の研究方法が歸納的經驗的であつたことに原因するので、前時代の人間觀に比するならば、此の結論を齎したるは、一に研究方法が歸納的經驗的なりしとに在る。寧ろ個人主義經濟學者の咎めらるべきは、其の研究方法が演繹的抽象的なりしことに非ずして、彼等の社會思想が靜的觀を脱しなかつた點に在る。物皆變る、前時代に適用せられしものが、現在に於て適用せられなくなる。

1) John MacCunn: Six Radical Thinkers, p. 11, 51.

彼等の缺點は社會が不斷の變化を經過しつゝあるものと云ふ見方を知らなかつた點にある。若し彼等に事實の蒐集に疎なりしと云ふ缺點があるならば、寧ろそは各時代の事實の蒐集を必要とする動的觀の缺乏に原因するのである。[1] 要するに十八世紀の靜的觀がいかに、當時の學問の内容に關係あるかは、之を以て知ることが出來るであらう。

然し斯く云ふならば反問は必ず來るであらう。十八世紀には動的觀がなかつたと云ふに拘はらず、歴史學上の傑作に富むではないかと。確に十八世紀は歴史の作物に乏しくはない、ギボン、ヒューム、ロバートソン、の如き何れも、十八世紀が有したる歴史家である。ジェームス・ミルさへも嘗て「印度史」を公にしたのである。然し歴史の傑作が多いと云ふことは、當然に動的觀があつたと云ふ結論を來すものではない。眞正の歴史の研究は動的觀を俟つて始めて成立する。現在が過去の集積なる時に、始めて現在を構成する過去の意義が明にせらるゝ、此に歴史の研究が始まるのである。單に過去の事實を研究したりと云ふ一事は、歴史を解せりと云ふには足りない、眞正の歴史は持つ

1) Alfred Marshall: Present Position of Economics, 1885.

べき見方を以て過去を眺めたる時に於て始めて成立するのである。十八世紀の歷史家が歷史を研究したるは、持つべき見方を以てしたのではない、寧ろ其の哲學が懷疑說に陷つて、收拾すべからざるや、哲學を去つて過去の事實の穿鑿に向つたのである。之は哲學あつての歷史ではなくて、哲學に絕望してのの歷史である。[1] 此の如き場合は單に好奇心を滿足せしむる爲めの歷史か、或は敎訓の目的を以て見た歷史であつて、所謂 Erzählende Geschichte, Lehrhafte Geschichte であつて、Entwickelnde (Genetische) Geschichte ではない。[2] 從つて眞個の意味に於ける歷史ではない。彼等の見たる過去の事實は斷片的に羅列したる事實であつて、之等の事實が一定の接續をなして、層々累積して現在を爲すものとの見方の上に立つたものではない、そは唯一片の物語たるに止まるのである。歷史上の文獻があると云ふことと、眞正の歷史の研究があつたと云ふことは同一ではない。眞正の歷史の研究には動的觀あるを必要とする、其の有無が十八世紀の歷史と十九世紀の歷史とを區別する中心點である。

動的觀は十九世紀が後世に與へたる偉大なる貢獻である。之より以後の

1) Leslie Stephen: English Thought in Eighteenth Century, 1902, vol. I. pp. 57-59.
2) Ernst Bernheim: Einleitung in die Geschichtswissenschaft, 1909. ss. 7-13.

人々の眼は單に Sein を見るに止まらずして、Werden を見ることとなつたからである。過去は新なる眼を以て見返さるゝこととなつた、コロンバスの米國發見が人類に對して空間を擴張したものとすれば、之れ實に人類の視野を廣めて時間上に世界を擴張したものに外ならない。此の見方は二つの方面から表はれた、一は哲學者より來れるもので、一は生物學者より來れるものである。ヘーゲルは dialectic method に於て Thesis がやがて Antithesis となり、兩者相合して Synthesis となり、斯の如く不斷の發展を爲して、萬物が進化し往くものになることを說いた。此の事は現在が不斷の集積にして、數多の Thesis と Antithesis との戰と調和の結果成立せるものなることを知らしめた。既に然らば現在を知らんとするならば、過去を究めねばならない、又現在を知ることによつて現在の Antithesis なる未來を知ることも出來るであらう。過去と現在と未來とが、一つの生命の一貫せる連續なる事は、始めて此の時明にせられ、人々の眼を新しく過去に向はしめた。之を說いたのは主としてシェリング、ヘーゲル等のカント以後の思想家であるが、此の種の見方は一般に、十

九世紀初期に於ける歐洲各國に磅礴して居たので佛蘭西のサン・シモン、コムトの如きも亦此の見方に立てるものであつた。恰も同時に十九世紀に入つて、生物學の研究は大に進歩し、遂に千八百五十九年チャールス・ダーウィンは「種の起源」を公にして、一般生物界に、生存競爭、優者必存、外圍順應、遺傳等の作用があつて、生物が不斷の進化を爲しつゝあるを自然科學の方面より立證した此の事は哲學者より來る進化說と相並んで、今迄靜的にのみ物を見たるに、動的に見ることを敎へ、今迄は何たるかを研究するに止まつたのが、今後は何でありしか、如何にして今日に至りしかを研究することとなつた、之れ實に人類思想史上の革命と目するも不可ないのである。

此の種の傾向は一般の歷史其のものの研究を勃興せしめて、幾多の偉大なる歷史家を輩出せしめたのみならず、社會現象の取扱に影響して、各方面の社會科學に所謂歷史學派なるものを勃興せしめた。獨逸に於ける其の先驅は法律學に於けるサヴィニー、ブフタ等で、經濟學に於てロッシル、クニース、ヒルデブランド等が出た。英國に於ては獨逸の此の派の影響を受けサヴィニーに

當るものがサー・ヘンリー・メーンであつて、ロッシェルに當るものがクリッフ・レスリーである。

ミルの爲に最初に動的觀を齎したるものはサン・シモン、コムトであつた。彼は自叙傳の中に云ふ。

他の何人にも優つて政治上の新しい考方を私に徹底させたものは、佛蘭西に於けるサン・シモン派の人々であつた。千八百二十九年及び千八百三十年に、私は彼等の文章の或るものに接觸した。彼等は當時尙彼等の思索の初期にあつた。彼等は猶未だ彼等の哲學を一の宗敎に仕立てず、彼等の社會主義の計畫を組織立てゝ居なかつた。彼等は唯世襲財產の原理を疑ひ初めたばかりであつた。私は此の點迄も彼等に同ずる用意を決して持つて居なかつた。併し私は彼等が始めて示して呉れた、人間進歩の自然的順序に關する組織的見解と、特に彼等が總ての歷史を組織時代と批評時代[1]とに分割した遣方に、いたく感服した。……彼等の出版物中には又、頭拔けて優秀と思はるゝものが一つあつた。その中に於ては、此の一般觀念が圓熟して尙一層明確な、そして敎訓に富むものとなつて居た。是はオーギュスト・コムトの初期の作で、彼は當時自らサン・シモンの弟子と呼び、著者の扉紙にも然か名乘つて居たのであつた。此の論文の中に於て、コムト氏は後に氏が豐富なる引例を以て例證した

1) organic periods and critical periods.

所の學說、卽ち人智の總ての部門に於ける三個の階段の自然的繼起の學說を初めて發表した。所謂三個の階段とは第一に神學時代、次に形而上學時代、最後に實證時代である。……私が此の時サン・シモン派及びコムトの示唆した思想の行き方から享けた重なる恩惠は次の點にあつた。卽ち私は思想の過渡時代の特徵に就て、以前よりも遙に明瞭な概念を得、斯くの如き時代の道德的及び智的性質を人性の正常な屬性と誤認することを止めた。私は議論ばかり喧しく、確信の薄弱な現代を通り越して、批評時代の粹と組織時代の粹とを集大成した未來を翹望した。卽ち思想の無拘束的自由と、凡て他人を害せざる個人行動の無制限的自由を備ふると同時に、何が正何が邪、何が有益何か有害なるかに就ての確信が、幼時の敎育と萬人一致の情操とによつて深く感情に印銘せられ、理性と人生の實經驗とによつて堅く基礎づけられ宗敎、倫理、及び政治上の過去現在のすべての學說の如く、之を周期的に廢棄して、他の學說に移る必要のなくなる時代を翹望した[2](ミル自叙傳譯二三三—二三七頁)。

更に彼の動的觀に示唆を與へたものは、所謂ゲルマノ・コールリッヂ派の歷史哲學であつた。彼は「コールリッヂ論」に於て云ふ。

過去半世紀の間に、歷史の上に投げられた輝ける光は、殆全く此の派より來れるものである。歷史が佛蘭西革命前の哲學者によつて見られた輕侮は著しいものであつ

2) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 93-95.

た。彼等の最も眞面目な一人であるダラムベールは、苟くの過去の事件の記錄は一切を抹殺したしとの希望を述べたものである。歷史を書く當時の形式と、之より敎訓を導き出さんとする當時の方法を以てしては此の輕侮を買ふに充分であつた。されど彼等は眞理ならざるものを見たるも、眞理なるものを見なかつた。過去より傳はれるものゝ大部分は、之なくば容易に達成し得べかりし人間の幸福に到達する途上に於て、唯障害となるに過ぎざるものと見たる彼等が、歷史に關して甚だ淺薄なる研究を以て滿足したるは毫も怪しむに足らない。されど一般に社會を維持することと其の事、特に革新的進步の狀態に社會を保持すると云ふことが、假令不充分なりとも幾世紀間最强の障害と鬪ひ來れる、甚だ困難なる事業たることを認むるものにとつては歷史に對する見方は又別種のものであつた。……ヘルデルよりミシュレに至る偉大なる作家と思想家の一群によつて、今迄無意味の音響と狂亂に滿ちた、痴人の語れる物語と見られる歷史は、始めて原因と結果の科學となつた。彼等は過去の事實と事件とをして人類進化の途上に於ける意味と明白なる地位とを持たしめた。歷史に與ふるにロマンスの如き興味を以てしたるのみならず、現在を產出し今も尙現在を保持する要素を開發することによつて、未來を豫言し指導する唯一の方法たらしめたのである。[1]

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol. I. pp. 426-427.

所謂佛蘭西革命以前の哲學者の範疇にあつたミルにとつて、人間及び社會が不斷の進化の途上に在るものとの見解は、驚異に値するものに相違なかつたのであらう。此の以後彼が如何に歷史に對する興味を感じたるかは、千八百四十四年の「ミシュレーの佛蘭西史」千八百四十五年の「ギゾーの歷史論」に之を見ることを得る。彼に依れば歷史の研究には三階段を擧ぐるを得る、其の第一階段は現代の精神と社會事情とを以て過去を眺むる歷史である。ヘロドクスを譯したるラルシェルは丁度之に當る。此の種の歷史は過去の事實を事實として眺むるものではない、現代の眼を通して眺めたる過去たるに過ぎない、事實の眞相に反するものたるは言を俟たない。然し此の歷史觀が與へた功績は、從來の乾燥無味の史實をして現代と接觸せしめたるに在る、[1]之より以後過去は單に緣遠い別個の世界とはならなくなつた。第二期の歷史は過去を眺むるに過去の精神を以てするものである。之れは豐富なる想像力を必要とし同時に事實に反せざらんとする良心と抑制とを多分に持たねばならない。[2] ニーブール及びカーライルが之に當る。歷史研究の第三期に於て

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol. II. p. 120, 127.
2) 〃 p. 128.

始めて、歷史は「原因結果の進化の連鎖と考へられる」、前時代は如何にして後の時代を產出したるか、如何なる法則によつて時代が互に連接するか、之を探るのが卽ち此の時代の歷史の任務である。[1] 之が適例としてチエリー、ギゾー、ミシュレーを擧げて居る。此の種の見方は英國に於ても必ずしも絕無ではない、[2] コールリッヂに始まり、オックスフォード運動の人々も亦此の種の歷史觀を有して居た。然し之は十八世紀には無かつたことである。ギボンとギゾーとを區別する點は、彼等の使用したる記錄に在るに非ずして、實に其の歷史を眺むる態度に在つた。[3] 今や歷史は人間の有する能力の不斷の發展或る遙かなる目的卽ち人類の運命に向ひつゝある人間及び社會の經過と見られる。[4] かくて之等の大陸の歷史家は所謂「歷史の哲學」[5]を有する點に於て、明に從來の歷史家と區別せらるとなし、彼は佛獨に於ける此の歷史學の新傾向に對して、口を極めて英人の注意を喚起せんとした。ミルの所謂歷史哲學なるものに對する驚異は、今日より之を見れば、幼稚の域を脫しない、然しベンサム、父ミルの靜的觀に育てられたミルが、歷史哲學の研究に興味を有するに至りしは、此

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol. II. p. 129.
2) 〃 p. 222.
3) 〃 p. 227.
4) 〃 p. 221.
5) 〃 vol. I. p. 425.

に時代相の變化を看取することが出來ると思ふ。

然らば動的觀はミルの社會現象の扱方に如何なる影響を與へたるか。第一に彼は過去の文化に對する尊重を知つたのである。彼は「コムトと實證主義」の中に於て云ふ。

又彼は各種の信仰と各種の政治組織との、歷史上に於ける興亡起伏を叙述し、其の何れもが終局的のものたるを得ざる所以の缺點を最も强く表示したるに拘はらず、此の事は彼をして過去の人物と意見とに對して、瞬時だも不當の見方をせしむることにはならなかつた。彼は其の學說なり行爲なりが如何なる缺點を有すればとて、眞に人類の改善の仕事に貢獻したる人に對しては、寬容の精神を以て、之に拂ふに相當の感謝を以てした。過去のすべての思索の方法及び社會組織の中に、人類をして改善の一階段よりやがてより高き階級に昇らしむるに、有用なる使命を又其の多くのものに就ては必要なる使命を果したるを認めたのである。[1]

之れ彼がコムトを評したる言であるが、之を他の處に於ける彼の言と對照する時に、[2]明にミル自身が過去に對して採らんとする態度を云ひたるものと解することが出來る。現在が過去の進化したるものであるならば、過去を全

1) John Stuart Mill: Auguste Comte and Positivism, p. 115.
2) 〃 Dissertations and Discussions, vol. I. p. 424.

然否定することは、現在を否定することであり、又未來をも否定し去ることである。過去は現在を作れるものとして多大の感謝を拂ふべきである。過去尊重論に働ける精神は形を異にして現在を動かしつゝあるのである。過去尊重論者の咎めらるべきは、其の過去の制度の形式に執着するが故であつて、過去の精神に執着するが故ではない。精神が表現したる其の形式は、時代の變れる現時に於て、當然に廢れねばならない、然し其の形式となつて表はれた精神は、形式と共に之を棄つべきものではない。唯破壞革命に急なりし十八世紀の思想家が持つを得ざりし、過去に對する新なる見透しは、彼に至つて始めて出來たのであつた。此に於てベンサム、父ミルによつて一概に攻擊の對象となつた國家も敎會も、靜に其の眞價が認めらるゝに至つた。彼が前項に於て述べたるが如き理想主義への轉回も、又後述する團體主義への推移も、一に彼が過去の精神に對する研究から、捉へ得た暗示を、現在に活用せんと試みたるに外ならない。

彼はかくして餘裕を以て物皆をあるべき値に評價することを知つた、此の

點に於て徒に躁急なる革新論者と趣を異にする、然し彼は又過去のみを尊重する保守論者と其の揆を一にしない、之れ彼が動的觀より來れる第二の賜物である。卽ち彼は動的觀によつて現在が永遠の未來に至る一過程たることを知るに及んで、物の價値が相對的なることを解した、かくて現狀維持論者に反對し、敢然として改革者としての從來の立場に對する確信を强めたのである。先づ第一に人間性が決して永遠不易のものではないことを悟つた、人を以て利己的のものなりとするも、これは永く變り得ない固定した性格ではなくして、利他的のものに變り得るのである、利己的なるは人の本性と云ふよりも、寧ろ社會制度の罪と目さなければならない、かくして彼は他人の爲に勞働する社會主義の時代を夢想したのである。[1] 次に現在の社會制度を以て未來に至る一階段たるに過ぎざると見た、彼が私有財產、相續制度に對して疑の眼を注ぎ、批判の對象としたるは此の時以後である。現在を偉大なる時の流れの一片となし、未來の開展を其の中に垣間見る時に、現在に對する觀察は又別個のものたらざるを得ない、彼が分配論を人爲的制度の賜物なりとなし、[2] 共產

1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 133-134.
„ Auguste Comte and Positivism, p. 83.
„ System of Logic, Book VI. Chap X. § 3.
2) „ Principles of Political Economy, pp. 21. 199-200.

制度が必ずしも古代にのみ行はるゝものに非ざるべきを考ふるに至つたのは、[1] 動的觀の賜物で、後述する團體主義への推移は此に負ふ所が尠くない。[2]

要するに人間性が變化し得べきことは、彼及び彼の先輩が夙に認めて居た所であつた、何となれば人間性が變化し得べきものなればこそ、彼等は人間の改善に努力したのである。又社會制度が永久不變のものならざるは、亦彼等の認めた所であつたに相違ない、何となれば其の時の社會制度が恒久的のものなりとせば、彼等は社會制度を攻擊し得べき筈はないからである。唯彼が暗默の裡に前提としたる、人間及び社會に對する動的觀は、ミルに至つて意識の界に齎されて、此に確實に信念となつた、かくして彼が社會改革者としての立場は强められたのである。彼が歷史を研究することによつて一方に於て過去を尊重することを知りつゝ、他方に於て未來を翹望して、止まざりしは、吾人が注目に値する點である。過去を尊重するも保守論者となることなく、未來を翹望するも破壞論者となることなく、過去現在未來の三界を徐に眺めて、すべてを公平に評價しつゝ進むことを知つて居た、之れ彼が眞正に歷史を解

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol. IV. pp. 141-142
2) John Stuart Mill: Autobiography, p. 95.

することを知つたことより來る賜物であらう。

以上述ぶるが如くして、ミルは靜的觀より動的觀に移ることが出來た、時代が十八世紀より十九世紀に回轉したる變化は、此にミル一個の內的生活の中に歷々として指點することを得る。固より十八世紀の聯想心理學者は、或る意味に於て進化の事實に觸れないではなかつた、聯想の結果として、簡單なる觀念より複雜なる觀念が成立し、利己心が聯想によつて利他心に變るとの說明の如きは、レスリー・スチーブンの所謂 natural history of whole growth of knowledge, actual development of thought を示したものであつて、[1] 明に進化の事實を暗示したものと云ひ得る。然し之れ唯後年の眼より眺めたる時に於て、しか云ひ得るので、彼等と雖遂に進化の事實を知らなかつた、況んや爾餘の十八世紀思想家に至つては、固より言を俟たない所である。ミルは之より拔け出ることが出來て、時代の新傾向に順應することを得たのであるが、然らば彼は果して進化なる思想に昧達することを得たか否か。彼がダーウィンの進化論に就て何等の知識を持たざりしは多くの人の云ふ所である。[2] 彼の如く個人ある

1) Leslie Stephen: English Utilitarians, vol. III. p. 80, 436.
2) John MacCunn: Six Radical Thinkers, p. 53.

を見て、人種なる團體を認めざる人にとつて、ダーウィンの進化論を容るゝの餘地なきは、當然である。然らば飜つて理想主義より來る進化論に徹底するを得るかと云ふに、思ふに彼の採りたる經驗的の認識論は、之を不可能ならしめる、何となれば生成發展なる觀念には、價値なる觀念の存在を前提とする、而して價値なる觀念は結局に於て a priori に之を認むるの外はない、然らば彼の如くa priori を否定することを續けた思想家は、遂に進化なる事實を認むるを得ない道理である。卽ち靜的觀より脫却せんとして試みたるも、終に動的觀に昧達しえざる矛盾を有するは、彼が飽く迄も過渡的思想家たるの所以である。

第三項　個人主義より團體主義へ

元來個人主義なる言には二樣の意味がある。第一の意味の個人主義とは、生活の目的が個人に在るを云ふもので、此の意味の個人主義に對する正反對の觀念は、國家又は其の他の社會が生活の目的にして個人は單に其の手段たるに過ぎずとする思想である。此の意味の個人主義が其の確立を全うする

が爲には、樣々の爭を經過するを必要とした、殊に其の著しきものは、敎會及び國家に對する抗爭である。敎會及び國家は元來個人の爲に在るものであつて、夫れ自體が目的であるべきものではない、然るに個人を以て其の手段としたるが爲に、個人主義は先づ之と戰はなければならなかつた。敎會に對する爭は宗敎改革を以て始まり、比較的早く落着したのであるが、國家に對する爭はしかく簡單に解決はしなかつた近世數百年の歷史は、個人が國家より解放せられ、獨自の目的主體とならんとする努力の過程である。之が爲に或は國王をして個人生活に干涉せしめざらんとする誓約を爲さしめ、或は民衆の代表者をして政治に參與せしめ、或は元首を選擧して任期を制限したるが如き、何れも個人主義が其の實現を保證せしめんとする方法たるに外ならない。之等は何れも國家の權限の行使に就て、一定の條件を附せんとするもので、權限自體に指を染めんとするものではない。然るに個人主義は其の實現の過程を辿る內に、以上の如き權限行使に條件を附するのみにては到底個人生活に充分の保證を與ふることが出來ないので、遂に進んで國家の權限の範圍を

縮少せしめ、個人の生活に對する干涉の程度を局限することゝなつた、之れ卽ち第二の意味の個人主義にして、所謂自由放任主義と稱せらるゝもの之である。而して更に第一の意味の個人主義實現の方法として、自由放任主義に代つて、國家の干涉を個人生活完成の爲に容認せんとするもの、卽ち現代の團體主義である。以上の如く第二の意味の個人主義とは第一の意味の個人主義の實現の爲めの、云はゞ一種の手段である。從つて第一の意味の個人主義と第二の意味の個人主義とは、相互に密接なる關係を有する、然し兩者は必然の因果關係を有するものではない、從つて論理上は其の一を有せずして他を有する場合を考へ得る、卽ち第二の意味の個人主義なくして、第一の意味の個人主義あるは、現代の團體主義の時代が卽ち之である。第一の意味の個人主義なくして、第二の意味の個人主義のみを有する適例を擧ぐるは稍困難であるが、獨逸に於ける自由放任主義の如きは第一の意味の個人主義の色彩比較的薄弱なりし一例であらう。

本文に於て個人主義なる言を用ひたる場合は、第二の意味の個人主義を指

すのである。スチュアート・ミルが個人主義より團體主義に推移したりと云ふは、自由放任主義より國家の干渉を容認するの思想に變化したるの意味であつて、第一の意味の個人主義を指すのではない、此の意味の個人主義は自由放任主義、團體主義を通じて、一貫せる根柢を爲せるものであつて、西洋近世に於ける社會思想の底流を爲すものである。ミルは此の意味の個人主義からは遂に一歩だも叛いたことはない、而して之れ實に西洋殊にアングロ・サクソン人の特色とすべく、此の底流の有無が我々と彼等とを區別すべき主要なる根本である。而してミルの社會思想史上に於て興味あるは、單に彼が個人主義より團體主義に接近したと云ふのみではなくて、個人主義を主張する論據を從來と異る立場に置くことによつて、個人主義其の物に新生面を開き、やがて此の一路を通じて團體主義との接續を滑にした點にある。從つて彼の社會思想上の變化は前二項に擧げたるものに比すれば、一層複雜したる曲折を有し、過渡時代の面目は、此の間に於て最も躍如たるものあるを覺える。

彼が幼少の時より受入れたるものは、自由放任主義であつた。彼を育てた

空氣は個人主義經濟學の各流を網羅して居たのである。アダム・スミスは國家の爲すべき職能を縮少して、外國の侵略を防ぐことゝ、內地に於ける治安を維持することゝ、個人の企業心に放任しては完成の見込なき公益事業とに局限して、他はすべて爲すが儘に放任せよと主張した。ベンサムは政府とは、已むを得ざる害惡なり」として、其の活動を最小限度に認めんとした。極端なる國家の干渉が弊害を續出せしめたる重商主義の時代に育てる之等の先輩が、國權の範圍を縮少することに努めたのは當然であらう、次でマルサス、リカルド出でゝ、更に其の立場を敷衍し、私有財產制度の維持と、自由競爭に放任することを以て、其の經濟政策の眼目とし、かくて之をジョン・スチュアート・ミルに引渡したのである。

ミルの社會思想史の第一期は此の如く自由放任主義にあつたので、結局根本に於ては彼は終生此の立場から離れなかつた。今彼が如何なる說明の下に、此の立場を採れるかを、少しく彼自身の言に徵して辿つて見るならば、彼は「經濟學原論」第五卷第十一章卽ち卷尾に於て「自由放任卽無干渉原理の論據」と

題して之を語つて居る。彼が自由放任を主張する第一の理由は政府の干渉は個人の創意心を枯死せしめ、人間の成長を阻止すると云ふに在る。彼は言ふ。

凡ゆる個人の周圍には一の圓周がある、此には政府……假令それが一人のものにせよ、少數のものにせよ、將又多數のものにせよ……の侵入を許すべからざるものである。苟くも分別ある齡に達したる者には、何人の生活にも一つの部分があつて、此の範圍内に於ては、他の個人によりても又團體によりても、何等の制約を受くることなくして、其の人の個性は支配を許さるべきものである。……人が爲さんと欲することを妨げられ、自らよしとする判斷に從つて行動することを妨げらるゝことは、如何なる場合に於ても啻に煩累に堪へざるのみならず、夫れ丈け受動的又は能動的、肉體的又は精神的の能力の成長を枯死せしむるの傾向がある。而して其の人の内部の良心が、自然に外部よりの强制と伴ふ場合に非ざれば、强制は多かれ、少かれ奴隷の墮落を齎すものである。[1]

第二の理由は干渉の擴張は國權の增大を促し、專制政治を導き易いと云ふにある。第三の理由は、政府が多くの職能を一手に掌握するは、勞働分配の原

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, p. 943.

理に反すと云ふに在る。第四の理由は官吏は其の職務と直接利害がない故に、能率が上らないと云ふに在る。[1] 而して最後に自由放任の最大の論據として、各個人の性格の鍛錬の爲に、個人活動の範圍を擴張すべしと述ぶ。

人生の實務は人の實際的教育の主要なる一部を爲すものである。書籍と學校の訓導とは大に必要であり有益ではあるが、之なくしては行爲に人を資格づけ、目的に對して手段を適應せしむるの働に、人を資格づけるには不足を感ずる。訓導は精神的發達の必要條件の唯一つのものたるに過ぎない。他のもの卽ち殆んど缺くべからざるものは、能動的精力を潑溂として發揚せしむるに在る。勞働、工夫、判斷、抑制、すべて之等のものに對する自然 刺戟は實に人生の苦鬪難關である。……公共の利益に對しては自ら進んで活動するの慣習なき人民は――すべての共同の事柄に就て唯習慣的に政府が命令し督促することをのみ待望する人民は――僅に習慣と傳統とによつて爲し得る事柄の外は、凡ゆる事をして貰ふ人民は――其の有する能力を唯半分しか成長せしめられない。彼等の教育は其の最も重要なる部分の一つに於て缺陷ありと云ふべきである。[2]

卽ち彼は政府が多くの職能を有することによつて、民衆の活動の餘地は狹まり、爲めに人を鍛錬する人生の難行苦行の減少するを怖れるのである。文

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, p. 948.
2) 〃 〃 〃 pp. 948-949.

明が進歩するに從つて、人生の困難は益々減少する今日、個人の力、熟練、勇氣を刺戟するものを保持するの必要は愈々大であると云ふ。以上はミルが自由放任の論據であるが、彼は此の立場に於て、從來の重商主義の政策を非難する、卽ち產業保護政策を難じ、高利制限法を攻擊し、食料品價格の制限を無用なりとし獨占制度を駁し、[1] 更に結社禁止法の廢止を主張した。結社禁止法は英國に於ては、既に千八百二十四年に於て廢止せられたので、英國に就ては之を論ずるの必要はない、然し佛國に於ては千八百六十四年迄現存して居たので、彼は勞働者の團結權に就て論ずるの必要ありとして、之れが爲に一節を設けて論じて居る。彼が勞働者の團結を認むべしとの論據は純粹に個人主義の立場より來るので、勞働者に味方する者の立場より來るものではない。勞働者に團結の自由を禁止し、舊時の賃銀を以て永久に甘んぜしめんとするは、個人の自由を高唱する彼の反對する所であつて、重商主義の一表現としての結社禁止法に反對するのである。從つて彼は團結に依つて必ずしも勞働者の地位が向上することを信じない、寧ろ却て同僚を失業の災厄に陷るゝことによ

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, pp. 916-933.

つて、僅に賃銀の値上を所期し得るのみと云ふ。[1] 要するに、勞働者にとつて苦手なりし自由放任論が、此には勞働者に有利なる結果を齎すこととなつたので個人主義と勞働問題との經濟を語る一材料である。[2]

以上は彼の一般に自由放任に對する原理を述べたものであるが、ミルの勞働問題に對する自由放任の論據に付ては、別に一言を加ふるの必要がある。勞働問題に彼の眼を始めて開いたものは、マルサスの人口論であつた。マルサス人口論の第一版は自然の與ふる食料と、人間の有する自然の性慾とに、制約せらるゝ以上、境遇の改善は徒勞に歸すと云ふ。此の見解を以てすれば、啻に政府の爲すべき職能の餘地なきのみならず、各個人の爲すべき努力の餘地もない譯である。然るにマルサスは人口論第二版に於て道德的抑制なるものを認むるに至つた、此に於てか正統派經濟學者は之を以て勞働問題に對する武器としたのである。卽ち或る時、或る所に於ては、勞働者の賃銀として支拂はるべき一定の基金がある。勞働者の賃銀は此の基金を、其の數によつて除したるものに相當する。若し勞働者の數が增すか、又は基金の額が減ずれ

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, pp. 933-936.
2) 本書 第三章第三節參照

ば、賃銀の額は減少する、一部分の者の賃銀の額を增さば、他の部分の者の賃銀は減ずるか、或は全く失業の災厄に會するの外は無い。之れ卽ち彼等が勞働時間の短縮をなして、基金の減少を來すことに反對し、勞働組合の活動によつて同僚の友食を爲すことに反對する所以である。ミルは云ふ。

……賃銀は主として勞働の需要と供給とによつて決定せらる。卽ち屢々云はるゝ言に依れば、人口と資本との比例によつて決定せらる。此の場合人口とは唯勞働者階級に屬するもの、卽ち寧ろ適切に云へは雇傭勞働に服するものゝ數を意味し資本とは唯流通資本を意味する、而も其の全部ではなくて、直接勞働を買ふ爲に使用せらるゝ流通資本を意味する。

以上の如く用語に制限を附すれば、賃銀は實に資本と人口との比例的の割合によつて決定せらるゝのみならず、自由競爭の下に於ては、如何なる他の事によつても、影響せらるゝものではない。勞働者を雇入るゝ爲に使はるゝ基金の總額を增加するか、又は雇はれんと競爭する勞働者の數が減少するに非ざれば、賃銀は(勿論一般の率に就て云ふのであるが)上騰することの出來ないものである。又勞働の爲に支拂ふ基金の減少する場合か又は支拂はるべき勞働者の數が增加する場合かに非ざれば、賃銀は低落するものではない。[1]

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, pp. 343-344.

之れ所謂賃銀基金說と稱せらるゝものである。此の結果彼が勞働者の爲に採らんとする方法は、道德的抑制に依て同族の增加を抑止し、之によつて賃銀の上騰を所期せよと云ふに在る。彼は云ふ。

……彼等の考へ方は、首領又は指導者として、ベンサムに關係を持つて居ると云ふ意味でベンサム主義であつたのではなくて、寧ろベンサムの見地と近代經濟學及びハアトレー流の形而上學との結合であつた。マルサスの人口論はベンサム特有のどの意見にも劣らず、我々の旗幟であり又一致點であつた。人間の境遇はどこまでも改善し得らるゝものであると云ふ說の反駁として提唱せられた此のマルサス人口論を、我々は之とは反對の意味に於て熱心に採用し、此の說は勞働者の人數の增加の自發的制限によつて、全勞働者階級を高率の賃銀を以て、悉く就業せしめ、曩に不可能とせられし人生の改善を實現する唯一の方法を指示するものなりとした(ミル自叙傳譯一四九—一五〇頁)。[1]

卽ちミルは各個人が道德的抑制を爲すによつて、又之のみによつて其の境遇は改善せらるとした。個人の努力にすべてを歸して、國家の活動を認めなかつた、之れ彼が勞働問題に對する自由放任論の、特殊的論據である。

1) John Stuart Mill: Autobiography, p. 60.
" Principles of Political Economy, p. 373 ff
" Dissertations and Discussion, vol. II. p. 197.

若しミルが上述の個人主義を以て終始したならば、彼は過渡的思想家として扱はるべきではない、然し彼を圍む外間の形勢は、彼をして徐々として團體主義に遷らしめたのである。此の變化に與れるものは第一に、實際社會の事情に在る。マルサス、リカルドの時代に於て既に表はれた勞働問題は、ミルの眼前に於ては、更に其の勢を強めて來た、卽ち一は婦人、少年勞働者の生活狀態が公表せらるゝことによつて、勞働立法運動は始まつて、國家の干涉を叫んで來た。一は勞働組合の勢力が漸次大をなして、資本家に對抗して來たと同時に、千八百三十八年より四十八年に亘れるチャーチストの運動は、既に勞働者階級が無視すべからざる社會勢力なることを示した。彼の足下に押寄せた之等の事情が、彼をして勞働問題の重要さを悟らしめたことは、「論文集」第二卷にある "Claims of Labour" の一編がよく之を語るであらう。[1] 殊に彼の思想に影響を與へた事件は、千八百四十八年の二月革命である。ルイ・ブラン等の社會主義者が假令一時的なりとも政府を左右して、社會主義的計畫を爲さしめたことは、社會主義が單なる空論に非ることを示して、彼を動かした力は決し

1) John Stuart Mill: Dissertations and Discussions, vol. II. p. 182 ff.

て尠くはない。[1] 第二に彼を動かした影響は思想上の方面に在る。卽ち一はサン・シモン等の空想的社會主義者より來る現存社會組織の批判である。彼は云ふ。

……私は……サン・シモン派のものとは絕えず接觸を續けて居た……私は千八百三十年にサン・シモン派の首領バザアル及びアンファンタンに紹介された。そして彼等の敎義宣傳と新信徒勸進とが續いて居る限り、私は彼等の述作の殆ど總てを讀んだ。普通に行はれて居る自由主義の學說に對する彼等の批評は、私の考では重大なる眞理に充ち滿ちて居るやうに思はれた。そして私の眼が舊經濟學の甚だ制限的一時的なる價値に目覺めたのも、一部分彼等の論文に負ふ處があるのである。蓋し舊經濟學は私有財產と遺產相續とを不可侵の事實と信じ、生產交換の自由を社會的改善の究竟語と考へて居るのである。……私は彼等の社會組織が實行可能であるとも、有用な働を爲し得るものとも信じなかつたが、人間社會の斯くの如き理想の宣揚は、現在の社會を或る理想的標準に近からしめんとする他の人々の努力に、有利なる指導を與へずんば止まないだらうと感じた。[2] (ミル自叙傳譯二三七—二三九頁)。

次で彼を動かしたるものは、コムトの社會に關する說明である。コムトは個人萬能の思想を以て形而上學的思想の產物なりとして、團體の意義を宣揚

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, Preface XXIX.
2) 〃 Autobiography, pp. 95-96.

した。ミルは一方に於てコムトに對して、個人主義を辯護しつゝ、尙彼の影響を受けて集團に重を置く樣に傾いて來た。[1] 更に此の方面の傾向を助長したるものはコールリッヂ等の理想主義者の力である。彼等は國家を以て個人の內部に在る普遍我の表現なりと說明して、國家の地位を尊重し、國家の爲すべき職能の範圍を擴張せんとした。彼が理想主義に接近しつゝ、彼等の國家說に影響せられたるは、云ふを俟たざる所である。[2] 最後にテーラー夫人の感化が與れるは、彼自身が自叙傳に云ふ所である。[3] 然らば上述の如き社會の實際事情の變化と、各方面より來る團體主義的影響とによつて、彼は個人主義より離れんとしたとして、其の實績を何所に見出すことが出來るのであるか。

第一に擧ぐべきものは、彼が經濟學の著作に附したる題目である。彼は單に "Principles of Political Economy" と云はずして、之に附するに "with Some of their Applications to Social Philosophy" なる言葉を以てした。此の言の意味に就ては、種々の議論があるけれども、彼がコムトの社會學の影響を受けて、從來のマルサス、リカルド等と經濟學の取扱を異にしたるは明である。[4] 彼が自叙

1) John Stuart Mill: Auguste Comte and Positivism, p. 97.
2) 〃 "Coleridge" in Dissertations and Discussions, vol. I.
3) 〃 Autobiography, p. 141.
4) 〃 Priaciples of Political Economy, Introduction, XIII-XIV.

傳に云ふ所に依れば、

……此の書は單に抽象的科學の書でなくして、應用の書であり、經濟學を孤立の學問として取扱はずに、一の大きな全體の一斷片として取扱つたからである。卽ち經濟學は社會哲學の他の一切の分科と、極めて密接に連結した一分科であつて、經濟學の結論はそれ特有の領域に於てさへも、唯制約的に眞であるのみで、直接に其の領域內に無い原因からの、絕えざる干涉と抵抗を受けるのである。又經濟學は他の種類の考慮と切離して、實際上の指導者たる資格ありと云ふことは出來ないのである。[1]

……(ミル 自叙傳譯三三三頁)。

經濟學を以て廣汎なる社會哲學の一部として扱ひたることは、卽ち經濟學が他の社會科學よりの制約を受けることを認めたので、今や經濟學は倫理學等の忠告を顧慮せねばならない、徹底的なる自由放任の主張は此に阻止せられて、團體主義への推移を暗示したるものと云ふを得る、彼の著作の題目を此に特筆する所以は此の點に在る。

第二に擧ぐべきものは、分配論に對する彼の態度である。マルサス、リカル

1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 135-136.

ド以來分配論は、生產論と全く同じく、自然の作用に屬するもので、人爲の如何ともすべからざるものとして、自由放任を主張せられて來た。而もミルに至つて自叙傳の中に云ふ。

……普通の經濟學者は經濟學法則の名稱の下に此の二つ(筆者註生產と分配とを云ふ)を混同し、人間の努力では破る事も變更することも出來ないものと考へる。さうして吾人の地上の存在の不可變的條件に依憑する事柄と唯特定の社會組織の必然的結果に過ぎずして其の組織と併存するに過ぎない事柄とに、同じく必然性を認めて居るのである。一定の制度と習慣とを以てすれば賃銀利潤及び地代は、一定の原因によつて決定せられる。然るに此種の經濟學者は、此の必須的豫想を忘れて、此等の原因は人力の如何ともすべからざる一の內在的必然によつて、生產物の分割に於ける勞働者、資本家及び地主の所得を決定するものと論ずるのである。拙著「經濟學原論」は此等の原因が其の豫想する條件の下に於て、如何に作用するかの科學的究明をした點に於ては、從前の經濟學者の何れにも讓らなかつた。然し此の書は此等の條件を究竟のものとしては取扱はぬ範例を示したのである。自然の必然法則に依らずして之と現在の社會組織との結合による經濟上の一般法則を、此の書は單に一時的なもの、社會的改善の進步につれて大に變革を來すべきものとして取扱つた。[1]

1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 141-142.

……(ミル自叙傳譯三四六—三四七頁)

此の趣旨の表はれたものが卽ち、「經濟學原論」の分配論に關する說明である。[1] 分配現象が社會制度に依るものなりとするならば、其の所謂社會制度の活動の中、主要なるものは、政府の活動を擧げねばならない。之れ卽ち、ミルの分配論が團體主義への推移を示す所以である。

第三には社會主義に對する態度を擧ぐべきである。彼は社會主義は決して實行し得べからざるものではないと云ひ、一々之に對する反對論を反駁して居る。[2] 反對論の第一は社會主義の時代に於ては、人は其の分前を增すの望がない爲に、勞働を回避するであらうと云ふことである。ミルは之に對して云ふ、現時の資本主義の時代に於て、誰か此の憂なしと云ひ得るか勞働に對して正當の分前を得ざる點に就ては、資本主義は決して社會主義に勝るものではない。社會主義に對して云ひ得る反對は當然に資本主義に對しても云ひ得べきである。然し人は必ずしも利益のみで動くものではない。人の有する公共の心と社會的名譽心とが、彼をして其の義務を盡さしめて餘りあるで

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, pp. 21, 199-200.
2) 〃 〃 〃 pp. 204-210.

あらう。反對論の第二は產兒の制限をする必要がなくなるので、人口過剩に陷るであらうとの事である。然し之に對しても社會主義の時代は、卽ち產兒の制限を當然に伴ふの時である故、問題は消滅すると云ふ。反對論の第三は勞働を公平に分配することの困難である。然し如何に其の分配が困難であらうとも、其の最惡の方法も尙、現代の分配の不平等、不正當には比すべくもない、人間の有する知慧は之を案ずることが出來るであらうと云ふ。反對論の第四は社會主義の世に於ては自由が失はれると云ふことである。然し現時の社會組織に於ても眞に自由を有するもの幾人かあるべき、資本主義は此の點に於ても亦社會主義を難ずるの資格を有しない。かくて彼は社會主義の反對を駁して、其の實現の未來を翹望する。

……併しながら、究竟の改善に關する私達の理想は遙に民主々義以上に出て居て、我等を社會主義者と云ふ一般的稱呼の下に分類したであらう。私達は大抵の社會主義的組織が必然含むと推察される所の個人に對する社會の壓制に最も强く反對したけれど、私達は又望んで居た。社會が最早徒食者と勤勞者とに分割されざる時が、働かざる者は食ふべからずと云ふ規則が、啻に赤貧者のみならず凡ての人々に適用せらるゝ時が、今日大いに行はれてゐる如く勤勞の產物の分配が出生と云ふ單なる偶然事に依つて定められず、萬人公認の正義の原則に從ひ合意に依つて行はれる時が、單に自身のみの爲でなく、自分が屬する社會と共に相頒つべき利益を得る爲に、人類が奪鬪努力する事が最早不可能にあらず又た不可能と考へられぬ時が來る事を。將來社會問題は、最大限の個人的行動の自由を、地球上の生產原料の共有と協同勞働の利益に於ける萬人平等の參加とにいかに結合せしむべきかにあると私は考へた。[1]

……(ミル自叙傳譯三二六—三二七頁)。

彼は社會主義が今直に實現して然るべきものとは思はなかつた、問題は改善されたる私有財產組織の時代と社會主義の時代との比較に在る。現在其の儘の私有財產組織が社會主義に劣るは言ふを俟たない。然し改善を加へた私有財產の時代と社會主義の時代と、何れが眞に自由の最大分量を與へ得べきかに在る。彼は此の點に於て社會主義に肯定を與ふるを躊躇する。[2] 然しそが私有財產組織に代るべきか否かは、一に將來の經驗に係ることで、決して世人の云ふが如く一片の空想と扱ふべきものでないと云つて、其の論を結んで居る。[3] 個人主義の寵兒が社會主義に對する這般の同情は、誠に天津橋上杜

1) John Stuart Mill: Autobiography, pp. 133, 95–96.
2) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, p. 211.
3) „ „ „ pp. 215–216.

鵑を聞くの思なきか、彼が思想の推移を卜する一好例たるを失はない。

次に擧ぐべきものは、私有財産に對する彼の態度である。彼は社會主義に對し上述の如き同情は表したが、結局に於て『私有財産と自由競爭との上に建てられたる社會』は尙存續すべく、人間改善の現時の狀況に於ては、企圖せらるべき目的は『個人所有の組織の廢止に非ずして其の改良に在る』とする。[1] 彼に依れば、所有權の制度とは『彼又は彼女が自己の努力によつて生産したるもの、又は之を生産したるものより暴力又は詐僞を用ゐることなくして、贈與又は正當なる合意により獲得したるものを、排他的に處分するの權利を』云ふ。[2] かくの如き權利を認むるの理由は其の報酬を努力に伴はしむることによつて其の努力に刺戟を與へんとするに在る。かゝる刺戟を個人に加ふることは、各個人の能率を增し、やがて社會全體の幸福を齎するに在る。之れ彼が所有權を肯定する根據である。然らば此の根據に依らざる所有權制度は彼の認めざる所である。此の見地より見る時に、現時の社會は決して、眞正の所有權制度に準據して居ない、認むべき處に所有權を認めず、認むべからざる處に所

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, p. 217.
2) „ „ „ p. 218.

有權を認めて居る。個人所有の制度が正しきや否やは、現時の社會を以て議論の對象とするを得ぬ、眞にあるべき所有權制度の社會を對象とすべしと說く。[1] 然らば彼の所謂あるべき個人所有の組織に於ては、現時と如何なる點が異るか。先づ當事者が遺言なくして死亡したる場合に於て其の遺産を死者と遠緣の親族に相續せしむるの必要はない、宜しく之を社會の所有とすべしと說く。[2] 相續は當事者の所有物を處分し得る權利の一部である。然しそは唯當事者の意思の表示されたる場合に限つて、不當に之を擴張するの必要はない。次に假令遺言ありし場合と雖『快適なる獨立を爲し得る資力を供するに足る』[3]以上を相續せしむるの必要を疑ふ。

若し此の制限が實際に有効たらしめ得るならば、其の利益は大なるものがあるであらう。最早少數の者を過當に富ましむることに使はれざる富は、或は公共の有用の目的に獻げられるか、或は個人に與へらるゝとしても、より多數の者の間に分配せられるであらう。虛榮の爲か或は不當の權力使用の爲より外には、何人にも個人の目的の爲に必要なるべき筈のない巨大の富は、今より數の減ずると同時に、虛榮以外に富の與へ得る閑暇とすべての眞實の愉快とを持つた容易な境遇に、夥大の人々を置

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, pp. 208-209.
2) „ „ „ p. 223.
3) „ „ „ p. 228.

くことが出來るであらう。[1]

此の如き制限を設くるも、遺言者の受くる打擊は決して大ではない。之が爲に努力の刺戟を減ずるの憂はないであらう、然らば以上の如き制限を置くことは、私有財產を認むる根據に反するものではないのである。[2]

ミルは更に土地所有權に論及する。土地は何人も生產したものではない、從て自己の生產したるものを當人に與へんとする一般所有權の論據は、土地に就ては之を適用するを得ぬ、土地に所有權を許すは、砂を化して黃金とせしむるが爲である。從つて土地の所有者が土地の改善者たる限りに於てのみ、土地の所有は許さるべきである。

「所有權の神聖」が論ぜられる時に於ても、常に記憶せらるべきことは、這般の神聖は土地の所有權に就ては同一程度に論ぜらるるものではないと云ふことである。何人も土地を作つたのではない。土地は全人類の原始的相續財產である。土地に就て個人の所有權が認めらるゝや否やは、全く一般に便益あるや否やの問題である。土地の私有が便益を與へざる場合に於ては、そは不正なりと云ふべきである。他人の生產したるものより排除せらるゝことは、何人に對しても毫も辛いとではない、他人

1) John Stuart Mill: Prinoples of Political Econony, pp. 228–229.
2) " " p. 228.

は彼の爲に之を生產する義務はなかつた、全然存在せざりしやも知れざるものに分前を得ざりしとて、毫も失ふ所あるものではない。然し此の世に生れて、すべての自然の賜物が既に占有し盡され、新に來るものに一物をも餘されざるは辛い事である。[1]

又他の所に於て云ふ。

……私にとつて殆ど公理と見ゆることは、土地の所有權に就ては嚴格に解釋さるべきことである。疑ある場合にはすべて、所有者の不利益に解さるべきであると云ふことである。動產及び勞働の生產物たるすべての物に對する所有權に就ては、之と正反對である。之等に就ては使用及び排他の權利は、他人に對して積極的の弊害が之より生ずる場合を除いては、絕對的なるべきである。されど土地に就ては、積極的の利益を生ずるものとの證明あるに非ざれば、如何なる個人に對しても排他的の權利が許さるべきではない。共同の相續財產たる土地の一部に假にも排他的の權利を許すと云ふことは、一部だも所有せざるもの一方に存する以上は、既に一個の特權である。……特權即ち獨占は唯止むを得ざる害惡としてのみ許さる。之を償ふ利益が伴ふ以上に及ぶ時そは正義に反することゝなる。[2]

上述の所說をマルサス、リカルドに比較するならば、隔世の感あるであらう。然し重商主義の獨占、專制と戰ひたる精神を擴張し來るならば、所有權の制限

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, p. 233.
2) " " " pp. 234-235.

は當然の歸結であらう。論理は此に來るが當然でも、事實に於て此に來れるはミルに至つて始まるのである。

第五に擧ぐべきは、地代に關する彼の主張である。地代が如何にして生ずるかの原理はリカルドによつて說明せられた。彼は之によつて毫も地主の利益に反する結果を生ずることを豫期したのではない。寧ろ地代は不當に地主の釣上ぐるものでなくて、人口の增加、穀價の騰貴が齎すものなることを說いて、地主をして不當の攻擊より防ぎたるの傾がある。然し若し地代の發生及び增加が地主の勞力に依らずして、社會的原因に依るものとするならば、反對に不勞の所得なりとの非難を招くの可能性がある。而して之を企てたるものがスチュアート・ミルである。彼は云ふ。

……所有者によつて何等の努力も犧牲も拂はるゝことなくして、絕えず增加する傾ある所得の一種がある。之等の所有者は自らは全く袖手傍觀しつゝ、自然の事情により累進的に富まさるゝ社會の一階級をなすものである。此の如き場合に於ては、國家が其の所得の生ずるに從ひ、增加したる富の全部又は一部を使用するも、私有財產の據て立つ原理に反するものではない。こは本來何人より何物を奪ふことではない、そは唯偶然によつて生じたる富をして、特種の階級の富に不勞の增加たらしむる代りに、社會の利益の爲に沒收するものたるに過ぎない。

今や地代の場合が實際に之に當る。……地主は働くことなくして、危險を冒すことなくして、經濟を考ふることなくして、云はゞ眠れる間に愈々富む。社會的公正の一般原理に立つて、彼等は富の此の種の增加に對して、果して何の要求の資格ありや。[1]

彼は啻に議論として地代公有說を述ぶるのみならず、自ら千八百七十年借地改良協會(Land Tenure Reform Association)を組織して、其の會頭となり、地主の不當なる要求に反對の運動を起した事は論文集第四卷揭載の "Papers on Land Tenure," 1870-73. に詳である。地代公有を唱ふること既に、從來の經濟學說の跡を脫する況んや其の所說の後年に及ぼしたる影響を見る時に、其の感更に深からざるを得ぬ。如何となれば彼の地代不勞所得說より出發して、フェビアン協會の人々は、不勞所得は敢て地代のみに限らない、此の種の性質は利潤に就ても賃銀に就てもあり得る、寧ろ進んで一切の生產手段を公有とするに如かずと唱ふるに至つたからである。[2] 彼が個人主義の經濟學より一歩

1) John Stuart Mill: Principles of Political Economy, pp. 817-818.
2) Sidney and Beatrice Webb: History of Trade Unionism, 1911, pp. 146-147.
" Problems of Modern Industry, 1902, pp. 209-228.